

「大学入試改革」 どう変えるのか

—主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために—

平成27年度

# 大学改革 シンポジウム 報告書

## 開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

島根大学の服部でございます。

本日は、島根大学の大学改革シンポジウムとして入試改革に焦点を当てまして、「『大学入試改革』どう変えるのか」ということでシンポジウムを開催する運びとなりました。このシンポジウムにつきまして、このような多数の出席をいただきまして、まことにありがとうございます。また、このような多くの方の出席いただけるということは、それだけ大学入試、入試改革ということについて皆さんが大きな関心を寄せていただいたものと、改めてその責任の重さを感じているところでございます。

皆さん御存じのように、大学入試につきましては、センター試験の改革と含めてこれから大きく変わろうとしております。あわせて各大学の個別試験につきましても、それぞれの大学が今後いかによい学生を選抜し、育てていくかということに焦点を当てた入試改革がこれから始まっていくところでございます。島根大学につきましても、このようなことで、今後入試改革について真剣に議論し、新しい入試制度としての育成型入試の構築に向けて今議論を始めたところでございます。本日のシンポジウムは、その改革の一環としてその方向性を定めるべく、また、我々が大学としていかに入試というものを考え、皆さんと意識を共有していくかということでのシンポジウムでございます。

本日は、基調講演として、リクルート進学総研所長、また文部科学省の高大接続システム改革会議の委員をされております小林浩様をお迎えして、後ほど基調講演をいただくことになっております。また、事例紹介として、島根県立松江北高等学校長の泉先生、それから、広島県立西条農業高等学校長の立上先生、本学の地域未来戦略センター長である松崎のほうから3件の事例紹介をさせていただき、その後、パネル・ディスカッションをさせていただきたく考えております。また、本日は、主催は島根大学、それから、共催として国立大学協会ということでございまして、国立大学協会から一鶴様、それから石澤様が御出席いただいております。また、入試改革ということでございまして、大学入試センターのほうからも、事業部事業第1課の課長補佐、内田和人様、それから、同じく、事業第1課の企画調査係であります青木智美様も御出席いただいておりますので、後ほどディスカッションの際にでも、また御意見を賜ればうれしく存じます。

本日のシンポジウムが島根大学の入試改革の方向性を定めるために大きな一助になることを祈り、また、島根大学としては全国の大学に先駆けて新しい形の入試を作成すべく、これから検討していきますけれども、少しでもこのシンポジウムが役立つことを祈っております。皆様の活発な御議論、それから意識の共有等をさせていただければ幸いに存じます。これから3時間ほどのシンポジウムでございますけれども、このシンポジウムが実り多いことを祈りまして、挨拶の言葉とかえさせていただきます。



# 平成27年度 大学改革シンポジウム

## 「大学入試改革」どう変えるのか

—主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために—

開催日：平成 27年11月6日(金)  
会 場：くにびきメッセ 小ホール  
主 催：島根大学  
共 催：一般社団法人国立大学協会

## 目 次

### ■ 開会あいさつ

島根大学長 服部 泰直

### ■ 第1部

#### ○基調講演【高大接続改革で何が変わるのか?】..... 1

小林 浩 (リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員)

### ■ 第2部

#### ○パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】..... 23

パネリストによる取組事例紹介

1. 泉 雄二郎 (島根県立松江北高等学校 校長/島根県公立高等学校長協会 会長) ..... 24

2. 立上 良典 (広島県立西条農業高等学校 校長/広島県高等学校長協会 会長) ..... 34

3. 松崎 貴 (島根大学生物資源科学部 教授/島根大学地域未来戦略センター長) ..... 41

#### ○総合討論 ..... 58

### ■ 付 録

アンケート結果 ..... 68

シンポジウムポスター ..... 69

# 第 1 部

---

## 基調講演

【高大接続改革で何が変わるのか？】

小林 浩 (リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員)

## 基調講演 高大接続改革で何が変わるのか？

### 「高大接続改革について ～制度改革でどう変わるのか～」

リクルート進学総研所長

リクルート「カレッジマネジメント」編集長

文部科学省高大接続システム改革会議委員 小林 浩

皆様、こんにちは。ただいま御紹介にあずかりましたリクルート進学総研所長でリクルート「カレッジマネジメント」編集長の小林でございます。きょうはよろしくお願いたします。

きょうは、いただいたテーマが高大接続改革についてということで、制度改革で大学、高校がどのように変わっていくかというような形でお話をさせていただきたいというふうに思っています。いつも私の講演、最初におわびを申し上げているんですけども、私がせっかちで早口なものですから、そして、この資料もかなり膨大な量が入ってて、普通は1時間半ぐらいのものを1時間にぎゅっとまとめて御説明、共有させていただくことにします。ですので、皆さん、スピードラーニングだと思って、キーワードだけお持ち帰りいただけるように、ストーリーをつくってお話ししますので、御理解いただければというふうに思っております。略歴のほうは先ほど御紹介ありましたので割愛しますが、システム改革会議の前の高大接続特別部会の委員もさせていただきました。

最初に、こんなスライドを入れております。過去があって現在があって未来があると。何でこんな図を入れてるかという、未来には2つあるというふうに言われています。「ワーク・シフト」いうロンドンビジネススクールのリンダ・グラットンさんという方が書かれて、非常におもしろい本なので読んでいただければというふうに思いますが、一つは漫然と迎える未来ですね、目の前の問題に行き当たりばったりで対処し、対応が後手に回ると、もう一つが主体的に築く未来、将来を予



2015年11月6日  
リクルート進学総研所長  
リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
小林 浩

RECRUIT

<略歴>

小林 浩  
リクルート進学総研 所長  
リクルート「カレッジマネジメント」編集長

株式会社リクルート入社後、グループ統括業務を担当、「ケイコとマナブ」企業業務を経て、大学・専門学校の子生募集広報などを担当、経済同友会に出席し、教育政策推進の所定にかかわる。その後、経営企画室、コーポレートコミュニケーション室、会長秘書、特別顧問政経秘書、進学カンパニー、ソリューション推進室長などを経て2007年より現職。

月刊『広報会議』にて「外から見た大学」連載（2009年～2013年）  
文部科学省「新法に基づく政策形成の在り方に関する懇談会」委員（2009年～2011年）  
文部科学省「大学ポートレート（仮称）推進委員会」委員（2012年～2014年）  
文部科学省中央教育審議会高大接続特別部会臨時委員（2012年～2014年）  
文部科学省中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学ワーキンググループ臨時委員（2013年～2014年）  
文部科学省専修学校生への経済的支援の在り方に関する検討会委員（2014年～）  
文部科学省高大接続システム改革会議委員（2015年～）。

予測が難しい未来に向けて

環境が大きく変化の中で、  
未来のありたい姿をイメージし、  
そこに到達するための道筋を  
広く「デザイン」する工程表が求  
められている

未来  
Mission

現在

現在  
Mission

創設時  
（過去）  
Mission

「漫然と迎える未来」  
⇒ 目の前の問題に行き当たりばったりで対処、  
対応が後手に

「主体的に築く未来」  
⇒ 将来を予測し、知恵を働かせて  
主体的に未来を選択する

RECRUIT

## 高校、大学、入学者選抜の 一体的な改革の動向

～高大接続答申を受けて～

測し、知恵を働かせて主体的に選択する未来ということで、環境が大きく変化する中でありたい姿をイメージして、そこに到達するためのデザインを今つくっている最中じゃないかと。現在から積み上げで考えていくとなかなか難しい改革だと思いますが、未来からさかのぼって今考えられているというような議論だと思っていただければというふうに思います。8月に出た教育課程の中間まとめのところも、2030年に社会を生きる若者へみたいな形のメッセージで出されていたというふうに思っております。

### 1) 高校、大学、入学者選抜の一体的な改革の 動向 ～高大接続答申を受けて～

まず、高大接続答申を受けてということでお話をさせていただきます。もう皆さん御存じのとおり、中央教育審議会というところにいるんな分科会があって、大臣の諮問によって議論をしているところですが、もともと高校までの案件は初等中等教育分科会、大学の案件は大学分科会というところで、ある意味、世の中の縦割りで議論が進められてきて一緒に議論をされることはありませんでした。今回初めて高大接続特別部会ということで、高校と大学を初めて一緒に議論をするというふうなことが行われておりました。

じゃあ、そもそもこの高大接続の議論のとはどこかという、私はここだと思っております。2011年の11月に、中教審の中に初等中等教育分科会、先ほどの中に高校教育部会というのが20年ぶりにできました。2010年には民主党政権下で高校教育が無償化されました。そうしますと、ほぼ高校までの進学が義務教育と同じような状況になってくるというふうなことで、非常に高校教育が多様化したというふうな時期だったというふうに思います。

そこで、高校教育部会のほうで出た3つの課題というのがあります。それが、非常に多様化した高校教育の共通の目的とは何でしょうか、2つ目が、余りに多様化した生徒の実態に合わせてどのように学習指導を行って

いくか、3つ目に、高校における学習評価、学校評価をどのように行って質保証を図っていくかというようなことが出されました。その中で、今後の方向性として、一つが、高校で共通して最低限身につける力、これをコアの学力というふうに設定して、それを高校の学習到達度テストではかりましょうということが出されておりました。これは今の基礎学力テストのもとだというふうに思っています。そのほかに、各学校が教育目標を明確にして評価する質保証の仕組みを構築するというのが前提にあります。ここから文部科学大臣から諮問をされまして、選抜機能を果たせず早期化する大学入試、勉強時間の少ない日本の大学生と高校生、知識偏重、点数至上主義、あるいは一発勝負による選抜ということで諮問されたということだというふうに思っております。

### 教育改革の背景

#### ～グローバル化とユニバーサル化の進展～

こういった教育改革の背景、今いろんな教育改革が起こっておりますが、2つあるというふうに思っております。一つがグローバル化、一つがユニバーサル化。ユニバーサル化は日本語に直すと大衆化というふうに言われています。グローバル化の文脈でいいますと、社会環境が大きく変化することによって求められる人材像が変化しているということになります。従来は欧米をキャッチアップして肩を並べるための教育ということで、高度成長期ですね、人口ボーナス期、多分ここにいらっしゃる皆さんは人口ボーナス期を生きてきた方々だというふうに思います。どんどん人口がふえてくるので安定した労働力ですね、



欧米というある意味モデルがあってそこにキャッチアップしていくということ、均質的で正解を早く効率的に求める力というのが求められてきました。今後、現在もそうなってきたと思いますが、グローバル化、このグローバル化というのは欧米化ではなくて、多極化というふうに言われています、国境がなくなっていくと。今、2020年までに人口がどこがふえてくるかという、欧米ではなくて東南アジアとかインドとかいったような東南アジアが人口がふえてくるというふうになっております。なので、毎日イスラムの問題とかってということが課題になってくると。2050年に向けてはどうかというと、今度ナイジェリアを中心としたアフリカが人口がふえてくるというふうに言われています。

そうしたグローバル化の中で、2025年までの世界の留学生を見てみると、現在の、世界各国全部を合わせると450万人ぐらい留学生がいるというふうに言われています。これが10年後、2025年には800万人にまでふえるというふうに言われています。その多くがアジアで動いていくと。ある大学の先生に伺ったら、アジアの学生はいとも簡単に国境を越えてくるというような表現をされていました。国境を越えて人材が流動する時代になってきて、インドや中国の高校生は今進路指導でどうしているかという、世界地図を見ながら、どこの国の大学に進学するかというような議論をしているそうです。きょうの朝刊をごらんになった方いらっしゃると思いますが、TPPで、その域内で人がもっとビザを簡単にして行き来ができるよということ、広域に人材が動くということがもう間近に近づいてきているというような状況です。

一方で、日本はどうかというと、人口減少期に入ってきます。今まで経験したことのない時代です。人口ボーナスに対して人口オナーズという言い方をします。人口オナーズは日本語に直すと負荷がかかるという意味だそう

## 文部科学省 中央教育審議会とは

文部科学大臣の「諮問」によって、文部科学大臣または各行政機関の長に意見を述べる(答申)

分科会の名称	主な所掌事項
教育制度分科会	1. 豊かな人性を備えた創造的な人材の育成のための教育改革に関する重要事項 2. 地方教育行政に関する重要事項
生涯学習分科会	1. 生涯学習に係る機会の整備に関する重要事項 2. 社会教育の振興に関する重要事項 3. 視覚教育に関する重要事項
初等中等教育分科会	1. 初等中等教育の振興に関する重要事項 2. 初等中等教育の基準に関する重要事項 3. 教育職員の養成並びに資質の保持及び向上に関する重要事項
大学分科会	大学及び高等専門学校における教育の振興に関する重要事項
スポーツ・青少年分科会	1. 学校保健、学校安全及び学校の施設に関する重要事項 2. 青少年教育の振興に関する重要事項 3. 青少年の健全な育成に関する重要事項 4. 体力の保持及び増進に関する重要事項 5. スポーツの振興に関する重要事項
高大接続特別部会	大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について調査審議すること

## <経緯>中央教育審議会(中教審)における高大接続の動き

2011年11月 中央教育審議会に初等中等教育分科会に高等学校教育部会設置  
⇒1991年答申以来、20年ぶりに高校教育のあり方について議論

### 高等学校教育の3つの課題

- 1) 高校教育の共通目的は何か
- 2) 多様な生徒の実態に合わせて、よりきめ細やかな学習指導をどのように行うか
- 3) 高校における学習評価、学校評価が不十分。高等学校の質保証をどう図るか

### 今後の方向性

- 1) 高校で共通して最低限身に付ける力のコアを設定(高校学習到達度テストの検討)
- 2) 各学校が教育目標を明確にし、評価する質保証の仕組みの構築

2012年8月28日 文部科学大臣から諮問  
「大学入学選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について」

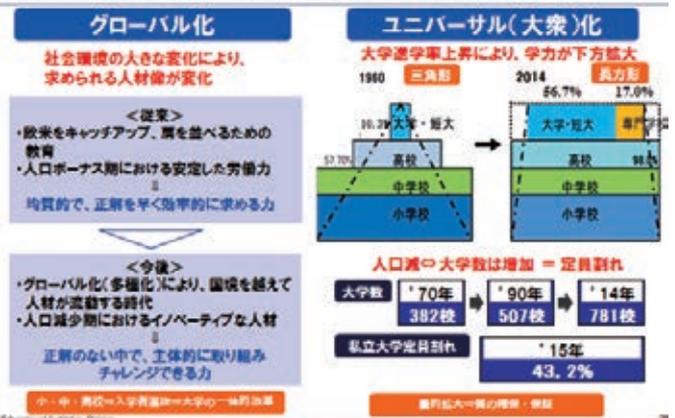
2012年9月 高大接続特別部会が中教審直下に新設  
⇒1年を目途に大学入試選抜の在り方を検討する

選抜機能を果たせず、早期化する大学入試

短時間での少ない日本の大学生と高校生

知識偏重、点数至上主義による選抜

## 教育改革の背景～グローバル化とユニバーサル化の進展～



## 今の入試制度の何が問題なのか?

入試における「高校の学力把握」と「大学の選抜」のダブルバインド

	(1) 教育上の接続 = 学力把握	(2) 進学先選択上の接続 = 選抜
アメリカ・欧州	共通テスト ①資格試験(バカロレア、アビトゥーア、GCE)、②任意の共通テスト(ACT, SAT)	個別学力試験なしの選抜(書類、面接など) 別個の共通・個別試験があるのは英仏のごく特殊校
日本	なし(高校卒業は高校長の権限)	①個別学力入試 ②AO・推薦入試

### センター入試の課題

- ・55万人受験、6教科29科目にまで拡大、適用面での負担が限界に(リスクの増大)
- ・知識偏重型、一斉勝負の形式

です。ボーナス期はいいことしかなかったですが、減少期は負荷がかかってくる。そうした中で、若者が少なくなってくる中で、一人一人がイノベーティブな人材であるということが求められてきています。ある意味、正解のない中で主体的に取り組んでチャレンジできる力というのが求められてきてると。これ大学だけで変えるのは難しいでしょうということで、小中高入学者選抜を一体的に変えていこうということになっています。

また、ユニバーサル化の文脈でいきますと、左側が1960年、こっちが現在になります。1960年代は高校に進学するのが約6割、大学に進学するのが1割しかいなかったわけですね。ですので、45人学級ですね、小学校のいでくと、4、5人しか大学行かない。新聞で私の履歴書とか私の交友録を見ると、社長の友人はみんな学者だったりとか医者だったりとかするのは、この時代はエリートだったからですね。今、これが台形を通り越して長方形になったというふうに言われています。高校も98%、ほぼ100%に近い。地方に行って保護者にインタビューすると、こんな保護者がふえてきています。ただだから高校行かせてるんだというような保護者も少なくない状況になっています。短大、大学合わせて56%、大学だけで51%、専門学校が17%いるんですね。1960年には専門学校制度がありませんでした。1970年代に専門学校制度ができて、合わせると約8割が高等教育機関に進んでると。ここにまた新しい学校種と実践的な職業教育をするような新しい学校種をつくるというような議論も進められています。その中で大学の数は倍にふえてます、70年からですね。今、高校生の保護者の世代が90年ですけども、そこから比べても1.5倍になってきているというような状況です。なので、ことしの私立大学の定員割れは43%ですね、半分近くが定員割れになっているというような状況で、量を拡大する時代から質を確保、保証する時代に変わってきたというふうなことが言えるとい

うふうに思います。

### 今の入試制度の何が問題なのか？

じゃあ、今の入試制度、一体何が問題なんですか。これは審議会で出された資料なんですけども、入試における高校の学力把握と大学の選抜のダブルバインド、二重の足かせということが言われていました。教育上の接続、これを学力の把握、それから進学先選択上の接続、これを選抜というふうに言って、先進諸国と比べるとアメリカやヨーロッパは学力の把握を共通テストで行います。ヨーロッパは資格試験、フランスのバカロレア、ドイツのアビトゥーア、イギリスのGCEという形ですね。アメリカは任意の共通テスト、ACT、SATという形で行いまして、学力試験を共通で行いますので、個別選抜では基本学力試験はありません。書類ですとか面接、エッセイっていうのをつくりながら、あとは奨学金なんかを活用して進学先を選んでいくというようなことになっています。

日本は共通テストがありません。個別の学力試験、AO推薦入試という形で進められています。この審議会の中で、ある先生が調べてこられたところ、日本の個別試験、区分別にいうとどれくらいあるかということ、何と1万2,000以上、入試の種類があるということですね。高校の進路指導の先生、大変だというふうに思います。センター試験の課題ですね、55万人受験して、6教科29科目まで拡大して運用面での負担が限界になってきていると。ことしセンター試験の前日、私、長崎の大学にお邪魔してたんですけども、そこで何と1時間置きに新聞社から電話がかかってきました。何か問題起こってませんか、何か問題起こってませんかというふうな、そういった笑い話じゃないことが本当に起こってるんですね。知識偏重、一発勝負という形で、センター試験の日にインフルエンザにかかったら終わりというような状況になっています。

### これからの高大接続の考え方

じゃあ、どう変えていこうかというところ

なんですけども、これ、私が言ってるんじゃないで、教育再生実行会議が言ってるんで御容赦いただきたいんですが、今までの高校教育は受け身の教育でしたということを言ってます。これをどんなふうな表現で言われていたかという、チョークアンドノート型の学習というふうに言っていました。先生が黒板にチョークで書いて生徒はノートに書き写して知識を吸収するというような、チョークアンドノート型の学習という言い方をされてきました。大学もそれを100人教室、300人教室でやってるのが今までの教育だったんじゃないかと。入学者選抜にいろんな負荷がかかっていたのではないかとこのように言われていました。

例えば、高校生の学習意欲の喚起、高校生が勉強するのは卒業するためではなくて受験があるからだということですね。それから、高校における幅広い学習の確保、これが何かということ、勉強する科目は受験科目にあるからだということですね。世界史未履修問題というのを覚えていらっしゃる方も多いと思います。世界史は必履修科目ですよ。しかし、特に進学校の私立理系クラスなんかでいうと、世界史を履修しなくて、受験対策としてその時間を数学に充てたりというようなことが問題となりました。それから、高校における学力の状況の把握、これも共通テストではわかるわけではなくて、業者がやる模試で、偏差値で序列化されているというような状況です。大学も同じで、大学の教育水準や教育の質の評価を何で行っているかという、これ大学側が言ってるわけではなくて業者がやる模擬試験で序列化されていると、卒業時は何も評価するものがないというような状況です。

これを変えていこうということで、高校は高校で質の保証をしていきたいと思いますということで学習到達度テスト、主体的に学ぶ力を育みましょうということで、ここに高等学校基礎学力テストが入ってくると。ということで、高等学校基礎学力テストは第一義的には入学者選抜ではないということを言ってるわけで

す。つまり高校の質の保証として学習到達度テストを入れると、それが今基礎学力テストというふうになっているということです。大学は大学で質的転換を図りながら志願者の意欲や適性、総合的な能力を多面的、総合的に評価していこうということで、大学入学希望者学力評価テストというふうに通共通テストを変えていながら、各大学の個別選抜を変えていこうというような大きな仕組みになっています。

### 高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

それでは、去年の12月22日に出た高大接続改革答申ですね、この中身45ページぐらいあるので、もちろんここに来ていらっしゃる皆様ももうお読みいただいているとは思いますが、念のため1ページにまとめてみましたんで、共有をしたいというふうに思います。大体こんなことが書かれています。現状の高校教育、大学教育、入学者選抜は、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力、判断力、表現力や主体性を持って多様な人々と協働する態度など、真の学力が十分に育成、評価されていないというふうに書かれています。高校教育については、学習指導要領を抜本的に見直し、育成すべき資質・能力の観点から構造の見直しや主体的、協働的な学習指導法であるアクティブ・ラーニングへの飛躍的充実を図るというふうに言っています。教育の質の確保、向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、高等学校基礎学力テストを導入すると。ここでも高等学校基礎学力テストの目的は教育の質の確保・向上であり、生徒の学習改善であるというふうになっています。

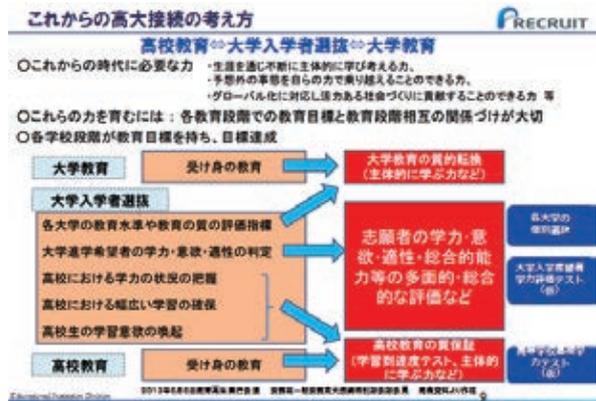
大学教育については、学生が高校までに培った力をさらに発展・向上させるため、ここが重要になります、個々の授業科目等を越えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立するというふうに言っています。大学で各授業ごとのシラバスはつくっているというふうに思います。それを体系化してくださいということを言ってるわけですね。カ

リキュラム・マネジメントを確立してください。欧米等ではカリキュラムにナンバーリングというのがされていて、基礎的なものから100番台、200番台、300番台、400番台というふうに体系化されていて、それができていると単位の互換とかが容易になってくると。大学入学者選抜においては、現行のセンター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に思考力・判断力・表現力を中心に評価する新テストを導入するというふうに言っています。個別選抜については、学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法ということが書かれています。学力の3要素は、学校教育法上に書かれているんですが、高校の先生は皆さん知っているんですが、意外と大学の先生方が御存じないというような状況があるというふうに思います。ですので、ちょっと後で簡単にまとめております。学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法をしてくださいと。具体的な選抜方法に関する事項を各大学がその特色に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化してくださいと。これを法令上位置づけるというふうに言っています。多分、設置基準とかそういうところに入ってくるのではないかとこのように思います。

### これからの社会で求められる「確かな学力」

じゃあ、学力の3要素というのは何でしょうかということ、学校教育法の第30条第2項に書かれています。基礎的・基本的な知識・技能の習得、これがまず1つ目。2つ目が、得た知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力、3つ目が、主体的に学習する態度というふうに書かれています。これを昨年12月に出された答申の中ではちょっと読みかえをしています。言ってることは変わらないんですが、社会で自立して活動していくために必要な力という観点で捉え直しています。

ちょっと戻りますと、なぜかということ、これが今まではこの学力の3要素があるんですけども、どちらかというと、入学者選抜では

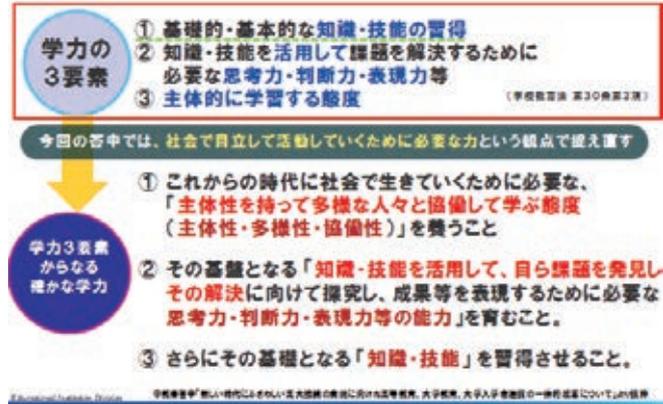


**高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(案)**

- 現行の高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜は知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性をもって多様な人々と協働する態度など、**実の「学力」**が十分に育成・評価されていない。
- 高等学校教育については、**学習指導要領を法的に見直し**、育成すべき資質・能力の観点からの構造の見直しや、**主体的・協働的な学習・指導方法であるアクティブ・ラーニングへの規制的充実を図る**。
- 教育の質の確保・向上を図り、生徒の学習改善に役立てるため、**新テスト「高等学校基礎学力テスト(仮称)」を導入**。
- 大学教育については、**学生が、高等学校教育までに培った力をさらに発展・向上させるため、個々の授業科目を超えた大学教育全体としてのカリキュラム・マネジメントを確立するとともに、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶことのできるアクティブ・ラーニングへと質的に転換する**。
- 大学入学者選抜においては、**現行の大学入試センター試験を廃止し、大学で学ぶための力のうち、特に「思考力・判断力・表現力」を中心に評価する新テスト「大学入学者選抜学力評価テスト(仮称)」を導入し、各大学の活用を推進する**。
- 個別選抜については、**学力の3要素を踏まえた多面的な選抜方法をとるとし、(中略)具体的な選抜方法等に関する事項を、各大学がその特色等に応じたアドミッション・ポリシーにおいて明確化する**。このために、アドミッション・ポリシー等の策定を法令上位置づけるとともに、**大学入学者選抜実施要領を改正する**。

資料「新しい時代にもとめられる「高大接続の接続」に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」より抜粋

### これからの社会で求められる「確かな学力」



**「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入について** (中央教育審議会(第101回)(9月28日)資料より)

**1. 基本的事項**

**① 目的**  
 ○ 高校生が身に付けるべき**基礎学力の確実な習得**に向けて、**高校段階における生徒の基礎学力の定まらぬ把握及び提示できる仕組みを設けることにより、生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図るとともに、その結果を相違改善等により、生がすることにより、高校教育の質の確保・向上を図る。**

**② 対象者**  
 ○ 上記目的のより確実な達成を目指す観点から、**【学校単位での参加を基本としつつ、生徒個人の希望に応じた受検も可能】とする。**  
 ○ できるだけ多くの参加を促すため、問題内容、実施時期・方法の工夫や、**仲間等での高校教員の参画を検討。**

**2. 具体的な実施設計の考え方**

**【現行学習指導要領(平成31年度～)】**

**① 対象教科・科目**  
 ○ 円滑に導入する観点から、**国語、数学、英語での実施**(一部の教科・科目を選択して受検することも可能とする)。  
 ○ 現行の学習指導要領において、**義務教育段階での学習内容の確実な定着を図る**こととされていることを踏まえ、**義務教育段階の内容も併含め、**

**② 問題の内容**  
 ○ ポリムニアリンとなる平均的な学力層や、底上げが必要な学力面で課題のある層を主な対象として出題。  
 ○ **【知識・技能】を問う問題を中心としつつ、【思考力・判断力・表現力等】を問う問題をバランスよく出題。**

**③ 出題・解答・結果提供方式**  
 ○ 試行を通して、**CBT(紙)を導入する方向で検討**。紙によるテスト実施も念頭に置きつつ検討。  
 ○ 正誤式や多肢選択式を中心としつつ、多様な解答方式を検討。  
 ○ 学習の目標にのりやすく、学習の成果が実感しやすくなるよう、**【TOEFL以上の多言語で結果を提供】**。また、単元確かな分野別の結果や各設問の出題のねらい等を提供することを検討。

知識・技能の習得というところにちょっと偏り過ぎてませんかということが言われているわけです。これを学力の3要素を踏まえて、今回は、学力の3要素から成る確かな学力と言いつつしています。逆から読むと同じことを言っています。知識・技能を習得して、その知識・技能を活用してみずから課題を発見して解決する思考力・判断力・表現力ですね、3つ目が、主体的に学習する態度をちょっと読みかえていまして、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度、これを主体性・多様性・協働性というふうに呼んでいるわけです。

### 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入について

こうしたものをベースに、まだ検討中ではございますが、中間まとめのほうで高等学校基礎学力テストについてこのように書かれています。まず、目的ですが、ここでも何と書かれているかと、高校生が身につけるべき基礎学力の確実な育成に向けて、つまりこれが最初の中教審の高校部会のほうで出てきたコアの学力ですね。高校生が必ず身につけるべきコアの学力をここではかっぺいこうというふうにしています。高校段階における生徒の基礎学力の定着度を把握するものだと。生徒の学習意欲の喚起、学習の改善を図るとともに、成果を指導改善等に生かすことにより、高校教育の質の確保・向上を図るというふうにしています。ここでも第一の第一義的な目的は、高校の質の保証であり、基礎学力の確認ということで出されています。

対象者については、ここが実は審議会でもシステム改革会議でももめましたというか、まだもめていますというところだと言っていると思います。対象者は、学校単位での参加を基本としつつ、生徒個人の希望に応じた受験も可能というふうにしています。これ何をもめているかということ、基礎学力テストは高校の学力の把握であり質の向上であれば、私はこれは全員が受けるべきだと、思っています。これが誰を対象にするかということ、ポリュー

ムゾーンとなる平均的な学力層や底上げが必要な学力面で課題のある層というふうに言っています。つまり、ある意味、大学入って点数のできない大学生、漢字の書けない大学生をなくしていこうというようなことだと言っているふうには思います。ただ、この子たちが、今、受験料が1回当たり数千円というふうに言っているんですね。つまりボリュームゾーンとなる、今までのいわゆるAOっていうオールオーケー入試となっているような、ある意味、大学さんとかで教科型の試験を経ずに入った子たちにちゃんと学力の基礎をつけていこうということだとは思いますが、この子たちがわざわざお金を払って基礎学力テストを受けるインセンティブがないというふうに思います。なので、基本的には高校の質の保証・確保なので、これはきちんと国がお金を出して全員が受けるべきだと言っているふうには思います。国立競技場にあんなにお金をかけたんだしたら、こっちにかけたほうが日本の未来に役立つんじゃないかと私も思っていますが、ただ、高校は義務教育ではないということで、希望者が受験すべきじゃないかというような先生方もいらっしゃる、ここは、今、まだ議論を進めている最中です。中間まとめの落としどころは、文科省は学校単位での参加を基本とするというふうに言っています。これを学校の質保証に使っていこうというふうなことです。それ、後でまた御説明します。作問も高校の先生が参画すると、なぜなら、高校の質保証だからですね。アメリカのSATとかACTは高校の先生が出題したりとか採点をしているというふうなことだそうです。

具体的な制度設計、これも31年度から言っているふうになっていますが、二段階で導入が考えられています。平成31年、2019年、オリンピックの前の年に導入をして、最初はコアの学力はどこに設定するかということ、昨年11月の答申の中では、英、数、国、理、社の必修科目5教科が入っていました。しかし、今回はコアのコアということで、英、数、国っていうところが最初に導入しましょ

うというふうになってきました。なぜかという  
と、普通科高校は大丈夫かもしれませんが、  
一部の専門高校あるいは定時制高校などは  
なかなか全教科のをはかるのが難しいとは  
ないかということで、円滑な導入を図るとい  
う観点からここから始めるというふうには  
言っています。問題の内容は、知識・技能を問う  
問題を中心とするというふうには言っています  
ので、基本的には教科が中心の試験になるとい  
うふうに思います。

出題方法が、これが余りなじみのない言葉  
だと思いますが、CBT-IRTというふう  
に言っています。CBTというのはコンピ  
ューター・ベースト・テストです。コン  
ピューター上でテストを受けるというよう  
な形になります。IRTは、日本語に直すと項  
目反応理論とか項目応答理論ということら  
しいですが、わかりやすく言うと、TOEIC  
とか英検とかってというのは年に何回受けても  
レベルそろってますよね。そういった複数回  
受けてもレベルがそろってような形のテストで  
す。CBTとIRTは直接連動してませんの  
で、CBTの開発がおくれたら最初は紙によ  
るIRTのテストを行っていくというよう  
なことも念頭に置くというふうに書かれていま  
す。じゃあ、フィードバックの仕方はどうなる  
のかというと、じゃあ300点満点であな  
たは198点ですまではなくて、10段階以  
上の多段階で結果を提供するというふうには  
言っています。つまり、なぜかということ、これは  
高校生の学習意欲の改善に当たりますので、  
1回目受けたときに、例えば15段階の13  
段階だったとしたら、頑張ったら9段階目ま  
で上がったというふうに、頑張った分だけ実  
感ができるようなぐらいの多段階で結果を提  
供しようというふうになっております。

実施回数も高校2、3年生で2回ぐらいと  
いうこと。なぜ高校2、3年生かという  
と、基本的にはコアの学力なので全て高校  
1年生で学ぶ内容になっています。なので、  
高校2年生で受ければ大体わかるということ  
なんです、先ほど申し上げたとおり、一部

「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入について  
中央教育審議会(第101回)  
(09/28日)資料より

4.実施回数・時期・場所  
○CBT-IRTが円滑に導入された場合、高校2期・3期を制限せずに生徒・生徒の都合に合わせて差別的に運用することが可能。  
○導入当初は、更紗から教員まで基本的に、**高校2・3年で生徒がそれぞれの学年に応じて年間2回受験できる仕組み**とし、開校見直し、  
○**学校単位で受験する場合は、原則、当該高等学校の施設で実施**。種別単位で受験する場合は、生徒の参加見込みも  
確保できず、高等学校 等の施設の利用などを要して検討。

5.受験料  
○**受験料は、1回当たり数千円程度の低額な価格設定をとり、また、低所得世帯への支援策の在り方も併せて検討**。

6.活用の在り方  
○**生徒による主体的な活用とともに、高校生の進路指導や利用促進等の教育政策の推進にも活用**。  
○平成31年度～平成34年度までは「移行実施期」と位置付け、この期間は原則、**次期学習指導要領に活用せず**、本来の目的  
である学習指導 への活用を図るとし、そこで得られた実証的データや関係者の意見を踏まえながら検証を行い、  
必要に迫られる、平成35年度以降の次期学習指導要領への活用方針については、仕組みの定着状況やメリット  
デメリットを十分に吟味しながら、関係者の意見も踏まえ、更に検討。 以下、①民間の知見の活用 ②その他 中略～

【次期学習指導要領下(平成35年度～)】  
1.対象教科・科目  
○高校生の基礎的な学習の達成度を把握する観点から、「**次期学習指導要領に示される必修教科**」を基本として  
実施することを検討。

2.活用の在り方  
○平成35年度以降の**次期学習指導要領への活用方針については、この仕組みの定着状況を見守り、更に検討**。  
○次期学習指導要領で活用する場合には、2年度の結果は活用しない方向で検討。  
※試験開始時にも考慮されるが、企業等に対しテストの結果をもって生徒の可能性が読めることのないよう配慮を求め、  
平成34年度に入塾した生徒は2年生になる平成35年度から次期学習指導要領へ対応する。



「大入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入について  
中央教育審議会(第107回)  
(09/28日)資料より

1. 基本的事項  
1.1 目的・対象者  
○大入学希望者を対象に「**にわたる大入学を望むための必要な能力について把握**」することを主たる目的とし、  
○**知識・技能を十分に試みる評価を行うことに加え、思考力・判断力・表現力を中心に評価**。  
1.2 思考力・判断力・表現力の明確化とそれを踏まえた作問  
○大入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を構成するより具体的な能力概念の枠組みを整理  
○それらの能力のうち、特に自ら問題を発見し、答え一つに定まらない問題に解答を見出し、いくらか必要言語能力を重視  
○それらの能力を評価する作問を、各教科・科目について行う

2. 具体的な制度設計の考え方  
○次期学習指導要領に関する中央教育審議会における審議も踏まえ、以下の点を検討し、具体化に取り組む。  
【次期学習指導要領下(平成36年度～)】  
1.対象教科・科目  
○地理・公民については、次期学習指導要領における科目設定等を踏まえ、知識・技能に関する判定機能に加え、例えば、  
歴史・公民については、歴史的思考力等を含め、思考力・判断力・表現力を構成する能力の判定機能を強化。  
○次期学習指導要領での導入が検討されている「**教養・理科の知識や技能を総合的に活用して主体的な探究活動を行う新たな  
選択科目**」(「**教養探究(仮称)**」)に対応する科目を実施。  
○数学、理科については、知識・技能に関する判定機能に加え、思考力・判断力・表現力を構成する能力に関する判定機能を強化。  
○国語については、次期学習指導要領における科目設定等を踏まえ、知識・技能に関する判定機能に加え、例えば、言語を  
手帳かつとながら、限られた情報のもとで物事を整理立てて考え、的確に判断し、相手や想定して表現するなど、思考力・  
判断力・表現力を構成する能力に関する 判定機能を強化。  
○英語については、**書くことや話すことを含む4技能**について、例えば、傾聴を的確に理解し、聴きや文法の違い方を適切に  
判断し活用しながら、自分の意見や考えを相手に適切に伝えるための、思考力・判断力・表現力を構成する能力を評価。  
また、**傾聴や発話の能力も評価**。  
○次期学習指導要領における教科「**情報**」に関する検討と連動しながら、対応する科目を実施

「大入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入について  
中央教育審議会(第108回)  
(09/28日)資料より

2. 具体的な制度設計の考え方(つづき)  
【現行学習指導要領下(平成32～35年度)】  
○次期学習指導要領改訂の議論の方向性を踏まえつつ、思考力・判断力・表現力を構成する能力をより適切に評価。  
○**試験の科目数については、思考力・判断力・表現力を問う科目割合の転換、受験者の状況等も踏まえつつできる限り削減**。  
2.問題の内容、出題・解答・成績提供方式  
○多岐選択式問題に加え、**問題に取組むプロセスにも解答者の判断を要する部分が含まれる問題**、**記述式問題**など  
を導入。  
○多岐選択式の問題は、**分野の異なる複数の文章の異なる内容を比較検討する問題**、**多数の正解があり得る問題**、**複数の  
設問にわたる判断を要する問題**、他の教科・科目や社会との関わりを考慮した内容を取り入れた問題などの導入。  
○選択式より深い思考力等を問う問題として、「**活動型選択式問題(仮称)**」の導入。  
○記述式問題については、各教科・科目の特色・留意点に基づき、平成32年度～35年度は短文記述式、36年度  
以降はより文字数の多い記述式を導入。記述式については、作問体制や採点体制の整備・充実の検討が必要であり、  
コストやスケジュールの課題、コンピューター採点支援の 技術的可能性を踏まえて検討。  
○多岐選択式や活動型を用いるなど様々な出題が可能となる**CBTの導入(平成36年度～、平成37年度～38年度)**。  
○**CBTの導入**。※「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の検討状況・実施等を踏まえ、システムの安定性やセキュリティの確保、  
コスト、その他各種 実施に当たって前提となる課題について検討。  
○大入学大入学希望者に対し、結果の**多段階表示による提供と併せ、種々のデータ例(例えばバーチャル模範など)  
による学習**を大入学に提供することについて、大規模な共通データとしての幅広い鑑別力の確保の必要性なども  
踏まえつつ、今後より専門的に検討。  
○年次別実施の方法等については、作問や採点に関する課題を含め、関係者等の意見も踏まえて十分に検討。  
※学習指導要領改訂時期や実施時期については、過去の改訂スケジュールから想定したも、高等学校学習指導要領は年次進行で実施するため、  
平成34年度に入塾した生徒は2年生になる平成36年度から次期学習指導要領へ対応する。

の専門高校や定時制高校というところなんかを見ますと、こういった3年生でも受験できるようにしようというふうな形の仕組みになっています。学校単位で受験する場合には高校で実施しようということが書かれています。

活用のあり方としては、生徒による主体的な活用とともに、高校での指導改善や国や都道府県等の教育施策の改善に利用するというふうに言っています。31年から34年までは試行期間と位置づけて、大学入学者選抜や就職には用いないというふうに言っています。やはり第一義的な目的は高校の学力の把握、質保証なので、これは当然かなというふうに思いますし、先週、その会議が行われまして、高校の校長会とかからの意見表明では、この選抜に使うというのと質の保証というのが2つの目的があるためにちょっと混乱しているんじゃないかと。どちらかという、高校の質保証のほうにきちんと目的を一本化したほうがいいんじゃないかというような提案も出されてきました。こちら辺はもう一もめあるんじゃないかというふうに思います。なぜなら、選抜に使うんだったらなるべく後に受けたほうが得ですね。しかし、質保証だったら早いうちからきちんと段階を経て受けるべきだと、これは当然だと思いますので、私はその学習改善を目的とした質保証のほうにできるだけ使う方向で意見を表明していきたいというふうに思っております。

次期学習指導要領については、35年以降は新しい必修科目において情報ですとか歴史総合とか、そういうところも含めて言っていくと。この後に選抜に使うかどうかを考えるとこのようにしております。

これが質保証の仕組みですね、高校の基礎学力テストをどういうふうにするか。PDC A、プランですね、教育目標を高校が設定して実行して、そのチェック、評価の一つとして高等学校基礎学力テストを使っていきましょうということ。これが小さく書かれているんですが、上記の取り組みを通じて得られたさまざまな情報を、学校評価を行う際の

判断材料として活用するというふうにしています。どう判断材料と使うかという、ここですね、さまざまな評価結果から明らかになった指導困難校など支援を要する高校に対する教員加配や補習指導員の配置などということで、この基礎学力テストの結果で指導困難校というのがわかった場合には、国としてフォローしますよというふうなことでこれを使っていきましょうというような、つまり質の保証ですね、底上げというところにこれを活用しようというふうには今は出されています。これが基礎学力テストですね。

### 「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の導入について

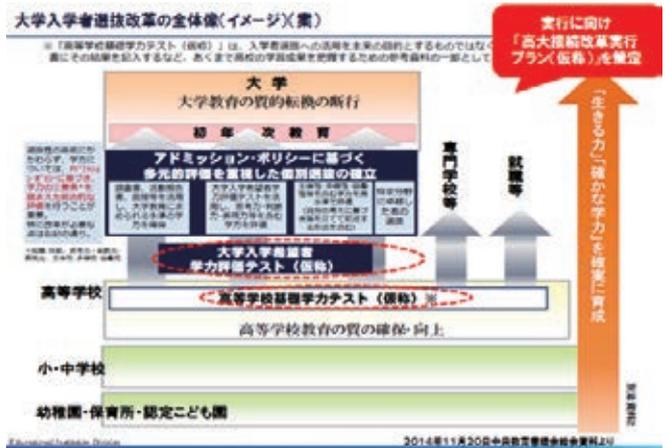
大学入学希望者学力評価テストのところでいきますと、目的は、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握するというふうに言われています。大学に入る準備ができていのかどうかを見るものということ。ここでは知識・技能を十分に有しているかの評価を行うことに加え、思考力・判断力・表現力を中心に評価すると。一部ではゆとりにもた戻るんじゃないかみたいな新聞報道がありまして、そうではないということを言っています。きちんと知識・技能を評価した上で、思考力・判断力を中心に判断していくと。

具体的な制度設計ですが、これも2段階になっています。32から35と36年度以降というふうになっています。まず、32年から35年でいきますと、まず、試験科目についてはできるだけ簡素化しながらどんな問題が出るかという、多肢選択式問題に加え、問題に取り組むプロセスにも解答者の判断を要する部分が含まれる問題、記述式問題などというふうに書かれています。例えば、今のマークシートは必ず1つ正解がある前提ですよ。そうではなくて、1つではなくて、2つ、3つ、あるいは全部正解、あるいは1つも正解がないといったような鉛筆を転がして何回かに1回は当たるよというふうではない問題を回答方式にしていこうとか、あるいは

連動型複数選択式っていうのはロジックで考えていくと、3つぐらい連続した問題をしていくとその考え方がわかるような問題が今できるらしいんですが、そういった問題を導入する。あるいは記述式問題、これもまだ意見が割れているというか、これはそれだけの記述式を回答する、あるいはそれを評価するためには多くのお金とパワーがかかります。それをやりますか、どうですかというのは、まだ会議の中でも意見が分かれているというか、技術的に間に合うのか、できるのかということも含めて、議論が進められているということだというふうに思います。

先ほどCBTの導入というのが基礎学力テストでありましたが、学力評価テストのほうもCBTを導入すると。しかしこれは36年度からですね、つまり新しい学習指導要領のところからCBTを導入しようと、その前は試行というふうに言ってます。なぜ基礎学力テストはCBTを前提に進められている、こちらはCBTが遅く入ってくるのかということ、基礎学力テストは選抜ではないんですね。こういう言い方は正しくないと思いますが、ちょっと間違っちゃっても何とかなるかもしれないと、しかしこちらは選抜に使うのでもう間違ったら大変だということで、多分遅くなっているんだろうというふうに思います。そのためのシステムの安定性やセキュリティの確保などを検討していくというふうになっています。こちらのフィードバックの方法も素点ではなく多段階表示による提供、あるいはパーセンタイル、上位何%とか、そんなふうに入っているというような形の表示になってくると。これは会議のほうでどれくらいの段階別表示になるんですかというふうなことを質問したんですが、まだこちらは検討中ということでした。現状のところこういった形の検討状況になっています。

こうしたことを通じて、高校までの教育は高校の基礎学力テストを導入しながら質の確保・向上を図っていくと、あくまでもこれは高校の質の確保・向上であって、大学は大学



高次接続改革実行プラン(概要)	平成27年1月16日策定	工務表である実行プランで改革に向けた強い意志を示す
各大学の個別選抜改革	<ul style="list-style-type: none"> <li>個別選抜改革を推進するための法改正(H27年度中を目途に改正)</li> <li>3つのポリシーの一元的な策定を義務付け、選抜評価の項目に入学希望者を特記</li> <li>大学入学者選抜実態調査の見直し(H27年度)以降実施</li> <li>アドミッション・ポリシーの明確化(H27年度中にガイドライン作成)</li> <li>個別選抜改革の推進のための財政措置(H27年度を目途に取り組み)</li> </ul>	
「高等学校基礎学力テスト(仮称)」及び「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>「高等学校基礎学力テスト(仮称)」はH31年度から</li> <li>「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」はH32年度からの実施も目指す</li> <li>H27年中を目途に専門会議の検討結果を取りまとめ</li> <li>新テストの実施主体の設立(H29年度を目途に設立)</li> <li>大学入試センターを改編した組織</li> </ul>	
高等学校教育の改革	<ul style="list-style-type: none"> <li>主体的・協働的な学びの推進と高等学校教員の資質能力の向上</li> <li>多様な学習活動・学習成果の評価(H28年度中に調査会や指導要領改訂)</li> <li>学習指導要領の見直し(H28年度中に審議)</li> <li>「学力を伸ばす」だけでなく「どのような力を身に付けたいか」の観点に立って</li> <li>評価内容に加え、学習方法や学習環境も明確にする観点で見直し</li> </ul>	
大学教育の改革	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学教育の質的転換(H27年度中を目途に制度改正)</li> <li>企業等の協働で学びの場を拡大し、教育の質を向上させる観点に法改正</li> <li>学生の学修成果の把握・評価の推進(H27年度中を目途に制度改正)</li> <li>認証評価制度に学習成果と内証保証に関する評価</li> <li>大学への編入学等の推進(H27年度中を目途に制度改正)</li> </ul>	



で質的転換をしていきながら入学者選抜を変えていくというような形で、下から続いて生きる力、確かな学力を育成していこうというような形になっています。これをやり遂げるために高大接続改革実行プランというのが1月の16日、12月22日に接続答申が出されて1月16日には文科省の中に高大接続改革プロジェクトチームというのができました。それで、実行プランが出されました。前の文部科学大臣、下村さんにインタビューしたときに、このプランはどうしてつくられたんですかと聞いたら、政権がかわっても大臣がかわってもこれはやり遂げるというような意思で工程表をつくったんだというふうにおっしゃっていました。

#### **高大接続改革実行プラン(概要) H27.1.16策定**

その工程表である実行プラン、何が書かれているかということ、細かいのはいっぱいあるんですが、大きくまとめるとこの4点になります。大学教育の改革、高校教育の改革、それをつなぐ共通テスト、それから大学の個別選抜、これを変えていこうという形になっています。この中で、高等学校基礎学力テストは平成31年から、2019年ですね、大学入学希望者学力評価テストは32年度なので、オリンピックが終わった年ぐらいから実施を目指そうということで進められています。並行して、高校の教育改革、大学教育の改革というのも、27年、28年ぐらいで進められているということがわかるというふうに思います。

この試行期間とかスケジュールがいろいろわかりづらいということをよくお聞きしますので、簡単に、勝手に図式化しました。上が基礎学力テスト、下が学力評価テスト、横が年度ですね、そうすると、31年と32年から導入するというふうに言っていますが、学習指導要領が改定されるのが34年になります。ここで変わりますんで、ここで、高校1の子が学年進行で、2年生になったときに基礎学力テスト、3年生になったときに学力評価テストが本格化するというので、35年、

36年というふうになっているわけです。この期間を試行期間ということで、試行期間をどうするかというのはまだこれから一もめあるんじゃないかなというふうには見ております。もう再来年にはプレテストというのを導入すると言ってますので、そろそろ問題が出てこないとまずいかなというふうに思っております。システム改革会議の中でも、ワーキンググループからなかなか問題の中身が出てこないの、どうなんですかというふうな質問が出ているというような状況だということで、これが今後影響があるかなというふうに思っております。全体的にはこんな図になっておりますが、これホームページで見れますので、ぜひA3でプリントアウトしてごらんいただければというふうに思います。

今までが共通試験でしたが、じゃあ、個別選抜ってどう変わっていくんでしょうかということです。これは答申の中に出ているものではなくて、答申の前に10月10日の部会で出てきたものになります。基本的には変わっていないというふうに個人的には思います。各大学の個別選抜における主体性・多様性・協働性の評価ですね。先ほどの3つの学力要素の3つ目っていうふうになります。こんなことが書かれています。従来型の公平性・客観性、つまりペーパーテストによる序列化、点数で割り振って落としていくようなものではなく、多元的な評価の妥当性・信頼性の確保という表現がされています。ここに公平な選抜とは数値で採点結果を出せる問題を用いた試験の点数のみに依拠したものであるという従来型の公平性・客観性を変えていこうというようなことが書かれていて、説明責任確保のためには、これ主語がないんですね、主語が誰かということと大学がだというふうに思います。大学が説明責任を果たすためにはアドミッション・ポリシーに基づく多元的な評価の妥当性や信頼性に注目するというふうにかかれているわけです。

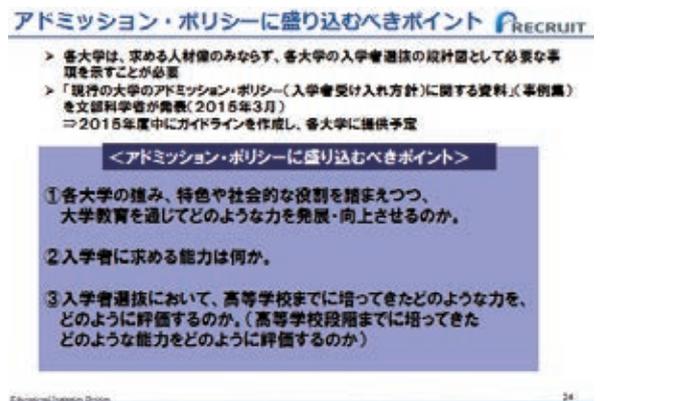
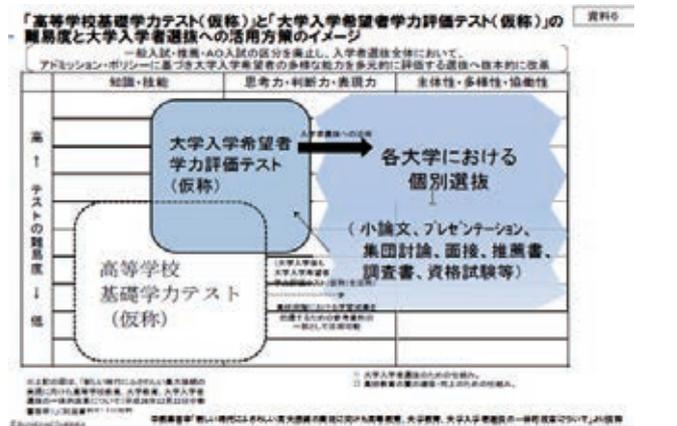
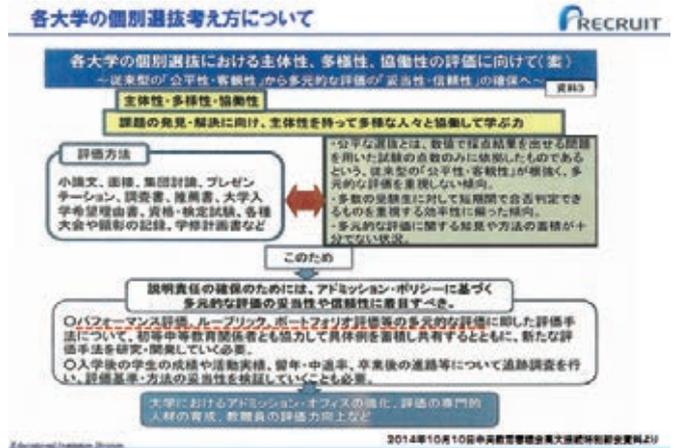
#### **各大学の個別選抜の考え方について**

じゃあ、どのような評価方法があるかとい

う事例がここに書かれています。一つがパフォーマンス評価ですね。パフォーマンス評価というのは、一般的にはペーパーテスト以外の評価手法だということです。実技試験であったりとか面接であったりとかディスカッションであったりとか、そういったものがパフォーマンス評価に当たってくると。それから、ルーブリック評価はもう先生方御存じだと思いますが、いろいろなものを、この設問はどの力を見るための問題なのかと、コミュニケーション能力なのか知識・技能なのか、あるいは表現力なのかというものを、あとはチームワークなのか、どれを見ていくのかというのを細かく分けていくと。わかりやすく言うと、フィギュアスケートの採点みたいですね、技術点とか表現点とかそういうものをつけていくと。大学でも金沢工業大学さんなんかは、全て、今、大学の評価をルーブリック評価にしているということだそうです。それから、ポートフォリオ評価、ポートフォリオというのは語源が、人材ポートフォリオとか財務ポートフォリオとかよく使われますけども、語源はファイルの中のポケットだそうです。つまり、高校生が今まで活動してきたことをきちんとファイルに入れていくと、活動履歴をちゃんとつけていくというようなこと。つまり活動履歴をちゃんと評価するというようなことだというふうに思います。こういったことを多角的に評価してくださいということを言っています。これが答申の中に入っていた3つのテストの役割分担というふうになります。

### 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」と「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」の難易度と大学入学希望者選抜への活用方策のイメージ

縦軸がテストの難易度、横軸が3つの学力要素になります。高等学校基礎学力テストは知識・技能を問うとさっき書いてありましたが、ボリューム層より下のコアの、高校生がみんな学ぶべきコアの学力を教科型ではかっていくということがわかると思います。一部思考力・判断力を問う問題が入りますが、ほ



とんどは教科型の問題。大学入学希望者学力評価テストは教科型を半分ぐらい入れながら、思考力・判断力・表現力を問うような、こんな言い方がされてました。合教科、合科目型、教科を合わせるですね、あるいは科目を合わせるですね。教科を飛び越えたような問題、あるいは総合型といったような問題が出されるということが答申の中には書かれていました。

その審議会の中でこんな質問が出ました。今の学習指導要領下の中で、そういった教科を超えた問題って入試で出しちゃっていいんですかという質問が出ました。それに対して文科省はどうお答えになったかというのと、今の学習指導要領でも教科を超えた学習をするようにというふうに、幅広い学習をするようにというふうになってるそうです。しかし、今の入試がそうならないために高校でそういった授業がなかなか行われていないということで、それはきちんと入試を変えることで行ってほしいということ、それじゃあ、それでいきましょうということになっています。個別選抜は基本的に思考力・判断力・表現力を見ながら、主体性・多様性・協働性を見るような選抜にしてくださいと。

ただ、前回の会議でも国立大学協会のほうからは、個別選抜でも学力試験をやらざるを得ないんじゃないかと、今のところそういった方向で検討してるという話が出ました。当然、本当にそれやるんですかというふうな質問がいろいろ出まして、長崎大学の片峰学長によると、この大学入学希望者学力評価テストの難易度がどの程度かがわからない、ここが信用できなければ個別選抜ではもう一度学力評価をせざるを得ないというような発言が出てました。つまり、この大学入学希望者学力評価テストの難易度をどれくらいに設定するのかというのが非常にこれから大きな課題になってくるかなというふうに思います。趣旨としては、これは納得してるけれども、ここがわからない限りは今なかなか決断ができないというような状況だというふうに思いま

す。早くその中身が出てくるといいかなというふうに思っております。

### 高大接続改革の全体イメージ

じゃあ、高大接続改革全体のイメージ、これが8月27日に出てきた資料の中に入っているものですが、高校教育は教育内容を見直して、学習指導要領を改定して、指導方法を改善したりとか先生方の指導力を向上させる、あるいは評価も多面的な評価を進めていくというような、学力はその中の1つだというふうな表現をしています。その上で、大学は育成すべき人材像に基づく3つのポリシーの一体的な策定を法令上位置づけるというふうに言っています。3つのポリシーってあんまり聞きなれない言葉だというふうに思います。3つのポリシーとは、ディプロマ・ポリシー、学位授与方針ですね、日本語に直すと。どのような力を身につけた人に学位を授与するかというような方針です。つまり、うちの大学はどんな人材育成するのかってことですね。そのためにどのような教育内容になっているのか、カリキュラム・ポリシーですね。これを、先ほど申し上げた体系化してくださいというふうに言っています。つまり学位ごとにカリキュラムのポリシーをきちんとつくってくださいよということです。それも、卒業後を見据えた社会との連携を強化しながらつくってくださいということです。そんな教育を受けるためにはどのような人に入ってきてほしいのか、これがアドミッション・ポリシー、入学者受け入れ方針になります。どのような能力をどのレベルで求めるのかを明確化してくださいと言っています。

ここにこんなふう書かれています。大学入学者選抜、各大学においてアドミッション・ポリシー、入学者受け入れ方針に基づき、例えば下記の方法から活用する評価方法・比重・要求するレベルを決定・公開してくださいというふうに言っています。例えば下記の方法ってこんなことですね。例えばどんなことが考えられるか、いや、うち是非常に高度な学問をやっている難しい教育をやっている

す。なので、例えばうちの大学に来るんだら学力評価テストはAレベルをとってきてくださいと、それは8割ぐらいの比重で評価しますよと、そのほかは2割ぐらい面接で評価しますというような大学があってもいいと。あるいは、いや、うちは違いますと。日本を支える分厚い中間層を育成する大学だということであれば、そういったカリキュラムであれば、大学入学希望者学力評価テストはもしかしたらDレベルでいいと。しかし、きちんとした記述、論文方式、あるいは高校時代の学習履歴、それから入学してから何をしたいか、それから人柄を見る面接みたいなものを3対3対3対1で見ますよというふうな大学があってもいいと。いやいや、うちはそうじゃないと、すばらしい先生方がそろってるので、高校時代そんなに部活ばかりやっちゃってあんまり勉強しなかった子も来てくれれば、きちんと育て上げるような教育の仕組みになってますよってあれば、もしかしたら学力評価テストはほんの少しの割合であって、高校時代の活動履歴、あるいはエッセイ、入ってから何をしたいか、あるいはプレゼンテーションみたいなものを3対3対3対1みたいな、そういった評価で見てもいいですよということを言ってるわけです。そのフラッグを大学側が立ててくださいと、説明責任は大学側にありますってことを言っているわけです。なので、ここの中身をつくるのが非常に重要になってくるわけです。

### アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント

じゃあ、急にアドミッション・ポリシー、入学者受入方針ってなかなか難しいですよ。今までは結構こういう大学が多かったんです。社会に役立つ優位な人材育成すると、大学名隠したらどこかわからないというのが正直多かったわけです。これをきちんと明確にしてくださいと。盛り込むべきポイントというのをことしの3月に、文科省、事例集の中に書いています。ガイドラインを来年の3月に発表するというふうに言ってますが、アドミッション・ポリシーに盛り込むべき3つのポ

イント、1つ目、各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつというふうに言っています。例えば、各大学は強み、社会的な役割が違いますよねと、東大と島根大学では当然役割が違いますよねということです。早稲田と慶応でも違いますよねということ言ってるわけです。その各大学の特色を明確にしてどのような力を発展・向上させるのか、そのために入学者に求める能力は何でしょうか、それをどのように評価するのか。つまり簡単に言うと、うちはこんな大学なのでこんな人材育成しますと、だからこんな人に来てほしいですと、だからこんなふうな評価をしますよというようなことをきちんと盛り込んでくださいということが書かれているわけです。これが、今、このプランの中でしていますが、私はここの会議体に入ってるんですが、この新テストの中身ですね、先ほどのCBTとかIRTとか、あるいは記述式がどうかとか設問の中身とかがってというのはワーキンググループで非公開で今議論がされていまして、これから年末にかけて具体的な中身が上がってくると。したら、かなり具体的な議論が進むんじゃないかというふうに思っております。並行して、中教審の中で高校と大学の質保証のことが進められているということです。

### 各方面で大学入試改革の議論が急速に進みつつある

じゃあ、そうか2020年かと、ちょっとおくれて、もしかしたら平成36年からセンター試験変わるのかと、ここで変わるのかと思ったら実は大間違いだと私は思っております。もうこういった形で動くのは方向性が決まっておりますので、各大学の個別試験から変わってきています。例えば東大ですね、東大、今週の月曜日から推薦入試の出願を開始しましたが、初めて推薦入試を導入します。100名です、わずか100名。東大の定員が大体3,300名ぐらいですから、全体の3%で推薦を行っていくということで、じゃあどんな人材を採っていくのかというと、世界的視野を持った市民のエリートを育成する

というふうに言っています。

京大も100名、特色入試というのを導入します。京大は東大とは違うというふうに言っています。テストで高得点をとるためだけの受験勉強を疑問視すると。じゃあ、どうするかという、どのような人を求めるかという、みずから課題を発見しチャレンジするという自発的、能動的な学びのポテンシャルがある人、これがアドミッション・ポリシーになるわけですね。それをどう評価するかっていうと、学部の教育を受けるにふさわしい能力並びに志を総合的に評価すると。志を評価するんですよ、京大。どうやって評価するんでしょうかという、学びの報告書、学びの設計書を書くんですね。高校時代どんなことに頑張ってきたのか、京大に入ったら何をしたいかの設計書を書く。これが京大の特色だと、これで志を見るっていうふうに言ってるわけです。

九州大学はまた違いますと。もう既に、21世紀プログラムというのを長年導入されてますが、学部には属さない横串を通した26名の4年間のオーダーメイドプログラムをつくっています。この子たちは学部には属さないの専門性の高いゼネラリストを育成するっていうふうに言っています。こういった人材育成するのでどのような評価方法をするかという、2日間にわたって試験あります。1日目は課題出してレポート出し直しを3回やるわけですね。2日目は、終日ディスカッションです、オールディスカッション。これを、先生方が複数いてルーブリック評価で選抜をしていくというような形になっています。

東北大学はまた違います。うちのAO入試は学力だと言っています。基礎学力プラスアルファだと言っています。アルファって何でしょうかと、意欲・適性・好奇心だと言っています。じゃあ、それをどうやって見るかという、第一志望ですというふうに言っています。あれ、東北大学受ける子ってみんな第一志望なんじゃないのって思ったりしますよね、実はそうでもないそうです。入ってから、あれ

っていう子もいるそうなんですね。ですので、じゃあ第一志望どのように見るかという、志望理由書というのをきちんと書かせて、なぜ私が東北大学に入りたいかというのをリフレクションというらしいですけども、自己内省していくということだそうです。なので、特別な対策は不要だと。

これ落ちたら一般入試を受けてくださいということですね。ストレート卒業率、GPAとも非常に高く、今、定員の18%をこれで採ってるんですが、数年かけて30%にしていくと。

大阪大学も、これ紙にないんですけども、口頭でお伝えしますと、世界適塾入試というのを今年度から始めます。それは10%です、定員の。これを3割に広げていくというようなことをおっしゃっています。

お茶の水大学の入試は新フンボルト入試っていうんですね。何かというと、文系は図書館入試、理系は実験室入試っていうことで、例えば文系でいうと、課題に対して図書館の蔵書を全部使っていいから自分で課題を解決するようなレポートをつくってください、プレゼンしてくださいということになります。何でかという、フンボルトの考え方は、もともと大学というのはゼミナールを実験室とか図書館を使ってやってたっていうことなんですね。なので、そういった大学だということ、定員は多分20名とか30とかそのぐらいだったと思いますが、そういうところから始めていくということですよ。

つまり、何が起きているかという、全員が一遍に変わるってことは多分ないと思います。多分この100人教室だったら、前に座る30人ですね、意欲の高い30人をこういった新しい形のAO型の入試で採っていくというような形で、この五、六年は進んでいくんじゃないかというふうに私は思っています。国立大学協会も9月に発表したアクションプランの中で、30%をこういった新しいアドミッション・ポリシーに合った人材を採っていくというような表現をしていますので、



その中に高大連携課と入試課が入っていて評価基準なんかを決めていると。

それから追手門学院大学さん、ここは育成型入試というのを、島根大学さんも導入されていますが、導入しています。こちらの大学さんはいわゆる分厚い中間層を育成する大学さんで、第一志望が余り多くなくて自己肯定感がそれほど高くない子が来る傾向があったということで、アサーティブ入試というのを導入しました。アサーティブというのは聞きなれないんですが、人と何か会話をしながら自分の方向性を決めていくというようなことだと思います。選抜型から育成型ということで、大学職員でアサーティブオフィサーという方がいらっちゃって、面接ではなくて面談を夏ごろから行って何度か指導をします。大学で何をしたいのか、なぜ大学に行きたいのか、なぜ追手門なのか、といったことを聞いています。アサーティブ入試自体は52名なんですけれども、この面談を経た子が100名になっているということで、入った子たちの意欲は非常に高いというふうになっています。方向性は大学の理念に合った人材の、学力プラス意欲の多面的評価になります。全員ではなくて、先ほど申し上げたように、まずは教室の前から座る意欲の高い30%ですね、これをどう採っていくかというのが課題になってくるというふうに思います。

## 2) 大学に求められているものは何か

### 大学の特色を生かし、入り口と出口を理念で一貫させる経営

じゃあ、大学に求められてるものは何でしょうか。大学は建学の精神があって、教育の理念があって、さっきの3つのポリシーがあって、どのような卒業生を社会に送り出すかというような役割があります。ここにどのような学生に来てほしいのかというのが、入り口、中身、出口まで一貫した経営、教育マネジメントが求められてきているということが言えると思います。入学者選抜は大学のメッセージだということですね。これをきちんとPDCAを回していくのがエンロールメン

ト・マネジメントっていうことですね。これをきちんと測定していく、これが、IRによる検証ということが、PDCAサイクルをこれから次の多分内部質保証はこんな形になっていくというふうに思います。

### 今大学に求められているものは

大学に求められているものは何か、世界的な傾向としてアウトカムですね。学習成果重視、履修主義から成果主義に変わってくるということで、これはOECDのPIISAとか、あるいは基礎学力テスト、国際バカロレア、こういったところもみんなそうだというふうに思います。つまり何かというと、入学の国、今まではどこの大学に入ったか、これがゴールだったわけですね。それで、シグナリング効果というふうに言われてました。そうではなくて入ってからどうなる、卒業するときどうなるかというときの大きなプロセスだというふうに思います。多分、2、3年や5年ぐらいでは変わらないと思いますが、10年、15年かけてこれを実現していくと。つまり大学生活で4年間でどのような経験を経て、これは成果、成果外ですね。含めて生徒、学生が何ができるようになって、ラーニングアウトカムですね、それが客観的に説明できるか。これを、各大学の個性ありますよねと、それをどのような人材育成するのかのコミットメントをしてくださいということが言われているというふうに思います。

言葉、言い方を変えます。学校を卒業すると何ができるようになるのか、どんな人材を社会に送り出すのか、これがディプロマ・ポリシーですね。それができるのはどのような理念に基づいて、どのような教育の仕組みがあるからなのか、これがカリキュラム・ポリシーですね。そのためにはどんな思考や意欲を持った学生に来てほしいのか、どのような要件、学力だけでなく意欲、活動実績等が必要なのか、これがさっき言ったカレッジ・レディネスになるわけですね。これは多分、東大と島根大学では全然違うというふうに思います。この準備ですね、これがアド

ミッション・ポリシーになるということです。

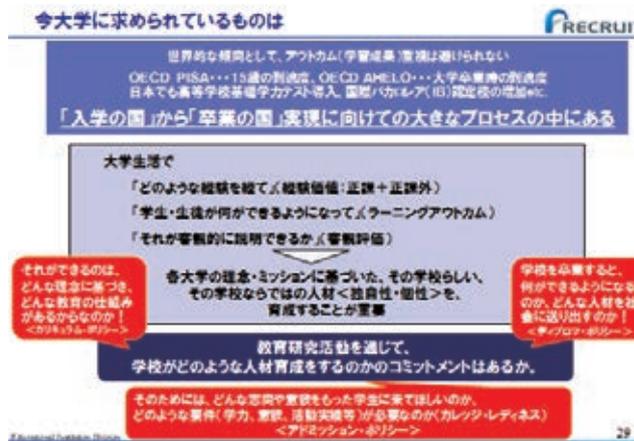
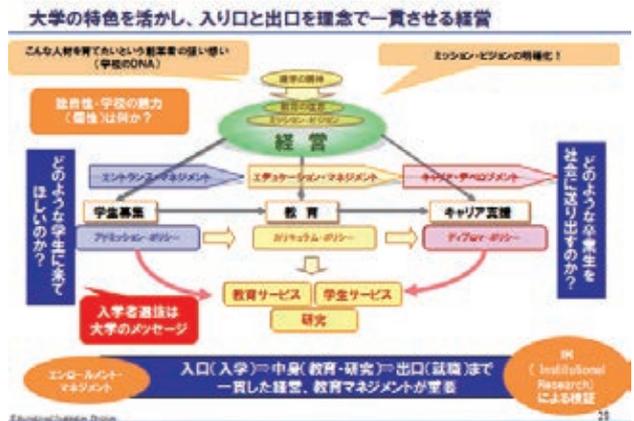
### 3) 高校に求められているものは何か 新しい学習指導要領が目指す方向性について

じゃあ、高校に求められてるものは何かですね、これが学習指導要領改訂ということになります。

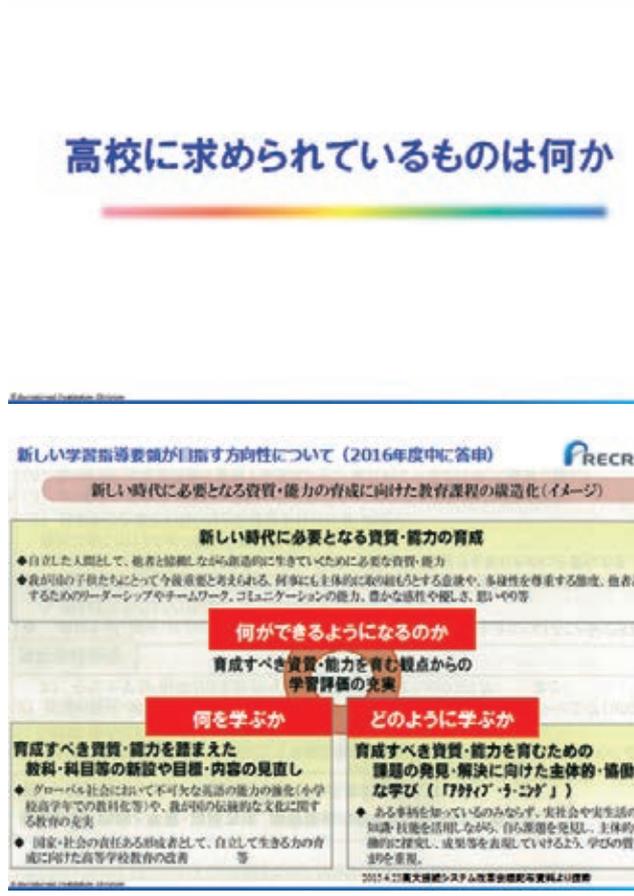
ちょっと前を見ていただければと思いますが、この3つありますよね、以前は何を学ぶかが大事だったというふうに思います。今議論の進め方が若干変わっています。まず、何ができるようになるのか、これアウトカムですね。そのために何を学んでどのように学ぶのかというふうなことが議論されています。何ができるようになるのかを見定めた上で教科をどうしていくか、それをどのような教え方をしていくのかというような順番で議論がされているそうです。教員ですね、先生方の指導力を高めて教育課程を見直して、多面的な評価を推進していくというふうな形で今の議論が進められているということです。

#### 高校における今後の評価の在り方について

ここが多分接続のところになると思うんですが、高校における評価のあり方ですね、これは逆ピラミッドになってますが、私が注目しているのは、ここに義務教育段階の学習内容の学び直しというのが出てきてます。この上で、教科をちゃんとやった上で、さまざまな高校生が取り組む活動をきちんと評価しましょうということ、日常的な評価をここに指導要録の改善ですね、指導要録というのは、調査書のもとになる日々の活動をつける学習カルテみたいなものだというふうに伺っておりますが、それを改善していこう。日々の活動を通じて幅広い高校生が取り組む多面的な資質能力を評価していこうというふうに高校が変わってきます。高等学校基礎学力テストはここなんです、位置づけが。つまり入学者選抜じゃないんですよ、ということです。なので、ここをきちんと見直していこう。例えば基礎学力テスト、じゃあ、普通科の進学校は要らないんじゃないかというふう



### 高校に求められているものは何か



な議論があります。私はそうは思いません。なぜなら私立の文系クラス、進学校でも数学が中一レベルでとまってる子がたくさんいます。歴史が苦手で、私立理系クラスはそうした歴史が中学のままでとまっている子たちもたくさんいます。そういった子たちを、基礎力をちゃんと測定していく必要があるのではないかなというふうに見ております。

#### 4) 高校・大学の教育を通じて求められているものは ~今回の高大接続改革が及ぼす影響~

じゃあ最後に、高校、大学の教育を通じて求められてるものは何か。今回の改革が及ぼす影響ですけれども、大学への影響でいくと、募集活動がリクルーティングに近い募集になってくると、企業の採用活動に近くなってくると思います。アメリカで学生募集はリクルーティングというふうな言い方をします。3つのポリシーに合った募集ですね。今まではとりあえずどんな方法でもいいから志願者の量を集めるというのが一番のホットイシューでしたね、大学では。そうじゃないと、ちゃんと大学ごとに合った人材を募集してくださいと。そのためにアドミッションオフィスを拡充してくださいと。この間、ボストンに行ってきた、ボストンのコンソーシアムでアドミッションオフィサーで大体何人ぐらいいるんですかというざっくりとした質問をしました。規模とか募集エリアによりますが、大体5人から25人ぐらいというふうな言い方をされてました。それと、あとOBとかOGの方を組織化して、そういったことを、アドミッションオフィスを形成してるというふうに言っていました。

それから、選抜評価基準をきちんと策定していく。入学がゴールではなくなりますので、入った後の学生をどのように育てていくか、その学習成果をどのようにはかっていくかということが重要になってきます。高校はそういったコアの学力をきちんとはかっていって質の向上を図る。それから合教科・科目型の対応、アクティブラーニング教授法、英語の4技能ですね、読む、書く、聞く、話す、そ

れから活動履歴を管理する学習カルテやポートフォリオ、こういったものが必要になってくるかなというふうに思っております。

#### 高校・大学を通じて求められているもの

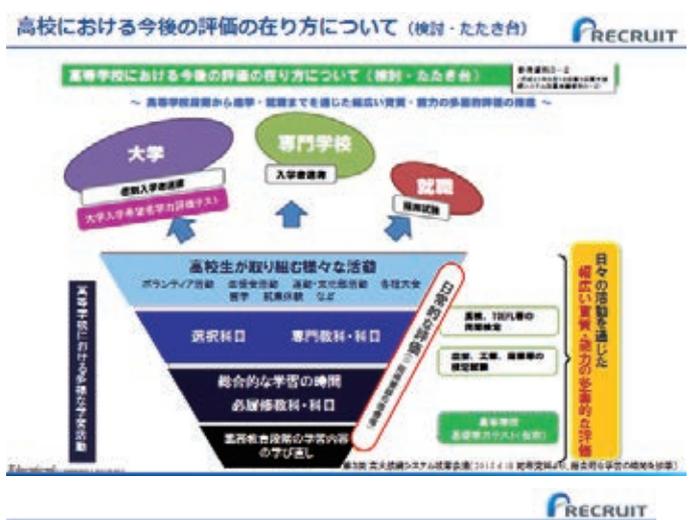
じゃあ、高校、大学を通じて求められるものは何か。まず、受動的な学生をいかに主体的、能動的な学生に変えていくかということの方が重要になってきます。最初に申し上げた主体的に取り組んでチャレンジできる人材ですね。もう一つ、Learn How To Learn! っていうことが言われています。継続して学ぶ力をつけるですね。これどういうことかということ、今、企業の寿命何年ぐらいだと思われませんか。30年前、私が入社したころは企業の寿命30年説というふうに言われていました。どういうことかということ、大学卒業して二十二、三ですよ。30年勤めたら55歳で定年だったんですね。昔。豊かな年金生活が待ってたんですよ。今は何と18年だそうです、企業の寿命。都市銀行、私が入ったころ13行ありました。今はメガバンク3行ですよ。損保、CM見たらわかりますよね。合併しすぎて社名を言えないですよ。もうそういった状況になってきています。なので、一つの企業でずっと勤め上げるというのはなかなか難しい時代になってくるかもしれません。そうしますと、いつでも学び直していくっていうような力が必要になってくる。大学、高校で学んだ学力というのはすぐに剥がれ落ちてしまいます。それをメンテナンスしていく力が必要だと、学ぶ習慣ですね。そのために先生が何を教えたかっていうインプットですね、チョークアンドノート型のインプットの教育ではなくて、学生が主語になって、学生が何を学び何ができるようになったかっていった、Learning outcomesを重視した形に変わっていくと。なので、学び方改革、TeachingだけではなくてLearningへというふうに変ってきている。

最近、高校の先生方、大学に行かれたことありますか。大学に行くと図書館が変わっ

ていることが、もうお気づきになると思います。図書館ではなくてラーニングコモンズになっているんですね。昔の図書館っていうのは誰にも邪魔されずに1人で知識を詰め込むことができた場だったんですね。今の図書館はそういうスペースもあるんですが、得た知識をディスカッションしながら高めていく、そういったラーニングコモンズというのができています。そういった形で知識をメンテナンスしながらoutcomes重視に変わっていくということになります。

今までの大学は建学の精神があって教育の理念があって3つのポリシーがありました。多分、大学ができたころはきちんとこれがはっきりしてたと思います。しかし、高度成長期、人口ボーナス期、どんどん学部をふやしていったりとかいろんなことがあって、なかなかこれを見失ってる部分があったというふうに思います。気づいたらギャップができました。高校、社会ですね、大学から見ると基礎力を備え学ぶ意欲のある学生に来てほしいというふうに思うわけです。しかし、高校から見たら大学の個性がわからない。先ほど申し上げたように、大学の数は親御さんの世代から見ても1.5倍になってるわけです。大学で800、短大が350、専門学校が2,800あります。その中から1校選ばなきゃいけないですね。

学部名から学ぶ内容がわからない。1991年までは学部、いわゆるカッコ付きの学士名称は29しかありませんでした、法商経文理工農とかですね。今大体幾つぐらいあると思いますか、学部の名称。何と700以上あるんです。昔は英語を学びたいっていったら英文科か外国語学部勧めればよかったわけです。今は国際何とか学部とか、何とかコミュニケーション学部いっぱいありますよね。この間、高校生にインタビューしたら、この大学ってなんちゃって国際ですよって言うてました。もう学部名から学ぶ内容わからない、だからみんなオープンキャンパスへ行



## 高校・大学の教育を通じて 求められているものは

### 今回の高大接続改革が及ぼす影響

#### <大学への影響>

- リクルーティングに近い募集へ(個性化の進展、多様な評価方法)
- 3つのポリシー(AP, CP, DP)の策定⇒アドミッションポリシーにあった募集への対応
- アドミッションオフィスの拡充(専任スタッフの育成)
- 選抜・評価基準(アセスメントポリシー)の策定⇒多面的・総合的な評価方法
- 入学後の学生の到達度(学習成果)の評価をどのように行うか

#### <高校への影響>

- 授業改革、学習履歴の管理、使える英語力
- 基礎的な学習(高校のコアの学力)の到達度を客観的に把握し、質の確保・向上を図る
- 合教科・合科目への対応(教科を越えた学習指導や教材開発)、アクティブラーニング教授法
- 英語教育は4技能(読む、書く、聞く、話す)への対応⇒特に聞く、話すへの対応
- 活動履歴を管理するシステム(学習カルテやポートフォリオ)の導入⇒指導要録の改定

くわけですね。将来の自分の姿を描けるか、大学に行って、これが問われてきています。企業から見ても競争環境が変化しています。30年持つと思ったら18年しか持たなくなっていましたってことですね。なので、変化に対応できる人材育成してほしいと思っているわけです。

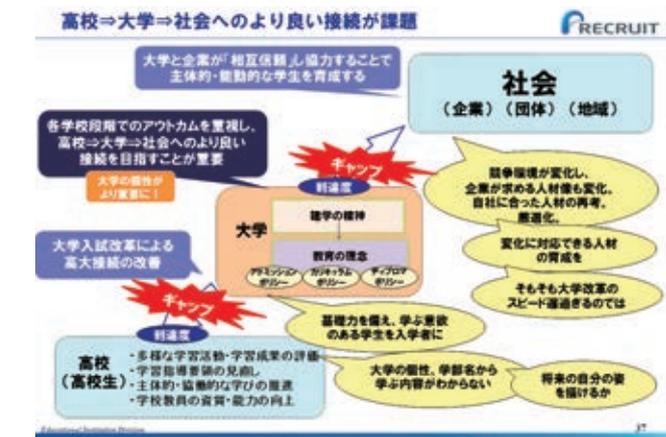
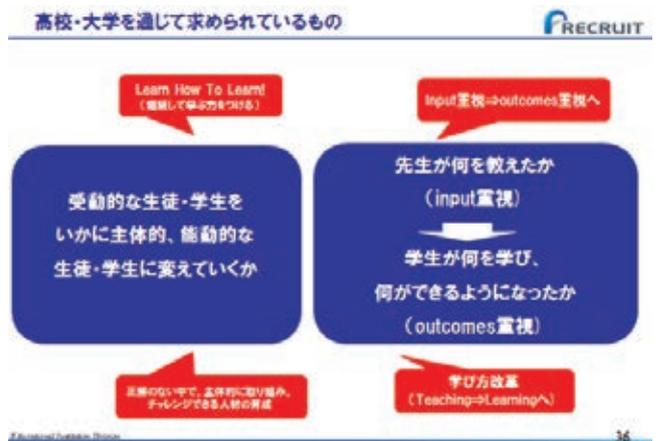
そもそも、大学改革のスピードが遅過ぎるのではないかというふうな意見もあって、ことしの4月に意思決定のスピードを上げていくということで、学長中心のガバナンスというふうに法律が改正されたわけです。この入り口とのギャップは、大学入試改革における高大接続の改善で変えていこう。企業が悪い、大学が悪いって言ってる時代じゃなくて、企業と大学、地域が協働して人材育成していこうというような時代になってきました。ここで到達度、両方ですね、何ができるようになったかっていうのがこれからは非常に重要になってくるというふうに思います。各段階でのアウトカムですね。

### 高校⇒大学⇒社会へのより良い接続が課題

私、審議会が一番ショックだったことがあります。何かというと、企業が大学の成績を見ていないのは知ってました。大学が高校の調査書をあんまり見てないのも知ってました。しかし、高校の校長先生が、いや、最近の中学の成績は当てになんないんですよって言ったときに結構ショックを受けました。全然つながってないじゃないか、この国はということですね。なので、きちんとこれを接続していく、その上で大学がきちんとフラッグを立てていく、個性をつくっていく。ぜひ高校の先生には、大学の方が高校訪問に来たら質問してほしいと思います。どんなディプロマ・ポリシーなんですか、どんな教育方針なんですか、どんなアドミッション・ポリシーなんですか、うちのどんな子がおたくの大学行ったらハッピーになれるんですか、こういったことをきちんと、プレッシャーをかけるとはいいません。きちんと高校側からそういう質問を投げかけることで大学も変わってい

くというふうに思っております。

また、いつもどおり早口でまくし立てるようなお話となってしまうましたが、スピードラーニングだと思ってキーワードだけお持ち帰りいただきたいと思います。どうもありがとうございました。



**ご清聴ありがとうございました!**

※各データや記事はIP内に掲載しています  
リクルート進学総研、または「カレッジマネジメント」/「キャリアガイダンス」で検索してください

大学・専門学校・進学に関するさまざまな調査データを掲載  
リクルート「進学総研」  
<http://souken.shingakunet.com>

ご質問・ご意見ご感想・ご要望も、ぜひこちらからもお願いします。

グローバルマガジンの配信のお申込みをいただくと  
リクルート進学総研Webサイト/キャリアガイダンス.netの  
更新情報をもれなくお伝えします キャンペーンと 同乗

このQRコード  
をスマホで  
読み取ると  
お申し込みWebから  
このボタンから申込画面に進み、  
必要事項を入力してください

## 第 2 部

---

### ● パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】

パネリストによる取組事例紹介

1. 泉 雄二郎（島根県立松江北高等学校 校長／島根県公立高等学校長協会 会長）
2. 立上 良典（広島県立西条農業高等学校 校長／広島県高等学校長協会 会長）
3. 松崎 貴（島根大学生物資源科学部 教授／島根大学地域未来戦略センター長）

助言者 リクルート進学総研所長／リクルート「カレッジマネジメント」編集長

文部科学省高大接続システム改革会議委員 小林 浩

コーディネーター 島根大学教育・学生支援担当副学長 荒瀬 榮

### ● 総合討論

取組事例 1  
 高大接続から入試改革を考える  
 「地元高校から見た島根大学入試改革」

島根県立松江北高等学校 校長 泉 雄二郎

改めまして、皆さん、こんにちは。松江北高校の泉雄二郎と申します。

小林さんのスピードラーニングに私も必死についていきまして、疲れ切っております。ふだん生徒は、チョークアンドトークのこういった授業を受けてるんだなということを改めて感じた次第です。こういうテーマでお話ししようと思いましたが、内容は5つに絞ってお話をしたいと思っております。

1) なぜ、入試改革が必要なのか

入試改革が必要な理由 I

まず、入試改革がなぜ必要なのかということについて、これは私見を交えてお話ししようと思っております。2つの理由をお示ししたく存じます。

一つは、これは小林さんのお話にありましたけれども、やはりつながっていないということなんです。小学校、中学校までの学習と大学の学習は比較的つながっているのだけれども、高校の学習、学習内容ではありません。学び方、学ばせ方の部分についてギャップがあるということでもあります。したがって、高校に入ると、いや、そんなことしててもだめだよと言われるし、大学に行くと、いや、今までそうやってたかもしれないけどそれじゃだめだよと2回否定されるわけですから、放っておくと高校で一生懸命やったことが剥がれ落ちる傾向にあるということ。したがって、学び方の部分でやはり縦につないでいく必要があるかと考えるわけです。

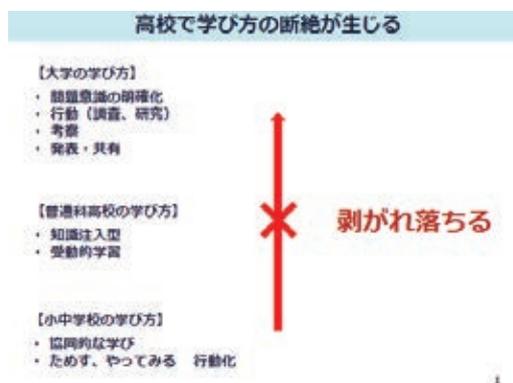
これは、元イェール大学の准教授でいらっしゃる斉藤淳先生の写真であります。先生は大学をやめられまして、今、東京と、御出身の山形で英語の私塾を立ち上げておられますけれども、7月に松江北高校にお出かけいた



- 1) なぜ、入試改革が必要なのか
- 2) 入試改革で高大をうまく接続する
- 3) 大学に触発された学生の歩み
- 4) 地域課題研究に触発された生徒の歩み
- 5) こんな生徒を入学させたい

入試改革が必要な理由

I



だき、生徒、保護者向けの講演と英語の授業をしていただきました。その中で、斉藤先生、日本の入試、それからアメリカの入試についてよく御存じですので、その比較を次のようにまとめてお話をいただきました。

まず、日本の入試はやはり知識しか問いかけてないと。それに対してアメリカの入試は、これも小林さんの話にありましたけれども、もちろん学力は共通テストではかるんだけど、それ以外に推薦状とか志望動機とか課外活動の実績、そういったものを評価するんだと。特に、推薦書の内容については、この若者は社会に、あるいは大学にどう貢献する力を持っているかということをしっかり書かれるのだそうです。したがって、高校の授業はいい推薦書が書けるような形という形の授業になってまいりまして、プロジェクト型、PBL型の授業が多くなるんだと。大学の入試がやはり高校の授業に影響を与えているというお話でありました。

では、これから必要なこととして、幾つか斉藤先生お話しになりましたが、一つは、なぜ学ぼうとしているか、その動機をやっぱりしっかり入れ込む必要があるだろうと。そのために自己分析、自分を深く掘るような場を高校の教育の中で設定していく必要があるだろうと。自分を深く掘るためにさまざまな活動、いわゆる教科型の授業だけではなくて、いろんな経験をさせることが必要であると。これからの世の中に生きる若者たちに必要な教育の内容について問いかける力、問題解決力というような言葉で今言われてますけども、そういったものが求められてくるのだと。学問的な、いわゆる普遍的な価値のあること以外に、社会とか時代の流れの文脈の中での価値は何なのかということを見きわめるような力が必要になってくる、そういったことを学ばせる教育であってほしいということをおっしゃいました。これが入試改革が必要な理由の一つです。やはり高校の授業は大学入試の中身に大きく影響されてるわけでして、知識を問いかける入試である限り、知識入れ込み



斉藤淳（さいとうじゅん）  
1969年山形生まれ。1999年高松代表、イェール大学大学院で政治学を学び、博士号を取得。同大学で政治学部の助教を務めたのち、2012年に帰国。同校、東京都立山形県で中高生向けの英語と数学の講座を創設する。著書に『世界の赤毛インテリがやっている英語勉強法』（中絶出版）、『10歳から身につく問い、考え、表現する力 ぼくがイェール大学で学び、教えたこと』(Oso出版)など。

## 入試改革が必要な理由

### II

**入学者選抜 日米比較**  
JPREP塾長 斉藤淳先生（元イェール大学准教授）

**日本の入試**

- ・「正解」だと受け入れられている**知識しか問わない**
- ・結果として、高校の授業は**知識伝達に終始している**

**アメリカの入学者選抜**

- ・学力入試試験の結果、学校の成績、推薦状、志望動機書、課外活動の実績
- ・推薦書は**プラス評価**、内申書は**マイナス評価**
- ・推薦書 → 個として集団に**どう貢献するか**、他者に**どう貢献したか**
- ・いい推薦書が書ける授業 → **プロジェクト型の授業へ**

**これから必要なこと**

- ・なぜ学ぼうとしているかを**真剣に考える機会があるか**
- ・**自己分析が必要** → 生きている意味を考える
- ・課外活動 → 部活動、インターン など**いろんな経験をさせる**

**良い教育とは何か**

- ・**問いかける力を重要視すること**
- ・問いの設定が**非常に重要** → **提案する**
- ・物事の**価値がわかる力** → **普遍的価値と文脈依存的価値**
- ・**学びたい意欲を大切に**する教育



型の授業が展開されていくということは否めないと思います。

## 入試改革が必要な理由 II

続いて、改革が必要な理由の2番目のお話ですが、これは小林さんのお話の中に詳しくありましたが、今ここへ集っている我々大人の生きてきた時代、特に生まれてから高校を卒業するまでの時代と、今の高校生が生まれてから高校生活を送っている17年の時代というのは相当違うということです。これは対前年度比GDP比較で見た日本の経済成長率のグラフです。よく見るグラフなんですけども。我々というかも少し若い世代ですかね、は大体これぐらい、成長率が4%ぐらいの時代であると。大学を卒業するころにバブルが崩壊したというような時期を生きています。したがって、きょうよりもあしたは豊かになる時代を生きてきた世代。今の高校生はここですから、もうゼロ成長です。その中で、東日本大震災も直接的ではないにしろ経験してる。ですから、きょうよりもあしたは豊かになるだろうと言っても何言っとんのと、そんなことないでしょうという実感の中で彼らは生きてるということです。この先、このグラフが右上がりになるということはまず考えられないわけで、その中で若者たちにどういう教育が必要なのかということを考えたときに、我々世代が受けてきた教育とこれから彼らに与えるべき教育はそれは違うだろうというふうに私は考えます。

元リクルートの藤原和博先生に、ここ数年、学校に来ていただいてワークショップを開いていただけてますが、藤原先生が生徒たちに語られたことです。これからの時代に生きる構えとして君たちにはこういうことを考えてほしいと。言いたいことは、親と君たちの世代は違うんだよという内容です。これまではキャッチアップ、欧米モデル型のキャッチアップの社会であって、今、君たちが生きてる今の時代は成熟型の余り成長が期待できない社会。その中で新たな問題がたくさん発生し



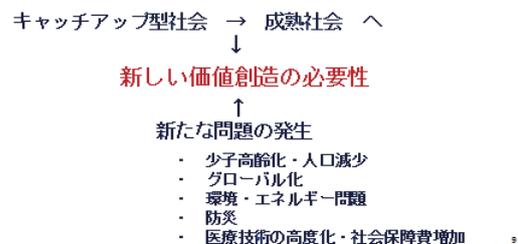
藤原和博（ふじはら かずひろ）教育改革実践家

1955年生まれ。78年東京大学経済学部卒業リクルート入社。東京営業部長、札幌営業部長、東京営業部長などを歴任。02年から3・ロップ代表。06年から株式会社。08年4月から経営者立地中学校校長。09年からは教育界の風潮人校長として活躍。キャリア教育の普及を叫ぶ「よめがけ」や「ベネッセ」など、新しい地域活性化手段として「和歌山県立和歌山大学」や「和歌山県立和歌山大学」の「教育」と「活動活動」が「大規模な大規模」をリアル世界に一手に押す。『私立を拒んだ公立校』を執筆して「本分を学ぶべき」を提唱。『地域課題』という課題を「地域課題」による実践を推進し、学内に立ち上げ。実践と連携した「実践アドベンチャー」や「実践」を推進した実践「実践」に寄り添う実践。

## これからの時代に必要な構え

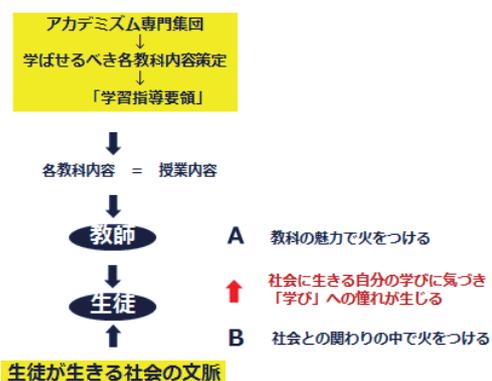
(教育改革家 藤原和博 先生)

## 正解主義 ➡ 修正主義



## 入試改革によって 高大をうまく接続する

### 生徒の学びに火をつけるために



てる。さあ、どうするか。やっぱりこれまでにない新しい価値を創造していくことが必要になってくると。そのためにはキャッチアップ型の、これが正解であるというモデルを追っかけていくのではなくて、まず自分の形でトライしてみる。トライしてうまくいかなかったらそれを変えていくという修正主義の考えが必要であるということです。ですから、入試が正解は1つという形を今までずっと課してきてるわけですけど、それとは違った問いかけが必要になるというお話をなさいました。

## 2) 入試改革で高大をうまく接続する 生徒の学びに火をつけるために

今の2つの入試改革が必要な理由に基づいて、これからどうしていったらいいかということについてなんですけども、この流れが今までやってきたことです。アカデミズムの専門集団がいわゆる教科というまとまりをつくって、それが学習指導要領の中に落とし込まれて、教員はそれに基づいて授業をする。その中で、子供たちの学びに火をつけるための方策は、教科の魅力で火をつけるという方法で展開されてきたわけです。これはこれで重要なことだと思います。ですが、これだけでいいだろうか。先ほどの修正主義の世の中に生きていく若者たちにとって、正解はこれなんだよっていう形の教育だけでいいのかということ考えたときに、子供たちは子供たちのそれぞれの生きている社会的な文脈があるわけですし、その中で学びの必要性に気づかせることが、もう一つの学びに火をつける方法ではないかなというふうに思います。社会に生きる自分らしい自分自身の学びに気づけば、学びというものに憧れが生じるということでもあります。

じゃあ、そのために具体的に何をしたらいいかということなんですけど、一番大きなことはいろんな人とかかわらせるということだと思います。今の高校生は学校と家庭を歩き来してるのみですから、親、保護者、教員以外の大人を余り知らない、世の中をよく知らない

# 人と関わる

- 親・教員以外の大人と出会う
- 価値観・考え方の多様性に触れる
- 他者と対話する
- 新規な世界に自分をすりあわせる

## 島根大学に触発された 高校生

### その10年後



松江東高 → 島根大学生物資源科学部生命工学科 → その後

- 科学の最新線を体感できた経験は大きい。  
大学受験までまるまる2年間もある → 2年もあれば人は変わる。  
科学に対して本気になる時期が人より早かったのは、大きなアドバンテージである。
  - SSHでの活動、先生方の熱意と指導力のお陰で、生物の成績が飛躍的に向上した。
    - 生物学を習い始めたのと、生物学に興味が出たのが同時期であったのが良かった。  
ヤル気 + 先生のスパルタ指導 = 成績は最初からウナギ登り
    - 高校生物なら誰にも負けられないというプライドは、浪人時代の支えになった。  
高校生物の問題で俺に解けない問題は、誰にも解けない、  
ここまで自力出来る科目が1教科でもあるのとないのとは、全然違うと思う。
  - 最後まで諦めずに挑戦し続ける姿勢
  - 新規殺虫剤ピリダリルの作用機構の解明
- 進学先 島根大学生物資源科学部生命工学科  
奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科修士課程
- 就職先 トヨタ自動車株式会社物流管理部物流エンジニアリング室

い。もっと良質な大人、悪い大人もいますから、良質な大人との関係性を構築してやる必要があるのではないかなというふうに思います。

### 3) 大学に触発された学生の歩み

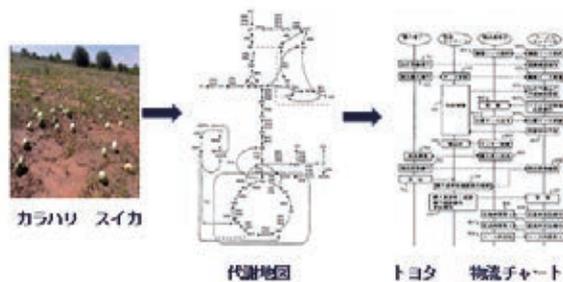
#### 島根大学に触発された高校生 その10年後

今から2つの事例を紹介しますが、これは高校生あるいは大学生が良質な他者との出会いによって学ぶ力を高めていった、そういうお話です。一つは、島根大学にお世話になった若者の話なんですけども、これ、今から10年前、松江東高の2年生のときの彼の写真です。生物資源科学部の中川先生の研究室で実験をしている様子です。この彼が10年後にどうなったかっていうことをお話ししようと思います。余り大きな声で言えませんが、高校の成績はこの時代は非常に悪くて勉強に苦労してました。将来どうするのって、いや、僕は花火師になりますとか言っていましたね。彼が大学、島大での実験、その他、大学の先生の授業等で変わっていきます。これは彼が自分なりに自分史をまとめたものの一部ですけども、やはり高校時代に科学の最先端に触れたってことは自分にとってすごく大きいんだと。そこで、科学に対して本気になるのかなという気が起こってきた。ここが出発点です。残念ながら現役では合格できず、一浪して生物資源科学部の生命工学科に入学します。ここでもいろいろいたずらをしてたようなんですけども、御迷惑をおかけしたんじゃないかと思いますが田丸君っていいんですけどね、御存じの方いらっしゃるかもしれませんが。しっかり生命科学といいますか、遺伝子に関する研究を大学で重ねまして、僕はその研究をきわめるために大学院に行くということで奈良先端科学技術大学院大学に進学します。

#### 行動力と発想力が切り拓くトップ企業への道

そこで彼が取り組んでいたのは、カラハリスイカっていう砂漠に生えるスイカの研究をしてました。このスイカは非常に高温、光も強いところでもちゃんと生育してるっていうことで、抗酸化作用の強い物質をつくってる

#### 行動力と発想力が切り拓くトップ企業への道



私にとっては

**どの段階もかけがえのないもの** であり  
**その全てが今の私を形作っている** と  
実感しています

## 地域課題に触発された 高校生

### 1年の歩み

#### 松江北高校「地域課題解決型」キャリア教育

なぜ学ばなければならないかを理解し**本気で学ぶ**



模索する中で、自分に必要な**“学び”**に**気づく**



どうしたら解決できるか、糸口を**模索する**



自分の言葉で物語る (authenticな) **課題を見つける**



私が生活している地域を**認識する**

- ・私、身近な人が困っていることは何か
- ・どんな課題を抱えているか
- ・今、誰が、どんな取組をしているか

キャリア教育  
課題研究・エクスターナシップ

キャリア教育  
地域調査・インターシップ

そうでした、その代謝について勉強をすることをやってみました。そのままバイオ系の研究者になったかっていうとそうではなくて、これが彼の私はすごいとこだなと思うんですけども、左側、カラハリ砂漠のスイカの写真です。そのメタボリックマップの一部がこれなんですけども、こういう研究をした。これがあるとき、これはロジスティックだということに気づいたんだそうです。細胞の中で物質がいろいろ運ばれていって、変わっていき、ある目的となる物質に変わっていき、製品が、部品があちこちからやってきて物がつくられる、ものづくりのロジスティックなんだと、そういうふう我突然見えたんだそうです。そこから、じゃあ、自分はものづくり、ロジスティックにかかわるような仕事がしたいということで、これはトヨタの物流チャートの一部ですけども、ここへ行こうという発想で入社試験を受けて一発合格をして、今、トヨタの物流関係の物流管理部物流エンジニアリング室というところで研究者として生活をしています。花火師がトヨタに勤めてるとということなんですけども、その過程の中で、やはり良質な大人、島根大学の教育力に出会ったことが彼をものすごく大きく変えたと私は思っています。彼自身もこういうことをメールに書いてきまして、こんな言葉を聞くと教育者としてはとてもうれしいわけなんですけども、やあ、先生方の僕に与えてくれたことが一つ一つ今自分の中で確実に花開いてますとか何か言ってくれるわけですよ。ああ、そういうふうには育ってきたんだということを感じます。

これが一つの若者たちの育ちの姿だと私は思っています。必ずしも、いわゆるスコアはよくない。よくないですが、心の中に学びに対する何か種といいますかね、そういうものが植えつけられて学びに真っすぐ向き合っただけで伸びていったと。あるときのぱっと瞬間、気づいたことが、ひらめいたことが一生の仕事につながってきてると、そういう若者であります。

#### 4) 地域課題研究に触発された生徒の歩み

##### 松江北高校「地域課題解決型」キャリア教育

次に紹介するのは、これ、今、松江北高校で取り組んでいる取り組みのお話でございます。昨年から1年生を対象に地域課題解決型キャリア教育と、私、勝手に名前つけてますが、そういう展開をしています。まず地域を認識させる、その中で課題を見つける、課題を解決するための糸口を模索する、その中で必要な学びに気づく、本気で学ぶようになると、これが作業仮説です。なぜそんなことを始めたかっていうと、一番上です。本気で学ぶ生徒にしたいと、主体的学びって言う言い方をしますが、私、あんまりその言い方好きじゃなくて、とりに行く学びって言う言葉を使っていますけども、そういう生徒にしたいという目的でこういう取り組みを始めました。一番重要なところは、既存のものに、調べ学習とか、あるいはインターンシップとか取り組むだけでなく、彼らの発想で何かやらせてみる。インターンシップに対してエクスターンシップという言葉が使えるんじゃないかと思うんですけども、そういうことが重要だと思っています。

やってみてどうだったかと。1年生全員、320人全員に取り組みさせるんですけども、意識の変容、ごくわずかな変容ですけども、この2.5のところは平均値でありまして、この左側がやる前、右側がやった後なんですけども、少し右にシフトしてる、わずかですよ。効果はあるんだなということを感じます。一番下の地域課題の解決に自分もかかわりたいという意欲を持てると、ここも右にシフトしていますが、このあたりがもう少し大きく動いてくれるといいかなというふうに思っています。

##### 地域課題研究の流れ

これが具体の流れです。たくさんの大人の人に来ていただいて話を聞かせる、やりとりをさせるっていうシーンをつくっています。フィールドワークと書いてありますが、これはもう勝手にどっかへ行ってこいと、アンケート

トをとるなり話を聞くなり、もうどんどん行けということを出かけさせます。苦情の電話もいっぱいかかっていますが、それはそれとして、もうとにかく思い切ってどこでも行けということを取り組ませています。これはことしの1年生が取り組んでいる課題の一部です。大体、1グループ6人ぐらいのグループでやるんですけども、彼らが見出したそれなりに自分たちで取り組みたいと掲げてる課題の一覧であります。

これ、藤原先生のワークショップの様子です。職業人講話の様子です。これは先日行われました成果発表会、ポスターセッションの様子です。こういう形で、生徒あるいは外部から来られた方とのやりとりをしています。これはつくられたポスターの一部です。これ1年生です。これぐらいのものはつくりますよ。内容はともかく、見てくれよく上手につくりますし、内容もそこそこ突っ込んだ内容のものがあります。

これが昨年、昨年は手書きでやらせてましたので、昨年のポスターの最優秀をとったグループでありまして、松江の英語力を高めることによって国際文化観光都市としての松江のホスピタリティを高めようと、そういう取り組みを提言したポスターであります。このグループは提言しただけじゃなくてやらせろと言いましてね、じゃあ、やってみたらってということでどんどん外に出かけさせました。自分たちのつくったプログラムで小学校で英語の授業がしたいということで、これは附属小学校の3年生に彼らが外国語活動をしている写真です。全く教員はノータッチです。彼らがつくったプログラム、松江を題材にした英語活動のプログラム。生徒たち、子供たち、非常によく活動してくれました。これはそのときの新聞記事です。

### 世界を視野に入れた学びを求め始めている

やってみますと、まだまだ英語力が足りないとか世の中が見えてないとか気づき出すわけですね。それで取り組んだグループのメンバーの数は、春休みにアメリカの東海岸

- 教育 □ 大学進学において、県外の大学に進学し帰って来ないのはなぜか  
□ 松江市の学区制は必要なのか
- 政治 □ 十八才選挙権に対する若者の必要性・重要性とは  
□ 少子高齢化社会による市の課題と改善方法について
- 経済 □ Rubyを使って地域の発展に貢献するにはどうすれば良いのか  
□ シャッター商店街の課題点とこれからの課題について
- 医療 □ 医療・福祉の働く人が減らないためにはどうするか  
□ 島根県内における医療格差とはどういったものなのか
- 環境 □ 堀川の水質汚濁の原因とその解決策は  
□ 松江の環境と今後の発電をどうしていくか
- 観光 □ 松江城が国宝となった今、私たちにできることは何か  
□ 松江の地産地消の料理を全国に広めるにはどうしたらいいか
- 文化 □ 伝統芸能ほどのような形で今の私たちに受け継がれてきたのか  
□ 方言の未来はどうなるのか

### 地域課題研究の流れ

- 1) 市役所職員による地域課題の現状に関する講義
- 2) 取り組みたい課題を探す
- 3) 情報編集力を高めるワークショップ
- 4) 地域課題に関するフィールドワーク
- 5) PTAのOB・地域の有志による職業人講話
- 6) 調査のまとめ、提言まとめ
- 7) 発表原稿・ポスター作成
- 8) ポスターセッション
- 9) 市長提言・課題解決実践演習

### 地域課題研究 実施前後の意識の変化

評価(1~4) 中間値 2.5	2.0	2.2	2.4	2.6	2.8	伸び
	●(実施前) → ●(実施後)					
地域の抱える問題について興味をもったり意識したりしたことがある		●			●	0.46
身近な問題について話し合ったり考えたりすることは好きである			●		●	0.27
他者と話し合いをしながら意見をまとめて発表する授業は好きである			●		●	0.27
地域の課題解決に自分も関わりたいという意欲をもっている			●		●	0.25



へ研修旅行に出かけました。たくさん生徒がいますけど、この中の9人が松江北高の生徒でして、これはハーバード大学で、日本からハーバード大学に留学してる学生たちとのセッションをしたときの写真であります。自分に足りないことはやっぱり自分でとりに行くようになります。必要な学びをとりに行くようになる。

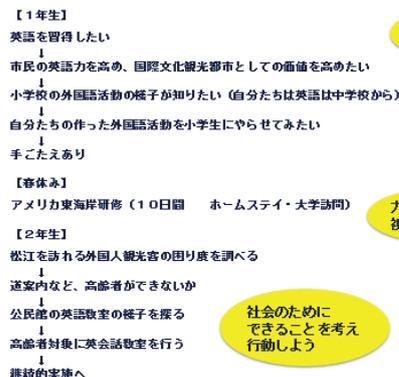
さらに、2年生になりまして、もっとやはり社会に直接役立つようなことがしたいということで、松江の英語力を高める、なるほど、小学生の英語力を高めてもいいんですけどすごく時間がかかると。外国人に対して直接話ができるのは高齢者じゃないかということに気づきまして、じゃあ、高齢者の英語力を高めようということで、今、北高で月1のペースで高齢者を対象にした英会話教室が開かれています。これなかなかおもしろくて、自分たちのグループだけではできないのでESS部を呼び込むとか、それから、ちっちゃい子供さんが来られたときにそれをケアするためのボランティア部による学童保育なども用意します。そういうふうに分たちのやりたいことにいろんな生徒を巻き込んで動きが出てきています。これはその様子です。女子高生と楽しく英会話を勉強するおじさんであります。こういうふうにおばあちゃんが孫さんを連れてこられまして、おばあちゃんもお孫さんも一緒に英会話を学ぶと、こういうシーンであります。これ未来の北高生なんですけども、こういう形、これとてもすてきな写真だなと思います。こういうことが今展開されてるといふことであります。

1年生のときは、自分が何ができるかわかんないけどとにかく何かやってみようと、その中で、自分に足りないことに気づく、そして、もっと直接的に社会に貢献するための取り組みを始める、こういう流れが生徒たちの中にできてきているということです。これは、今、1、2、3年、各学年が掲げてる学年の指導目標なんですけども、自分から始まって、他者、社会と視野が広がっていくように子供



### 世界を視野に入れた学びを求め始めている

春休み	→	アメリカ東海岸研修旅行	9人
夏休み	→	短期留学	4人
秋から	→	長期留学	1人



たちを育てていこうということで動いています。先ほど紹介した生徒たちはまさにこの流れに乗って来てるなということを感じます。

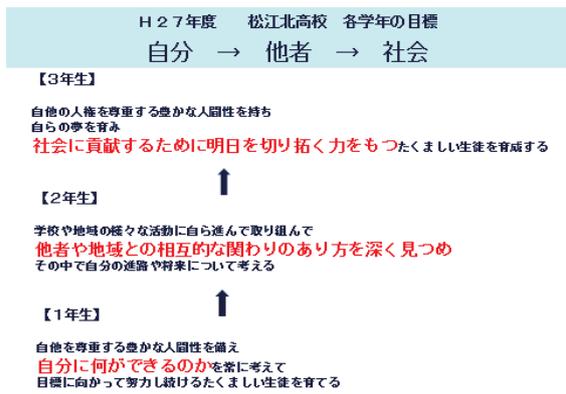
### 5) こんな生徒を入学させたい

おととい開かれた、しまね教育の日のフォーラムです。地域で活躍する若いリーダーと島根県の高校生がセッションをした場面なんですけども、若いリーダーたちの言う言葉と高校生の語る言葉、浜田商業高校、それから飯南高校、松江北高校の生徒たちですけども、これ非常にマッチしてると。高校生、やはり地域に出て何かやりたいと。若いリーダーたちは大人のネットワークの中に高校生活を巻き込みたいということを言っておりまして、こういった関係性から、新しい、島根らしい教育が生まれてくる予感を私は感じております。そういうふうにより地域を意識した、自分で積極的に学ぶ子供たちが、松江北高校だけでなく、島根県の専門高校、普通科高校、もうあらゆる高校で育ちつつある、そういう子供たちが島根大学に入学して飛躍してほしいなという思いでいます。

こんな高校生が受験したら合格させますか、目の前にこういう高校生があらわれたらどう思われますでしょうか。結構頼りなさそうではありますが危険な道を自分の足で歩もうとしていますよね、この人とちょっとかぶるんですけども。こういう姿を評価していただきたいなと思うわけです。つまり、ちゃんと自分の足で歩めるような強い足腰、基礎学力があって、少々のことでは転ばない経験値がある



# こんな生徒を入学させたい



#### A 基礎学力

(当面) 大学入試センター試験 + 個別試験

※ 英語は外部検定試験を利用

#### B バランス(経験値)

調査書 部活動その他課外活動の実績 集団面接

#### C 志(学問的関心・社会貢献意識)

小論文試験 学修計画

#### ※ 配点

A : B : C = 2 : 1 : 1 → 基礎学力以外の得点での逆転幅を大きく

ること。さらにちゃんと前を向いて貢献意識とか学問への関心を持って、よちよちではありませんけども歩もうとしている、こういう高校生をぜひ島根大学に送り込みたいなというふうに思います。

じゃあ、そのために何を評価するかということなんですが、基礎学力については今までも評価していただいています。英語については外部検定試験を導入することも考えられましょう。B、Cの部分、これは今まで余り評価なされてなかったところで、総合的な評価というのはここら辺にかかってくるんじゃないかなと思います。勝手に書きましたけれども、部活動その他課外活動の実績を評価するような形、それから集団面接を行うと、あるいは

小論文試験を行う、学修計画を提出させる。この赤で書いたところは、これは大学に新しく取り組んでいただきたいこと、青は、これは本人あるいは高校が準備すべきものということで、これぐらいのことをやればペンギンのような学生を入学させることができるんじゃないかなというふうに思います。勝手に配点比率まで書きましたが、A対B+Cが、やっぱり学力とそれ以外のところが1対1ぐらいになるように、学力以外のところで逆転できるような形の科目設定がいいのかなというふうに思っております。

以上、松江北高校の取り組みを中心に、私の思いも含めてお話しさせていただきました。御清聴ありがとうございました。

## 取組事例2

### 高大接続から入試改革を考える 「グローバルな視野を持って社会に貢献する 人材の育成と高大接続」

広島県立西条農業高等学校 校長 立上 良典

皆さん、こんにちは。広島県の西条農業高等学校から参りました立上と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、私に声をかけていただきまして、広島からやってまいりました。ここにたくさんの皆様方がお集まりになられまして、少しでも参考になるような事例の紹介ができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたしますと思います。

#### 1 「トビタテ！留学JAPAN」

今ここへ映っております方々は、イタリアのモデナというところの市長室に集まれた方々であります。女性の方、一番右側がカフェ・キャリアーの社長です。右から2番目がモデナ市の市長さん、その次が本校の濱崎という生徒です。その左が、その濱崎が2週間、研修を行うレストランのオーナーシェフです。その左が沖という、本校の生徒で、アグリツーリズムを研修するというのでモデナへ行っているわけであります。一番左が、そのアグリツーリズムの施設のオーナーの息子さんで、ワイナリーの責任者をやっておられる方です。このような方々に囲まれて、この2人が8月の30日から9月の16日までモデナで研修を行いました。これは文部科学省が実施しています、「トビタテ！留学JAPAN」に応募して、今年の2月からずっと資料をつくったり面接があったりということで、最終的に、全国で303名のうちの2人に選ばれて行ったわけであります。ここにそれぞれの生徒の言葉を示しておりますけれども、アグリツーリズムについて学びたいと、自分の家は広島市の豊栄町の牧場であるけれども、小学校、中学校の減少が進む中、地元の豊栄



2 SSHにどう取り組んできたか3年間 畜産科3年 佐藤 太紀

研究テーマ「鳥類の性決定・性分化に影響を及ぼす要因についての研究」

年度	学年	月	研究会・研究会等
平成27年	1年	3月	日本動物学会(福岡県大分県(大分県))
		4月	中国動物学会(福建省(福建省))
		8月	平成27年度「アグリツーリズム」研究会(広島県)
平成28年	2年	3月	日本動物学会(福岡県大分県(大分県))
		11月	第1回日本動物学会(日本動物学会(日本動物学会))
		12月	第1回日本動物学会(日本動物学会(日本動物学会))
平成29年	3年	3月	第1回日本動物学会(日本動物学会(日本動物学会))
		8月	第1回日本動物学会(日本動物学会(日本動物学会))
		11月	第1回日本動物学会(日本動物学会(日本動物学会))

町の将来のことが非常に心配だと、どうやって中山間地域に人を集めればいいのかということのヒントを学びたいというのがこの沖という男子の動機であります。濱崎のほうは、イタリア料理の味や美しさを育んだ風土や文化を見たいと、イタリアと我が国の文化が融合できたらおもしろいんじゃないかと言っております。

このモデナという都市は、イタリア北部のボローニャに隣接しておりまして、人口がおよそ18万人、ミラノより少し南のほうになるんですけれども、大体松江と同じぐらいの規模であります。ここで有名なのがフェラーリ社の本社があるということ、あるいはオペラ歌手のルチアーノ・パパロッチの出身地であるということ、さらにバルサミコ・ピネガーを、御存じだと思いますが、これが倉庫というか蔵であります。これがパルミジャーノ・レッジャーノということで、パルメザンチーズという言い方をしますけれども、ここがその有名な産地であります。これが世界的に有名などいいますか、オーストリア・フランチェスカーナという、全世界のレストランのランキングで大体五指に常に入るような有名なレストランです。こういうところへ行ってこの2人が研修したということの一つ御紹介します。

## 2 SSHにどっぷり漬かった3年間

もう一つ、これは本校の佐藤という生徒ですが、入学した時からいろいろ研究テーマを探っていたわけですが、この生徒は平成24年のSSHの指定の翌年入学しまして、動物の性について興味を持って、爬虫類はふ卵温度の変化によって雌雄が揺れるように、鳥類にも同じことが言えるんじゃないかという仮説を立てて研究を重ねてきております。特に大きかったのは、2年生のときに朝日新聞が行っている「高校生科学技術チャレンジ」で最終審査の30名の中選ばれ、あと一歩でアメリカのピッツバーグで行われるISEFに行けるところまで進んだんですけれども、残念ながらそこまでは行けませんでした。こ

の生徒は3年間一生懸命その研究をして、いろんな面で、プレゼンテーションも非常に素晴らしいものをしてくれるようになっていきます。

このような3人の生徒を紹介させていただいたんですけれども、高等学校の教育というものか、あるいは大学の教育へつながっていくのか、あるいは高等学校でどのような生徒を育てているのか、その高等学校で育てた生徒を大学でどのように評価していただけるのか。今のこの3人を、大学関係者の皆様方はどのように捉えてどのような方法で評価していただけるのかということが私の発表の主要なテーマであります。

## 3 SSH指定3年間の成果—育成する生徒像—

4年目になりますけれども、このような生徒を本校では育成しているということでまとめました。一つが、3年間の学びを通して将来の職業・生き方を選択できる生徒、2つ目として、高いプレゼンテーション能力を持って自分の研究内容を通してグローバルに交流できる生徒、3つ目として、現代社会の抱える問題の解決を目指して科学技術を通して社会に貢献できる生徒、そういう生徒を育てているつもりです。

## 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

これが本校の全景であります。このあたりとこのあたり、これが本校の農場と校舎です。ここが広島大学の農場になります。ここが広島中央サイエンスパークで、この3つの学校、施設が隣接したところにあり、いろんな意味で研究を進めていくに当たって有利な条件に恵まれているということが言えます。そのほかに、本校の特色としまして、海外連携について、平成元年からタイ王国あるいはニュージーランド等と連携をずっと進めてきたという歴史を持っております。あるいは、農業高校の強みを生かして、全校生徒を対象にしてSSHの取り組みを行っているということです。さらに文部科学省のいろいろ事業の指定も受けており、事業にかかわっての学校としての推進体制が整っていると、あるいは大学

進学に力を入れてきた歴史を持っております。平成に入ったころから、農業高校ではありませんが、地域への就農といますか、担い手育成ということについて、非常に厳しい現実の中で、当時の校長が、大学へ行って農業を学んで農業と関係のある仕事へ就けということで、国公立大学へ行かせることに力を入れて進学実績を上げていくという方向性をとってきて今に至っているということでもあります。今申し上げたような学校としての特色を生かして、平成24年度からSSHの指定を受けて取り組みを始めました。また後でゆっくり見ていただければと思うんですけども、かなりいろんな取り組みを、組織的、有機的に行って生徒の力を伸ばしてきています。

### 5 本校SSHの研究開発課題

これがキャリア教育的に捉えた場合の流れでありますけれども、自分の興味、関心に基づいて入学して研究テーマを設定して、大体112の研究グループが2年生、3年生で並行して研究を進めていると言えます。さらに、それをパワーポイントにまとめてプレゼンを行ったり、あるいは英訳を全ての生徒にさせて、英語でプレゼンをさせたりしております。そして、それぞれが自分が研究を進めたいという、そういう道を選んで進学していく、あるいは自分の進路に進んでいくということでもあります。

これがその科学技術リテラシーということで、SSHの指定を受ける前の年にいろいろと研究をして学校として取りまとめたものです。今申し上げた112の研究テーマのうち、特に大学の先生に指導していただいたり、あるいはSSHの予算を分配するというので、28の研究テーマを重点研究テーマとしてまとめて行っています。

これは地元の中学生、小学生、あるいはSSHの指定校である広島大学附属高等学校との連携の様子です。海外交流、さっき申し上げましたように、これまでの流れからいろんな面で積極的な展開を行っているわけですね。

### 3 SSH指定3年間の成果 – 育成する生徒像 –

#### (1) 3年間の学びを通じて将来の職業・生き方を選択できる生徒

SSH指定の年に入学しSSHの教育課程で3年間学んだ最初の卒業生が、この春、卒業した。3年前に入学した生徒は、自分の興味関心に基づいて課題を設定し、それを3年間研究、その研究をさらに深めようと大学等の具体的な進路を選択して、将来の自分の職業・生き方につながるという意欲をもって本校を飛び立った。

#### (2) 高いプレゼンテーション能力を持ち自分の研究内容を通してグローバルに交流できる生徒

彼らは、この3年間、自分の研究を整理し、自分の考えを自分の言葉で説明する、英語に翻訳してプレゼンを行うという訓練と経験を積み重ねることにより、多くの生徒が人前で堂々と発表することができるようになってきた。海外連携の成果は、一部の生徒に留まるのではなく全体に波及し、生徒は大きく成長している。

#### (3) 現代社会の抱える問題の解決を目指し科学技術を通して社会に貢献できる生徒

生徒の研究は、本校で農業の専門教育を受け日々実験・実習に取り組む生徒たちが、その学習活動の中で抱いた問題意識を起点として、その解決のために日々取り組んできた研究である。したがって、その研究は、現代社会が抱える農業・食料等の諸問題を解決しようとする明確な目的を持つものであって、将来の我が国における社会貢献につながる。

### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

#### (1) 恵まれた立地条件と高大連携の実績



### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発



### 4 学校の強みを生かした本校SSHの研究開発

- (2) 海外連携の実績
  - 広島大学、JICA等を通じた多様な国際交流
  - 平成3年度～ タイ王国研修 (平成10年度まで10回)
  - 平成12年度～ ニュージーランド研修 (平成15年度まで4回)
  - 平成18年度～ 第2次タイ王国研修 (平成19年度まで2回)
- (3) 農業高校としての強み
  - 全校生徒を対象とした専業農研が可能
  - 専門科目「課題研究」を有効に活用
  - 農業の専門教育に携わる多数の教員の配置
  - 農業高校拠点校としての充実した施設・設備
- (4) 研究開発の実績と推進体制
  - 平成15年度～17年度 文部科学省指定「研究開発学校」
  - 平成19年度 日本学校農業クラブ全国大会広島大会実施
  - 平成20年度～22年度 文部科学省指定「目指せベストハイスクール」
  - 平成24年度～ 文部科学省指定「スーパーサイエンスハイスクール」
- (5) 大学進学に力を入れた進路指導の実績
  - 国公立大学 30人 4年制大学 50% 進学 80% 就職 20%

れども、現在、アメリカ、さっきのイタリア、フィリピンということで、3カ国との交流を進めています。これは上のほうが、イリノイ・ステート・ユニバーシティーで、平成24年度から交流を行っています。下のほうが、ユニバーシティー・オブ・イリノイ、これは昨年度から交流を進めています。生徒はそれぞれ自分の研究テーマを持って訪ねて行って、そこで大学の先生や大学院生にその研究を聞いてもらうということをやっているわけでありまして。

今月、11月の9日から、フィリピンへ生徒10名、教員2名が行きます。ここへ示させていただいておりますように、かなりいろんな大学や研究機関、あるいは高等学校と交流を行います。フィリピン大学の教育学部附属一貫校、ルーラル高等学校、あるいは国際稲研究所という非常に有名な研究施設があります。さらに、ちょっと特徴的なのが、ここへ示しておりますけれども、Btコーン・ファームということで、パチルス・チューリンゲンシスという昆虫病原菌の一種を遺伝子組み換えでトウモロコシに移植して害虫耐性の強いトウモロコシをつくっている農場であります。これは2001年にこの害虫に対して使った農薬の量が翌2002年には3分の1に減ったということで、非常に大きな効果があった遺伝子組み換えのコーンなんですけれども、その農場を見学に行きます。といいますのが、このフィリピンの研修については、バイテク情報普及会というバイテク作物の開発を行っている外資系の会社6社、シンジェンタ、ダウ、デュポン、モンサント、バイエル、BASFという会社の組織体ですけれども、そういうところからの全面的な支援をいただいてこの研修に生徒を行かせることができました。そういう意味で非常に意味があると思っています。

## 6 評価

これは昨年、日本教育新聞で取り上げてもらったんですけども、生徒がもともとそんなに英語が得意ではないし好きでもなかった

## 5 本校SSHの研究開発課題

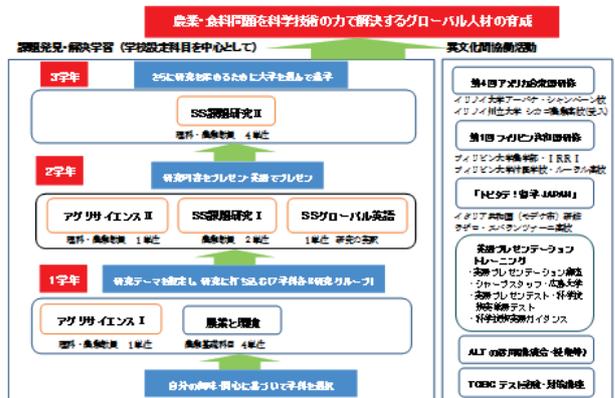
研究開発課題名  
**農業・食料問題を科学技術の力で解決するグローバル人材育成プログラムの開発**  
 研究開発の目的

生命、食、環境、エネルギー等の分野における問題解決能力を高め、持続可能な社会の形成と発展を担う科学技術系人材を育成する。

### 研究開発の目標

①研究レベルの高度化による科学技術リテラシーの向上	②高度技術向上と科学技術系人材育成の促進	③海外進出等による国際性を育成するための教育プログラムの開発
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 総合研究テーマ20テーマ</li> <li>② 重点研究(産学共同)10テーマ</li> <li>③ 国際共同研究(海外)10テーマ</li> <li>④ 国際共同研究(国内)10テーマ</li> <li>⑤ 国際共同研究(海外)10テーマ</li> <li>⑥ 国際共同研究(国内)10テーマ</li> <li>⑦ 国際共同研究(海外)10テーマ</li> <li>⑧ 国際共同研究(国内)10テーマ</li> <li>⑨ 国際共同研究(海外)10テーマ</li> <li>⑩ 国際共同研究(国内)10テーマ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 産学共同研究(産学共同)</li> <li>② 産学共同研究(産学共同)</li> <li>③ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>④ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑤ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑥ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑦ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑧ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑨ 産学共同研究(産学共同)</li> <li>⑩ 産学共同研究(産学共同)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 海外共同研究(海外)</li> <li>② 海外共同研究(海外)</li> <li>③ 海外共同研究(海外)</li> <li>④ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑤ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑥ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑦ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑧ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑨ 海外共同研究(海外)</li> <li>⑩ 海外共同研究(海外)</li> </ul>

## 5 本校SSHの研究開発課題



## 5 本校SSHの研究開発課題

### 科学技術リテラシー(12能力)と学校設定科目

能力	意味のある能力	評価指標	学校設定科目		
			アグリサイエンスI	アグリサイエンスII	SSグローバル英語
調査能力	解決調査、社会ニーズの調査ができる。		○	○	○
問題発見能力	調査結果に基づき、問題を発見できる。		○	○	○
仮説設定能力	調査結果に基づき、問題についての仮説を設定できる。		○	○	○
計画能力	仮説を検証するための計画を作成できる。		○	○	○
結果・技術評価能力	仮説を検証するために必要となる結果・技術を評価することができる。		○	○	○
コミュニケーション能力	研究グループのメンバーとコミュニケーションがとれる。		○	○	○
経済的実践能力	実践計画に基づき、経済的に実践できる。		○	○	○
将来予測能力	得られたデータの傾向性や数値変化の傾向性を検討できる。		○	○	○
整理・説明能力	検証結果を明確に説明できる。		○	○	○
社会における実践能力	幅広い大域で、真実を用いて社会貢献を達成できる。		○	○	○
プレゼンテーション能力	結果・発見を伝えるプレゼンテーションができる。		○	○	○
評価能力	自分の成果や他の生徒の成果について正しく評価できる。		○	○	○

## 5 本校SSHの研究開発課題

### (1) 研究レベルの高度化による科学技術リテラシーの向上

能力	評価指標	評価方法	評価時期
調査能力	解決調査、社会ニーズの調査ができる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
問題発見能力	調査結果に基づき、問題を発見できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
仮説設定能力	調査結果に基づき、問題についての仮説を設定できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
計画能力	仮説を検証するための計画を作成できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
結果・技術評価能力	仮説を検証するために必要となる結果・技術を評価することができる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
コミュニケーション能力	研究グループのメンバーとコミュニケーションがとれる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
経済的実践能力	実践計画に基づき、経済的に実践できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
将来予測能力	得られたデータの傾向性や数値変化の傾向性を検討できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
整理・説明能力	検証結果を明確に説明できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
社会における実践能力	幅広い大域で、真実を用いて社会貢献を達成できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
プレゼンテーション能力	結果・発見を伝えるプレゼンテーションができる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年
評価能力	自分の成果や他の生徒の成果について正しく評価できる。	調査報告書、インタビュー記録	1学年、2学年



けれども、やっぱり研究内容を、さっき申し上げたような形で海外へ行って、アメリカへ行って発表して聞いてもらおうと、そういう動機づけといますか、目的というものを持って、勉強することを通して、非常に力が伸びているんだということを紹介してもらっています。それらの評価についてもいろいろと手法を用いながら評価を行っているわけでありましてけれども、ルーブリックを使って、特に学校設定科目についてこのような形での評価を行っています。

### 7 SSH研究開発中間発表会

また、5年間のSSHの指定であります、その中間年であります昨年11月に、今から1年前ですが、中間発表会ということでアメリカのイリノイ州立大学の学部長に来てもらったり、あるいはアメリカ大使館の農務官に講演をしてもらったりしました。これは県内のSSH、SGHの指定校、加えてイリノイ州立大学の学生でパネルディスカッションを本校の生徒が中心となって行ったというものでありますし、これは英語で研究発表を何人かの生徒にさせた場面であります。

### 8 SSH研究開発の効果

進路への影響としてここへ示させていただいておりますが、非常に顕著な変化が現れているということが言えます。学科特性に応じた、あるいは研究テーマに応じた進路を選択するようになっていったというのがこのグラフからわかりますのと、国公立大学を中心として、学習に対しての、あるいは進路に対しての高い目標を設定して、それに対して努力していこうという傾向をはっきりと示していることが言えます。

### 9 貧困問題は途上国だけの問題ではない

これはSSHの指定を受けた年に入学してきて、この春卒業した生徒がJICAの作文に応募して賞をもらった作品です。ここで彼女が言ってるんですけども、外国に行くということは異文化を受け入れて尊重し調和することである。アメリカにも家族のホームレスがいて、行ったときに見た。貧困問題は決

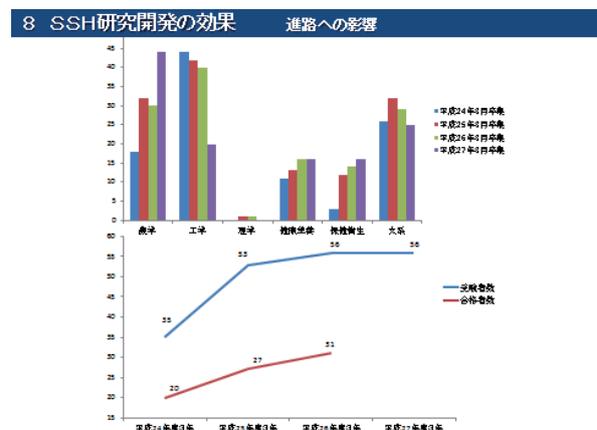
して途上国だけの問題だけではないと。あるいはマラウイの子供、これは実際に行った方からの講演を聞いたときの写真を見ての感想なんですけれども、子供たちの目が非常に生き生きとしていた。本当の幸せってというのは何なんだろうかと。自分は大学で一所懸命英語をさらに学んで、卒業したら青年海外協力隊で発展途上国の農業の支援をしたいと、卒業したら実際にそのような活動をする経験を通して、さらに農業の教員になって生徒にそれを教えていきたいんだという目的を持って、この春大学へ進学していきました。

### 10 「確かな学力」とは

このような生徒を育てていくということが、今、言われています「確かな学力」ということで全体を考えたときに、非常に本校の取り組みは、それを意識した取り組みにしているつもりであります。

### 11 確かな学力育成のための取組スケジュール

SSH、あるいはSSHの取り組み以外にこのようなことを考えながら、実際の取り組みを進めておりますけれども、これが今示させていただいた中身をガントチャートにして示したものであります。ほとんど読めませんが、3年間のガントチャートでかなり大きなデータでありますので、つくって教職員で共有しながら進めています。



### 12 主体性を持って学び続ける人材を育成するために

最後に、今申し上げたような取り組みを本



取組事例3  
 高大接続から入試改革を考える  
 「期待する学生像・育てたい学生像からみた入  
 試改革への期待」

島根大学 地域未来戦略センター長  
 生物資源科学部 教授 松崎 貴

よろしくお願いします。松崎でございます。  
 今、お二人の校長先生から高校の事例につ  
 いて御報告いただきましたので、私のほうか  
 ら大学の事例につきまして、私が所属してお  
 ります生物資源科学部並びにこの3月まで勤  
 めておりましたキャリアセンター、地域課題  
 学習支援センター、それから今の地域未来戦  
 略センター、これらの経験をもとに少し御紹  
 介したいと思っております。

きょうのお話は、まず大学がどういう受験  
 生を求めているのかということ、その評価につ  
 いての話、それから私が今後入試においてど  
 ういうことを考えていく必要があるのか、ど  
 ころ辺を考えているのかといった話を御紹介  
 したいと思っております。

島根大学の求める人材像

もう何度も出てきております、島根大学の  
 アドミッション・ポリシーですけれども、上で  
 大学の目指す教育の内容が書いてございます。  
 それと直接ではないですけど対応するような  
 形で、このような人材を求めていますという  
 ふうに書いております。このほかに各学部学  
 科では、さらに具体的な内容を書いているわけ  
 で、ここでは生物科学科のアドミッション・  
 ポリシーを持ってきたものですが、最初  
 にどういう内容の教育をするかっていうこと  
 を書いておまして、そのために基礎学力を  
 備え、強い意欲を持ち、それから科学的な好  
 奇心に富んだ人を求めていますということで、  
 入試の形態ごとに、一般入試では、推薦入試  
 では、それからAO方式でやっております地  
 域貢献人材育成入試では、ということを書い  
 ております。多様な入試があるのでそれぞれ

平成27年度大学改革シンポジウム  
 「大学入試改革」どう変えるのか

期待する学生像・育てたい学生像  
 からみた入試改革への期待

国立大学法人 島根大学  
 地域未来戦略センター長  
 生物資源科学部教授  
 松崎 貴

コンテンツ

- ・ 島根大学が求める人物像
- ・ 大学で学ぶためのジェネリックスキル
- ・ 探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか
- ・ 大学で育成するコンピテンス
- ・ 卒業研究で化ける学生
- ・ 就業力の育成とその評価
- ・ イノベティブ人材の育成
- ・ 減点式評価と加点式評価
- ・ これからの大学入試に必要なもの

島根大学の求める人材像

島根大学が目指す教育は、次のとおりです。

- 自然のしくみ、社会の歴史と構造、豊かな学術文化、人間への理解を深める教育
- 幅広い知識、広い視野、総合的な判断力を身に付け、豊かな世界観をまぐくむ教育
- 自らの社会的役割に対する自覚を深め、現代社会を担う専門的力量を高める教育

島根大学は、主体的に学び、自らを高めようとする人を求めます。

- 自然、社会とその歴史、学術文化、人間への理解を深めようとする知的好奇心が旺盛な人
- 人と社会へのつながりを大切に、専門的力量を高めようとする人
- 地域及び現代社会の諸課題に目を向け、積極的に関わろうとする人
- 高等学校段階の基礎的な学力を十分に身につけ、入学する学部・学科で必要とする教科・科目で優れた学力を有する人

生物科学科では、多岐にわたる生命現象を、生物集団から個体、細胞、さらには分子に至る種々のレベルから捉え、理解する能力を育むことを目標としています。

そのために、学生の皆さんが、

- (1) 様々な生物科学の知識を統合し、自ら設定したテーマを実験・観察を通して主体的、多面的に探究すること、
- (2) 研究成果を発表し、互いに議論を交わすこと、
- (3) 生命現象を科学的に学び、探究する者として果たすべき社会的責任について考え身につけること、

ができるようなカリキュラムを編成し、教育を行っています。

このカリキュラムにおいて十分な学習成果をあげるために、生物科学科では高校までに習得すべき**基礎学力を備え**、生物科学を学ぼうとする**強い意欲を持ち**、生命現象を深く探究しようとする**科学的な好奇心に富んだ人**を求めています。

特に、**一般入試**では「生物」を含めた**基礎学力が総合的に優れた人**を、**推薦入試**では**優れた学業成績に加えて、生物科学の様々な分野への強い探究心を持つ人**を受け入れます。

**地域貢献人材育成入試**では学業と人物が優秀で、生物科学の学習と研究の成果を通して、将来、地域社会の発展に寄与したい人を歓迎します。

に分けて書いておるわけでございますけれども、大学がどういう力を求めているのかっていうのをすごく大ざっぱに分けますと、一つは必要な知識という部分、もう一つは意欲の部分なんだと思います。それと、学び続ける力っていうものがあると望ましいと。これに加えて、昨今では汎用的な学修能力いわゆるジェネリックスキルというものが必要だというふうに考えられている。ですから、こういう三つの力を求めていきたいというふうになってきているかと思えます。

しかし、先ほどのアドミッション・ポリシーの中で、受験生が何をどこまで身につけておかなければいけないのか、あるいは我々がそれをどういう比率で評価するのかといったところは明示されていないわけです。その理由はいろいろございますけど、一つは入試形態が多様でございます、前期、後期があります、推薦もあります、AOもございます。それから、入ってくる学生さんたちの入学目的というのもさまざまです。そういった中で、これを統一して書いていくということがなかなか難しいということが一つある。またその評価をどうするかっていうところのコンセンサスがまだきちりとはできていない。そういう中で具体的に書いてしまうと、逆にそれ以外のところは要らないんじゃないかというような誤解も生じてしまう。そういうことがあって、なかなか具体的な内容になってない部分があるかと思えます。

### 大学で学ぶためのジェネリックスキル

先ほどちょっと紹介いたしました、大学で必要となるようなジェネリックスキルというのは国によって多少考え方が違うところありますけれども、それほどぶれていないですね。例えば思考力とか問題解決力といった知的な能力の部分、それからチームワークとか、協働といいますか、協調性のようないわゆる社会的な能力、それに加えて情報の活用力も含めてのコミュニケーション能力と、こういうものが大きくジェネリックスキルと呼ばれるものだというふうに言われております。

### 探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか

これらを入試の中で測っていきこう、評価していきこうとするわけですが、一般的に知識の部分っていうのは筆記試験でもある程度評価できるだろう、それも客観的に評価できるだろうということになってきておりますが、例えば意欲の問題ですね、地域貢献意欲とか、あるいは探求心といったものをどうやって評価するかっていうのは、そんなに簡単な問題ではないというふうに思います。筆記試験でも、例えば問題の内容を工夫することである程度は把握できるでしょうけど、多くの場合、例えば面接など、志望理由の背景について深く質問してみたりとか、それから日ごろの興味とか学習習慣について質問してみたり、あるいは幾つかの問題が重なるような、複合問題のようなものでその意欲を見てみたりと、あるいは探求心を見てみたりと、そういうことを重ねてきているわけでございます。今年初めて、地域貢献人材育成入試ということを行いました、本学部の場合、プレゼンテーションというものを取り入れました。その中で問題意識とか提案の深さというものが本物であるのか、借り物ではないその本人の力っていうのが見られるのではないかということで行いましたけれども、皆さん熱のある発表でしたが、やっぱりその中にも強弱ございまして、浅い深いもございましたので、ある程度こういう方法でも評価できるのではないかというふうに思っております。

### アドミッション・ポリシーの明確化

文科省の高大接続特別部会のほうの資料では、評価する能力と評価する方法との間にこのような関係があるんじゃないかというようなまとめをされております。例えばいわゆる試験で、記述式、論述式の試験等を含めても、知識は問うことはできても、例えば主体性とか、ここにあるような公共心とか、気持ちの問題、それからチームワーク、リーダーシップといったジェネリックスキルの問題っていうのはなかなか評価できないだろうと。その分は先ほどお話ししましたように、この面接

を中心にやっているっていうのが現状だと思います。一方、最近企業さんで就職試験のときに集団面接をかけるところが増えてきております。恐らくその中でチームワークとかリーダーシップといったようなのを含めて、ジェネリックスキルというものを評価しようとしている。先ほど、泉校長のほうからも集団面接を入れてほしいという話がありました。これは実施するのは決して簡単ではないと思うんですけども、そういうものを取り入れることによってこういうさまざまな能力、特にジェネリックスキルのところを評価することが比較的容易になるだろう。あるいはプレゼンテーションですね、先ほどもAO入試のところで取り入れたということがございますので、こういうものの組み合わせっていうものが必要になってくるだろうというふうに考えています。

### 大学で育成するコンピテンス

これまでの大学が培ってきたといえますか、育成してきた能力、コンピテンスというものは大きく分けると、このA、B、C、Dという四つの領域になるというふうに言われております。このうち、従来、A、B、Cの三つの領域についていろいろと教育をする、その中で、学部特性によりますが、例えば医学部とか教育学部のような目的学部の場合はこのB、Cを主に教えている、それ以外のところはA、B中心かなというような分類になるそうですけれども、こういう形で展開されてきたものでございますけれども、社会の要請ということで考えると、より社会的な内容が強い、あるいは一般性の高い、このD領域っていうものを力をつけさせてほしいと、つけてほしいという要求が最近大変強うございます。そういうこともあって、この学士力とか、社会人基礎力という形で表現されるような、この汎用的なコンピテンス、これが先ほど来お話ししてるジェネリックスキルということと一緒にするかと思いますけども、こういうところをつけさせるということが大変重要になってくるというふうに考えています。

【求めているもの】

- 大学で学ぶために必要な知識
- 学ぶ意欲と学び続ける力
- 汎用的な学修能力(ジェネリックスキル)

しかし、受験生が何をどこまで身に付けておかなければいけないかは明示されていない



- ・多様な入試(前期/後期/推薦/AO)
- ・多様な入学目的
- ・統一した書き方の難しさ
- ・具体化することでミスリード

### 大学で学ぶためのジェネリックスキル

国	オーストラリア Mayer Key Competencies	英国 (NCVQ) Core Skills	カナダ Employability Skills Profile	米国 (SCANS) Workplace Know-how
知的コンピテンス	情報を収集し、分析し、整理する 数的スキル 問題解決力	生涯学習力 数的スキル 問題解決力	思考力 数的スキル 問題解決力 意思決定力	思考スキル (創造的思考、判断、問題解決) 基本スキル (読み書き、算学、計算)
社会的コンピテンス	他者との協働 チームワーク	他者との協働	責任感 他者との協働	チームワーク リーダーシップ 責任感
コミュニケーション・コンピテンス	アイデアと情報の伝達 技術の活用	コミュニケーションスキル 情報技術	コミュニケーションスキル 技術の活用	情報の活用 技術的スキルの理解

神戸大学川崎大津大数院 調査より抜粋 (Kawaijuku Guideline 2011.11)

探究心や地域貢献意欲をどうやって評価するか

筆記試験では難しいが、それでも

- ・出会ったことのない問題に対応できる粘り強さ
- ・深く答えることも可能な問題

面接での評価

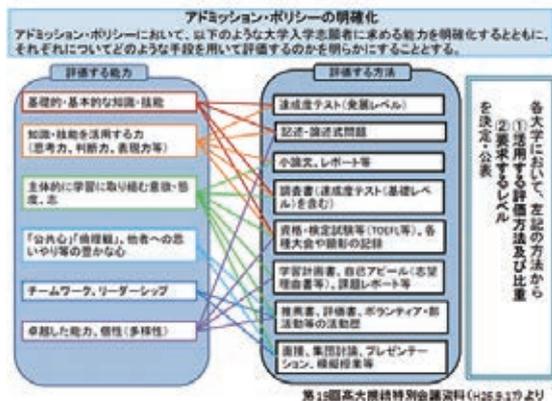
- ・志望理由の背景についての質問
- ・日頃の興味や学習習慣

持続力や柔軟性

- ・複数の分野に跨がる問題(複合問題)
- ・答えのない問題への対応

地域貢献意欲

- ・問題意識や提案の深さとリアリティ(借り物でない力)



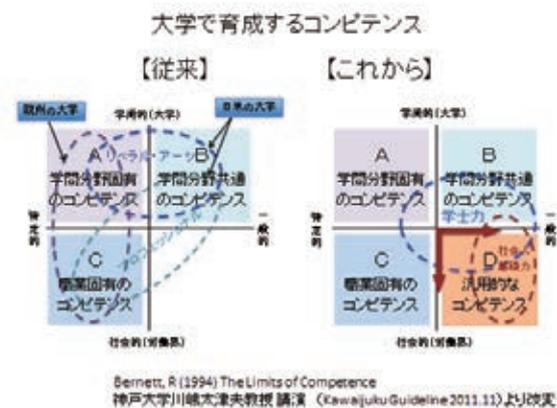
第2回高大接続特別会議議案資料(H25.5.11)より

## 大学教育, 学習, 生活支援に対する満足度

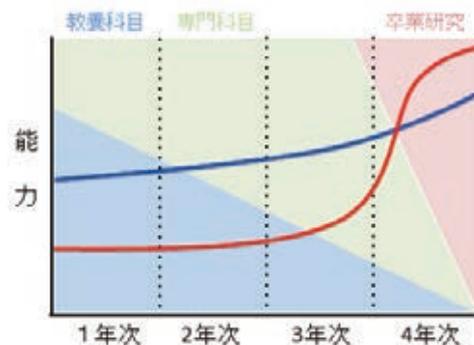
少し話が変わるんですけども、卒業生アンケートを見ますと、大学で身についたというか、大学の内容の中で自分が満足していると割合の高いものは、この二つでございます。専門的教育科目ですね、左側が卒論、卒研以外で、右側が卒論、卒研。ここは従来大学が一番得意だった教育内容だと思いますし、学生さん、卒業生さんで、この力がついたといいますか、ここの満足度が非常に高い。特にこの卒論ですね、これの満足度が高いというのが、今の日本の大学、大体どこでもそういう傾向なんじゃないかというふうに思います。これはなぜか。恐らく彼らが自分自身で納得できるような内容の学習ができて、またその達成感があるってということだろうと思います。実際に、ある程度初めから能力の高かった学生でもなかなか伸び悩みっていうケースもあれば、一方、3年生ぐらいまであんまりぱっとしないんだけど、卒研に入ったらものすごくレベルが上がって、どんどんどんどんもう先に進んでいってしまうという一、いわゆる化ける学生さんがいるっていうことは、多分多くの先生方、実感として持っておられると思います。

### 卒業研究で化ける学生

じゃあ、どういう学生さんが化けるのか。いろんな学生さんおりますけれども、一人卒業生の事例紹介をしたいと思うんですけども、この農業高校っていうのは先ほど立上先生のほうから紹介ありました、西条農業から来られた学生さんです。3年生までの成績はそんなに目立つことなかったんですけども、卒業研究のテーマに、植物のトランスポーターという物質がございます。いろんな種類があって、その役割がわかると応用面が非常に広いというものなんですけども、そのスクリーニング、一つ一つの遺伝子をとってやるっていうようなことに没頭しました。同じ研究室に同級生がいて、二人で切磋琢磨してどんどんどんどん上がっていった。最終的には英語で卒論発表するというところまで行き



### 卒業研究で化ける学生



### 就業力育成支援事業(平成22年度～)



ましたし、二人とも博士課程まで進学したんですね。この学生さんは東大の大学院のほうまで行ったわけです。その後どうなったかっていいますと、この学生さんはIT企業に勤めたということで、研究者にはならなかったんですが、もう一人の同級生のほうは今、新潟大学のほうで教員として採用されています。ほかの学生と何が違ったかということなんですけれども、推薦入学で入ってこられました。そのとき、もう既に高校時代に自分でテーマを持って研究をして、その内容で県の科学賞をとっている。もう一つのことをやり始めるともうどんだのめり込むタイプであったと。ですから、ここで伸び悩んでいたというのは多分ギャップの問題はあるんだと思いますが、ポテンシャルとして学ぶ力っていうのはもう既に高校のときについていたんだらうと。だからこそ、この自分のテーマ、水の合う環境に出会った場合にはぐっと力を発揮できるんだらう。ぜひこういうタイプの学生さんを育ててみたい、たくさん育てたいなというふうに思っています。

### 就業力育成支援事業

先ほど、実は卒業生の満足度というところで少し低いところがあって、触れずに来たんですが、一つはキャリア教育でした。あのデータちょっと古いものだったんですが、そういうこともありまして、島根大学で平成22年度から就業力育成支援事業というものを始めております。これはアクティブラーニングの科目を中心に正課、いわゆる授業の科目ですね、それと正課外の教育プログラムというのを組み合わせて、ここに上げております七つの力を伸ばそうと。それによって総合的な就業力を上げようと、そういうプログラムです。

### 就業力の評価方法

幾つか科目があります。その中で身につけられる力というのが違いますが、どう評価していくかっていうところがなかなか簡単ではない。その評価方法の一つに、ちょっと見にくいですが、この青い線で書いたところ

が教員がそれぞれの力をどれだけ評価するかという、教員評価の部分。それから、学生さんが自分で一自己評価した部分が赤と。これイメージ図でございますけれども、そうすると、中にはそのギャップがあるところっていいですか、自己評価と他己評価が違うところがございますね。こういうものを学生さんが自分でチェックしていく中で、どういうふうに見られているのか、あるいは自分ではどの評価が足りたの足りなかったのっていうことがわかるという。こういうことも一つの大事な要素になってくるかというふうに考えます。いろんな科目で違う力がつきますので、これらの科目をうまく組み合わせるとることによって、キャリアデザイン力とかリフレクション力とか、七つの力をバランスよく身につけてもらおうというようなプログラムです。

### 地域志向教育から地域キャリア教育へ

これがそこそこうまくいっているということで、こういうものをさらに発展させて、いろんな学生さんにとっていただくということで、平成25年度からCOC事業に採択されて、地域志向型の教育というのをやってきております。地域課題に立ち向かうような、アクティブラーニングの科目を入れてやってきてるんですが、この10月からCOC+という事業に採択されました。これは地(知)の拠点大学による地方創生推進事業というものでございまして、島根大学だけではなくて、島根県立大、松江高専とともに、地元のステークホルダーの方と協力して行うものですが、特徴としてはこの正課の科目のほかに、正課外のところ、こういうものも含めて先ほど七つ力を上げましたけど、ちょっと欲張って13ぐらいの力をつけさせようということを考えてます。その中でも大事になってくるのが、地域の方に講師として入ってもらような科目とか、長期間のインターンシップ、それで現場を知ってもらおうっていうことなんですけども、そこにつなげるための初年次教育科目に地域志向を入れようと、地域の力をかりて初年次教育をしようと、そういうア

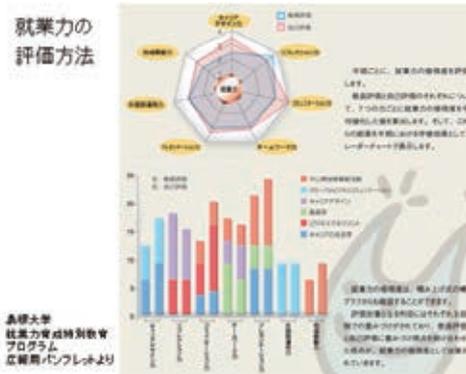
アイデアでございます。

## スタートアップセミナー

実際もう既に始まっている部分がありまして、スタートアップセミナーというものがございます。これは松江市を学びのフィールドとして、学生さん五人ぐらいのチームでそれぞれ出ていってもらう。どういう問題があるのかってということを見つけてもらうっていうのが一番のテーマ。問題解決っていうとこまで行けばいいですけども、まだ1年生ですので、まずは地域は知るといことがすごく大きな問題になってくる。先ほど、松江北高校の話がございました。テーマとしては同じようなところになってきますので、シジミの話あれば観光の話ありということになります。彼らが最終的にポスター発表という形でお互いでプレゼンをして、また新たな課題を見つけるというところでこれは終わりなわけですけども、これで触発された学生さんがさらに上の学年に行くと、また似たようなアクティブラーニングの科目がございます。中山間地域フィールド演習とかビジネスマネジメントとか、いろんな種類の授業があって、それによって大学の中ではなかなか学べないようなことも、地域の協力を得ながら学ぶっていうようなことをどんどん進めてきております。

## イノベティブ人材の育成

こうした活動、教育を通して、私たちが大学で育てたい人材の一つといいますか、これからすごく重要になってくるのはイノベティブ人材であろうと、これの養成であろうというふうに思っております。イノベーションというのは新しい方法や価値を見出すということ。方法にはいろんなものがあるかと思えますけれども、何となくイノベーションと聞くと、例えば発明とか大発見といった非常に大きなイノベーションを思い浮かべられるかもしれない。しかし、実は小さなイノベーションっていうのが非常に大事なんだろうなと思っております。日常的な生活の中でも、答えのない小っちゃな問題にたくさん出会う。



## 地域志向教育から地域キャリア教育へ

### COC人材育成コース以外にも拡大



## スタートアップセミナー

1年次～  
約400名

目的: 島根大学が位置し、今後の学習・生活の場となる松江市を学びのフィールドとしながら、高校までの受け身な学習観から転換を図り、より主体的に学修するために、他者と協働しながら大学において学ぶ力(学習スキルや社会的スキル)を身につける。

- イントロダクション
- 講義
- グループ活動体験
- 文献調査 ⇒ 課題抽出
- フィールド調査
- 追加調査 (文献・フィールド)
- ポスター発表
- 振り返り



## イノベティブ人材の養成

- イノベーション
  - 新しい方法や価値を見いだす
- 大きなイノベーションと小さなイノベーション
  - 発明・大発見
  - 日々の“カイゼン”
- 答えのない問題に取り組む
  - 1) スポンジ頭
  - 2) 考え続ける力
  - 3) 折れない心⇒レジリエンス

その都度それを解決していくってというのは、実はイノベーションでしょうと。この日々の改善というものができるといふ能力が実は大事なんじゃないかと。そういう意味ではいろんな人がイノベティブ人材であり、その能力を高めるっていうことによって、皆さんハッピーになれるんじゃないかと。そういう人たちが我々が考えるイノベティブ人材で、何もIT企業を起こしてというような、そういう一部の人を想定してるわけではございません。

こうしたイノベティブ人材に必要なものとして、私はやわらかな頭脳、なおかつすごく吸収する頭脳、合わせたらスポンジ頭かな。書いた後に、何かこれスポンジ脳症みたいで、余りよろしくないなと思ったんですけど、言いたいことはそういう頭を持ってもらいたいなど。それと考える力ですね。我々、進化の中で、考えることっていうのはすごくエネルギーを使うので、それを省略する、省エネ化するっていうふうに進化してきてるだろうというふうに思います。ですから、一度決めたことっていうのをなかなかもうそれ以上新たに考えるようにしない。それはまた、この次のところでお話ししたいと思うんですけど。もう一つ、この折れない心ですね。ストレスとか困難があってもめげずにやり続ける力、やり続けるための心の持ちよう、こういうものが大事だろう。今はやりの言葉で言えば、レジリエンスというものを高めていくっていうことになるかと思っています。

### イノベーションに最も邪魔になるものは？

ちょっと先ほどフライングしてお話ししてしまっただけですけど、私自身がイノベーションに最も邪魔になるのはこれだと思っています。先入観。この先入観のところでは先ほどの進化の話をしたと思ったんですけども、一度もう何かこれはこういうことだっていう関連性がわかったことは、我々はもうそれをルーチンにしてしまっただけで考えないようにしてしまう。これは多分進化的にはすごく意味が

イノベーションに最も邪魔になるものは？

#### 先入観

「無知の知」を失うと発想力は失われる  
 問題や答えが見つかりとそれ以外に目が向かなくなる  
 既知を知っていることがあると判断しなくなる  
 人は「成功体験」に弱い ⇒ 変えたくない

なぜ、先入観を持ってしまうのか？  
 自分の認知は正しいのか？  
 どうやったら先入観を持たずに済むか？

#### 同調化の圧力

- 他人の答えや行動が気になる
- 違う考えや答えを持っていても表明できない
- 間違えることを極度に恐れる
- 間違えたことから学ばない ⇒ 無かったことにしたい



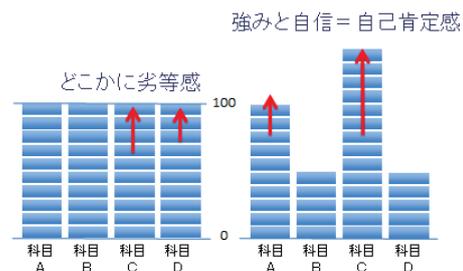
しかし、高度成長時代の品質管理行動(QC)の成功体験を引きずってしまうのでは？

他者への「駄目だし」による自己の地位保全も気になる

#### イノベーションを起こせる人材を育てる

- 評価方法を変える
- 自ら求める積極性(主体性)
- 価値観を変える
- 良い環境を提供する

#### 減点式評価 vs 加点式評価



あることですね。新しい課題だけをどんどん考えていけばいい。ところが、一度答えが見つかったことはもうそれ以上考えなくなるという欠点があるんだらうと。既に知っていると、もうそれ以上判断しなくなる。それから、もう一つ、成功体験にもものすごく弱いんじゃないかなと。一度うまくいったらその方法を変えたくない。こういうのはイノベーションを進めていく上で非常に問題だらうと。ですから、常にこの先入観を持ってしまう理由とか、自分が必ずしも正しくなんじゃないかなっていうことを常に問いかけるような訓練、これは訓練しないとなかなか本能に立ち向かえないと思うんです、こういう教育をしていく必要があるかなというふうに思っています。

### 同調化の圧力

それと、もう一つイノベーションを妨げるものは同調化の圧力であろうと思っております。学生さんこういう行動をされるのが結構あります。他人の答えや行動が気になってしまうんですね。違う考えや答えを持っているとしてもなかなか手を挙げない、あるいは間違えることを非常に恐れる。間違った場合になかったことにしたい、ゼロにしたい、消してしまいたい。実はここが大事ですね。これ、恐らく若い人だけじゃなくて、我々の中にも多少なりともある感覚かなというふうに思っています。その背景には、もしかすると高度成長時代に質が高いついていうか、同じレベルで欠陥のないっていうものをつくっていくということが大事で、それを管理する人の側もそういう能力が求められる中で、無意識のうちにこういうことが身についてしまっているのではないかなというふうに思っています。

### イノベーションを起こせる人材を育てる

また、この下のところですけども、これちょっと話は違うんですけども、間違えることを叩く文化があるような気がする。それによって、相手を自分より下に見るというか、下げる。結果として、相対的に自分が上がる

ということで、評価を上げようという、地位保全をしてるんじゃないかなというケースが間々ある。これが大きな邪魔をしてるような気がします。我々はそういうところを変えていかないといけないだらうという意味では、まず評価方法を変える、それによって主体的に動けるような学生さんを増やしていく必要があるだらう。また、学生さんだけじゃなくて、教職員それから親御さんも含めて価値観を変える必要があるだらう。それをもってイノベーションができるようなよい環境をつくっていく必要がある。

### 減点式評価と加点式評価

評価の話をしたと思うんですけども、大体日本だと100点満点からこうやって減点していくという減点方式が多いと、どっか間違ってるたびに減っていく。特に間違いの多いところを何とか底上げしていったって、できるだけ全体のレベルを平均的に上げていこうという圧力がどうもあるような気がする。そうすると、間違えたくないというプレッシャーがどうしても出てくるんじゃないのか。それに対して、最初はゼロです、とにかくチャレンジしなければ点数もらえませんよという加点方式なら、間違えたところで下がりはない。むしろ、いいところどんどん積み上げていかなければいけないとなると、得意なところをどんどん伸ばしていってもらえるだらう。こういう評価にしていくことによって、今まで、例えばちゃんといいところがあるのに、できてないところに目がいってしまって何か劣等感を持つてるという感覚から、いや、こういう強みがあります、私これなら負けませんという自信と、それに伴うこの自己肯定感っていうのを上げていきたいなというふうに思っています。

### ポジティブ心理学

こういうのはポジティブ心理学とか、ポジティブサイコロジーっていうのかと思いますけど、短所と思っていることも見方を変えれば長所だと。評価軸が1本だったら短所にしかならないけど、違う評価軸でもってくれば

それは長所にもなるよということをもっと理解していただきたい。そうなると、もう他人と比較することはあんまり意味がないですよってということになり、同調化圧力に屈しない力を身につけられるんじゃないか。人と同じでないっていうと、なかなかやっぱり不安でしょうがないです。この不安を手懐ける訓練をすることによって抵抗力を上げていくっていうのが、これから大事になっていくかなっていうのが私が感じているところです。

### 楽しみに変える、目標を見つける

これまでの教育では、初めつらくてもとにかくその基礎力っていうものをきちんとつけて、その上で初めてゲームなり、実際の応用なりっていくのが筋ですというふうに言われてたような気がします。つらいですね、この懸垂をとにかくできるようにして、腕の力をつけなければ。ところが、最初からボルダリングに興味を持った子供っていうのは、知らず知らずに体力がつくってということもありますけども、これをもっとうまくなりたいがために進んでこういうこともします。ですから、同じやるにも楽しみに変えとか、目標を見つけさせることで基礎力をつけさせるっていう方法もあるだろうと。何も基礎を全部やらせてからっていうやり方だけではないんじゃないかなということを考えています。

### 次世代リーダー

もう一つ、これからリーダーをたくさん育てていかなければいけないと言われます。でも、そのリーダーっていうのがもしかすると意識が違うんじゃないかなと思ってます。これまでリーダーって言われるのは、どちらかというとこの富士山型のワントップのリーダーのイメージで、その人のかけ声で下がきちんと動くというような形のイメージが多かったかと、カリスマ的な。ところが、今求められてるリーダーっていうのは、どちらかというと、たくさん山があるようなタイプ。みずから道を開いていける人はみんなリーダーだろうと。そういうところをまず変えていかないといけない。あるいは、我々の世代と若い

### ポジティブ心理学

短所 = 長所

他人と比べない  
同調化圧力に屈しない

不安を手なずける訓練

### 抵抗力(レジリエンス)

楽しみに変えること、目標を見つけることで効率良く基礎力をつける



### 次世代リーダー

【従来のリーダー】

カリスマ的ワントップ ⇒ 富士山型



【今求められているリーダー】

様々な分野で自ら道を切り開ける人 ⇒ 中国山地型



若者との価値観の違いに敏感に

ブランド志向や出世欲が強い

労働の金銭的対価より精神的対価

「幸福度」の尺度の多様化

### ディベート力

ディベート: 設定されたテーマの是非について、話し手が肯定側・否定側に分かれ、ジャッジを説得する形で議論を行う

- 論理性や説得の技術を学ぶ
- 「信じること」と「正しいこと」の違い
- 他人の考えを理解する
- 間違いを恐れず、失敗から学ぶ

人たちと価値観等が違うということを前提に  
 いろんなことを進めていかないといけないだ  
 ろう。

### ディベート力

それと、もう一つディベート力を上げてほ  
 しいなと思っております。日本人は、自分  
 が信じてないことの側に立って議論を展開す  
 るってことはなかなか苦手ですが、それを  
 逆転することによって非常に柔軟な頭が育  
 たらう。割と失敗を恐れるんですけども、  
 本当は失敗させないといけないだろうと。  
 グーグルでは早く失敗させろという言葉があ  
 ると聞きます。しかし、そのとき大事なの  
 はきちんと失敗したことを褒めると、そ  
 ういうインセンティブをつけるということ。

### これからの大学入試に必要なもの

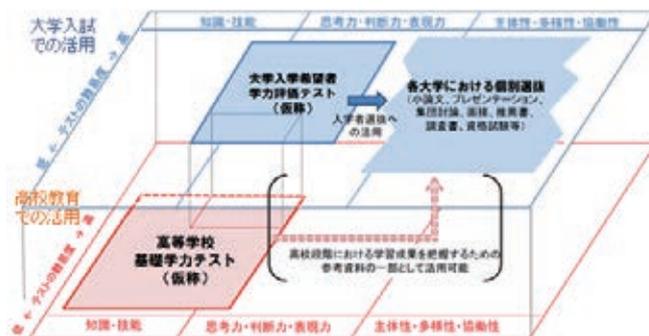
これらを踏まえて、これからの大学入試に  
 必要なものとして、受験生に求める力が例  
 えばこれだとしたら、これらをきちんと評価  
 できる試験でやらないといけない。今まで  
 だと、例えばこれに合った入試、これに合  
 った入試、これに合った入試とあって、入  
 試を多様化してるけれども、そうではな  
 いでしょう。全ての力がやっぱり必要です  
 よというラインを示しながら、生徒さんの  
 持っている多様性に合わせた多様な入試  
 ができるようなその試験、あるいはそれ  
 の組み合わせが必要だ。そのとき、特に  
 面接とか、集団面接、プレゼンテーショ  
 ンの場合にはそれを評価する人の能力、  
 改善っていうのがすごく大事になってく  
 るだろう。これ、先ほどの小林さんの図  
 の立体版ですけども、我々このところを考  
 えていかないといけないってことになり  
 ますが、私は先ほど言ったような新たな  
 入試の方法を取り入れながら、そこに評  
 価の方法を少し新たに取入れていただ  
 けるとありがたいなというふうに思っ  
 ております。御清聴どうもありがとうございました。



これからの大学入試に必要なもの

- 受験生に求める力
  - ・大学で学ぶために必要な知識
  - ・学意欲と学び続ける力
  - ・汎用的な学修能力(ジェネリックスキル)
- を評価できる試験(の組み合わせ)  
 及び評価者/ファンリテーターの能力向上

### 新学力テストの活用イメージ



第7回高大連携システム改革会議資料(2015.10.28)より一部改変



## パネリストの意見交換

○司会 コーディネーターの荒瀬先生に司会を交代いたします。これから20分間パネルディスカッションのパネル討論という形で行いたいと思います。荒瀬先生、よろしく願いいたします。

○荒瀬副学長 昨日、論点整理ということで、ここにおられます4人の先生方とパネルディスカッションではどういうふうにするかということでの話し合いを持ちました。それで、3点ほど討議をしようかということでお話をしておりました。

1つは、生涯にわたる主体的な学びを実現するために、生徒・学生の学ぶ意欲をどのように育むかということでございます。この点につきましても、小林さんから今日御発表になった能動的な生徒・学生をいかに主体的、能動的な生徒・学生に変えていくかという、そういう御指摘のあったところに合致するんだろうと思います。このあたりのことにつきまして、3名の先生方に御発言いただければと思っておりますし、小林さんから助言をいただければと思っております。

まず、泉先生から地域課題研究を学校の中に取り入れをしておられるということで、ここの中に実施前と実施後とでの意識の違いが出てきておるわけですが、このあたりのところが学生・生徒さんの学びとどういう関係を持てるかということがもしわかりましたら教えていただくとありがたいということと、今後こういう形のを継続的に進めながら、生徒の学ぶ意欲を持続的に持たせることについて、どのようなお考えをお持ちかということにつきまして、御発言いただければと思いますが。

○泉校長 お手元にお配りしてる資料の22ページに、実施前、実施後の意識の変化の表がございます。これも一度ご覧いただきたいと思いますが、この中で真ん中の2つのところ、地域課題研究をする中で話し合ったり考えたりするっていうシーンが多々出てま

います。それから、話し合った結果を発表するという機会も設けておりますが、こういうところには子供たち敏感に反応してくれてまして、そういった形態の学習が好きである生徒が増える傾向がございます。その生徒たちの様子を見てまして、教員が気づくことなんですけれども、日常の授業の中ではなかなかそういうことができずその必要性に気づく。いわゆるアクティブラーニング化した授業の意味を腑に落ちた形で理解するようになるということで、子供たちの変化が日常の授業を変えていくという意味で、こういう取り組みは継続することに意義があると思えます。それから、去年の1年生に、これ来年もこういうことやってみたいんだけど、どう思うっていう問いかけをしたところ、やめたほうがいいという生徒は1割、やりましょうという生徒は9割でした。ですから、子供たちには非常にインパクトのある授業であったと受けとめております。

それで、これが実際に学ぶ力、いわゆるテストの点が上がったかとかそういうところにつながったかどうかはわかりませんが、少しずつ生徒が元気になってきてるなっていう感じがします。自分たちで自主的に取り組める場が設定されてるわけですから、がんじがらめのこれやれあれやれっていうところから解放されて、少し自由度の高い中で動けるんだなという意識を持ってきてますので、非常に大ざっぱな言い方ですけども、生徒が元気になってきてる感じがします。

実はスライドでお示した今年の研究テーマは49あって、それぞれがさまざまな課題に取り組んでいるわけなんですけども、「本気でそれ考えてるの？」と問いかけたときに、「いや、何か友達がやるって言ったから、あんまり本気じゃないけども、そのグループでやりました。」という生徒もおります。それで、「いや、そうは言ってもいっぱいある課題の中から、それにひっかかったのは、あなたの中に何かあるんでしょう。」ということを投げかけまして、「プレゼンテーションし

たときの原稿をスマホにダウンロードしなさい。」というふうに言ってます。時々それを見返しながら、新たに気づいたことをそこに書き込んだりしていけど、この課題についてはあなたにしみ込んだものということで、時々見直しなさいということをやっています。そういった中から、また新しい気づきが生じたりするんじゃないかなと思ってまして、これが本気の学びにつながるかどうかは、結局、本気で取り組める課題に出会えたかどうかというところにかかってまして、真正な課題とかオーセンティックな課題と私言ってますけども、そういうものにはいかに出会わせるかということが重要だと思ってまして、そこに取り組みの難しさもあるというふうに思っております。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。例えば、高大接続というふうな観点で見たときに、大学から何かこういうところで一緒にやったらいいなというところがございましたら、御発言いただくとありがたいと思いますが。

**○泉校長** これはもう松崎先生のお話の中にあつたスタートアップセミナー、これを大学生と高校生と一緒にやるという形がいいんじゃないでしょうか。大学生があっちこっち行ってフィールドをやりますと、何か面倒くさいやつが来たなっていう感じなんですよ。それが高校1年生が来ますと、いいよ、いいよ、何でも教えてあげるからと、障壁が低くなりますから、そういうところで高校生を活用していただいて、1次情報をどんどん取り入れて、それを大学生のお兄さん、お姉さんたちが分析してあげるからみたいな形でやる



という形が生まれるんじゃないでしょうか、これ一つ考えられる取り組みだと思います。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生のところはSSHでかなり学生意欲を高めていくことをしておられるんですけども、やっぱり先ほど松崎先生からございましたけど、卒業論文を通して化ける学生が出てくるというお話でございましたけども、先生のところもSSHの導入以前にもあったのかもしれませんが、専門的な研究を通じる中での学生の意識の高まりは、この導入によって非常に高まりが出てきたとお考えになってるのか、もともと西条農業高校にはそのポテンシャルがあつて、これ入れることによって一層導入が図られたとお考えになってるのか、そのあたりはいかがでございましょうか。

**○立上校長** お手元へ配付させていただいております資料で、スライドで8ページ、9ページ書いてあるところをちょっとごらんいただきたいと思うんですが、先ほど御紹介させていただきましたように、そのSSHの取り組みでかなり体系的な取り組みを組織しています。加えて、9ページへ書いておりますように、先ほども申し上げましたが、自分の興味・関心に基づいて学科を選択して、研究テーマを設定して研究に打ち込み、研究内容をプレゼンする、あるいはそれを英語でプレゼンし、さらに研究を深めるために、大学を選んで進学すると。このような構図の中に生徒があつて、その方向をずっととっていくということがはっきりと明確化してきたと思っています。さっき申し上げたように、いろんな面で本校は恵まれた条件にありますので、従

来からの実績や、あるいはいろんな大学等との間の関係をベースにしなが、今のような形をしっかりと確立してきておりますので、それを今後も続けていくことを通して、さらに一層、生徒のモチベーションでありますとか、将来に対しての動機づけを進めていくことができるのではないかと考えております。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

これは今日の資料の中にSSH研究開発の効果とで、進路のところに影響が出てきて、年度によって違いが、例えば農学系はずっと増えてきてるんですが、工学系は減ってきてる、それから、健康栄養、保健衛生は増えてきてるんですが、文系が減ってきてるようにもとれるんですが、このあたりについてはどのような解析というか、お考えをお持ちでございましょうか。

**○立上校長** 先ほど申し上げましたように、学科特性に非常に合った形での進路を選択をするようになっていってる。学科特性に合った形での研究テーマの設定を行っている。そのことが農学の増加、工学の減少で、健康栄養、保健衛生の増加、文系の減少ということになっているように思います。理学について全く増えていない、少ない状態であるというのは、やはり応用部分に対しての興味・関心が多いということと、専門教育として行っている中身自体が応用科学的な側面が強いことからきてると思いますし、非常に生徒の学科特性に応じた進路選択という意味においてはいい方向で効果が出ていると理解しています。

**○荒瀬副学長** そうですか。

泉先生、先ほど立上先生の場合はそういう学科構成とかそういう問題があると、それが影響してる部分があるんだろうということなんですが、普通高校の場合というのはどうなのでしょう。こういう地域課題の学びということとか、そういうものを入れながら学生の意欲を高めていく中での進路選択と見たときに、何か変化はあるのでしょうか。

**○泉校長** 取り組み始めた学年が今2年生で

すので、この後どういう姿になっていくかはわかりませんが、地域課題に取り組んでいるわけですし、その地域課題をテーマにした学問を立ち上げておられるような島根大学を中心とする全国の大学を紹介して、そういうところでやってみないかという声かけはできますし、そういうことに反応する生徒は増えてきてるんじゃないかと思えます。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

それでは、松崎先生、大学としては、今、今日の午前中の協議会（中国5県の高校の先生方、教育委員会の方々、島根大学教職員で構成する会議）で、島根大学の今後の入試をどういうふうにするかという議論をさせていただいた中に、高校側からの御意見の中に、学力の3要素が高校の中では非常に強く言われておりますけれども、大学の中でもやっぱり共有すべきものではないかという御発言があって、今後、大学としてもその部分は考えていく必要があると思っておるんですけど、松崎先生、大学としては今、受動的な生徒・学生をいかに主体的、能動的な生徒・学生に変えていくかという観点で考えたときに、どういう取り組みが今後重要になるとお考えでございましょうかね。

**○松崎センター長** 私の発表の中で、大学が求めているものを3つ上げたんですが、分け方はちょっと違うんですけども、学力の3要素の中身をちょっと組み合わせを変えただけのことで、恐らくそれは皆さん同じようにそういう力が必要だと言われてる部分だと思います。特に、学ぶ意欲とそれを学び続ける力が欲しいという話をしましたけど、せっかく高校でそういう力がついた生徒さんを送ってこられても、大学入ってすぐに1年生の授業はこれかっていうのでは、その努力が無駄になってしまいますね。これはすぐにはできることじゃないかもしれないですけど、1年生に入ってすぐに、まず専門のおもしろみっていうのに触れてもらうのがいいんだろうな。我々の時代はどうも教養で基礎を学んで、2年生か3年生、3年生ぐらいからで

すかね、その上に専門を積むんだという意識がすごく強いと思いますけれども、先ほどのボルダリングのような話で、受験生は学科やコースを選んで入ってくるわけですから、やりたいことがあって入ってくる方が多いだろうという意味では、最初にその専門のおもしろみみたいなのに触れさせて、そのためにあなたができない部分、つけなきゃいけない部分ありますねっていうことで、戻すという手もあると思うんですね。ただ、実際問題とすると、例えば基礎教育科目の英語なんかは必ずやらなきゃいけない必修科目で、それを学年をどうするかっていう問題あるかもしれないんで、それを後にすることはできるかもしれないですけども、むしろ教養科目といわれるリベラルアーツは、私は専門をある程度やった上で積むほうが本当の意味合いが出てくるだろうと。そういうふうに変えるのは簡単ではないかもしれないんですけど、一つのやり方だろうと。学び続ける力っていうのは、多分彼らが興味を持ち続けていたならば、我々が何かそんな引っ張ってどうのこうのするものではないので、邪魔をしない、環境を与える。そういうことさえすれば、あとは評価の問題で、きちんと評価してあげることができれば、今からでもできる部分だと思っておりますので、それをぜひ取り入れていただきたいなと、個人的には思っております。

○荒瀬副学長　そういう意味でいいますと、動機づけというか、こちらが意識高揚になるようなものをどういう形で提供するかということが必要だということになるんでしょうかね。

○松崎センター長　はい。

○荒瀬副学長　小林さん何か、コメント等がございましたら。

○小林所長　ある大学さんで、さっき卒業生の調査、学生調査を海外の大学と一緒に比較やったのをこの間学会発表があったんですけども、その大学さんでいくと、同じように専門知識は学生、自分の評価で、1年生、2年

生、3年生、4年生どんどん上がっていくんですね。ただ、課題解決能力だとか自己肯定感とか、論理的思考っていうのは全然上がって行ってなくて、海外の大学はそれも上がっていくんですよ、学年進行で。そのときに、なぜかっていうのを皆さんで考えたときに、やはり最初にこういう力を身につけるっていうのを大学入学時に言っていないんじゃないかと。やりたいことがあるから大学入ってきた、専門大事だよってっていうのは言ってるけれども、じゃあ、もっと課題を解決する力とか、課題を発見する力とか、そういったチームワークとかそういうのも身につけようねっていうのを、もしかしたら日本の大学ってあんまり言っていないんじゃないかなと。そのために、聞かれたときに何かそれって育てないんじゃないんかっていうような、自己認識になってないんじゃないかという気がします。今ここでお話しされる皆さん、こういう力を伸ばそうって一生懸命言ってるのが、学校関係者は思ってるかもしれないですけど、実際に受けている高校生とか学生とかがそれが自己認知になっているかどうかというところって結構、私たちは翻訳っていうんですけども、もうちょっとわかりやすい言葉で翻訳してあげて、どの力が身についたかって実感値を持たせてあげるのが非常に重要なと私は思います。

○荒瀬副学長　そういう意味では、教員と学生との接点の持ち方が非常に重要になるということなんでしょうか。ありがとうございます。

もう一つ別のところでお話をお聞きしたいんですが、実は3人の先生方、これまでそれぞれの成果を御発表になってるわけですけども、恐らくその中に相当な苦労が入っている。その部分は余りしゃべられなかったんですが、今後、大学改革、入試改革も含めて、議論になってないのは、そこに所属する教職員がどういう意識でこの問題に取り組むかということが非常に大きな要因に、僕はなってるんじゃないかなと感じてるんですね。

それで、泉先生はこういう地域課題あるいは学生の海外研修等を取り入れて、学生の学びを高めるということに取り組んでこられたわけですが、先生の取り組みから参考にされて、今後、大学の入試改革あるいは大学の教育、高校の教育というのを教員の意識でどういうふうに変えていくのがいいか、場合によってはそれをどういうふうにすればいいかというあたりの参考になるお話が聞ければありがたいなと思ってるんですが、ちょっと難しい御質問をして申しわけないんですが。

**○泉校長** 教員の意識改革というところは、大変重要な問題で解決できてない問題です。先般の、御紹介したしまね教育フェアの中でのパネルディスカッションの中で、司会者が、いや、そうやって何かうまそうに言ってるけど、本当は何か苦労してんじゃないのみたいな質問したんですよ。悩みがあるんじゃないのとかって、ぶっちゃけ言っちゃったらとかなんか聞いたんですよ。そしたら、高校生が、いや、一生懸命やってるんだけど、それを評価してくれる先生とあんまり評価してくれない、スルーしてしまう先生とかいらっちゃって、やっぱりきちんと自分たちの取り組みを評価するような教員集団であってほしいなと言っておりました、そのとおりだと思って私、聞いてみたけども。そこは大きな課題だと思います。ただ、生徒たちの様子を見て変わりますから、子供が変わるということが一番説得力のある、教員を変える要素だと思ってますので、ちゃんと見てほしいなと思ってます。

**○荒瀬副学長** 教員側がきちんと評価して見るという、そういう観点が必要だという。

**○泉校長** はい。もう一つ言いますと、うまくいかなかったときですね、ほら、見ろって言うんですよ。そんなことするから、うまくいかないじゃん。やっぱりもとに戻したほうがいいんじゃないとか言うんですよ。じゃなくて、うまくいかなかったらどうすればうまくいくかなっていう方向で物を考えるような教員集団だといいなあとと思います。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生、どうですか、SSHの導入とか、そういうことで最初の取り組みのところを踏まえていただきますと、今後の大学の入試改革、教育改革等におきまして、どういうふうに教員というのは変わるのか、そういう手だてなり、方法があるかということも含めて御意見いただくとありがたいです。

**○立上校長** 私自身の考えといたしますか、経験的に感じてることでありましてけれども、高等学校をどちらの方向に向けていくのかということをしつかりと決めていくことが一番じゃないかなと思います。農業高校であります。スーパーサイエンスハイスクールを導入するということはある面で非常に大きな軌道の変更を進めることになります。私自身いろんな教員の声も聞いてみましたし、こちらが個別に説得もしましたし、そういう個別に対応していくという側面も重要でありますけれども、何より校長がどちらの方向へ学校を進めていくのかということをはっきりと決めて、それを教員に説明して、理解させて納得させていくことが一番ではないかなと思っています。加えて、職員に成功体験をさせるということ、成功体験をさせて褒めるということ、そういうものを加えながら、学校全体を一定の方向にはっきりと方向づけていくと、教職員の意識っていうのは変わってくるんじゃないかなと私は思っています。

**○荒瀬副学長** ありがとうございます。

方向づけということについて、きちんとしたものが必要であるし、今、大学としては学長のガバナンスということも言われているわけですが、高校等においてもそういう部分っていうのがやっぱり必要になってくる部分があるんだと理解してよろしいですかね。

**○立上校長** 私、非常に重要だと思いますし、今の学校というのが非常に校長の力が以前に比べれば随分強くなっていますので、そういう意味で校長がどのように学校づくりを進めていくのかということが、一番本質的な意味合いを持つんではないかなと思っています。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

松崎先生どうですか、大学側としては。これは学長にお聞きしたほうがいいかもしれないけど、松崎先生。

○松崎センター長 私から答えるのは、なかなかおこがましいところがあるんですけども、私の経験で言いますと、おもしろがったら学生はどんどん行く、そういうタイミングをうまくこちらから提供してやれるといいんだろうなと。例えば、今の地域未来戦略センターの一面にちょっとスペースがあって、学生さんに3Dプリンターを貸与してる。彼らが勝手にいろいろ情報を集めてきて物づくりをするどころか、今度、外部の人を呼んできてセミナーやっていいですかと。積極的に動いて、もう人づくりもしてしまうところもあります。ですから、できることできないこと、境界はあると思うんですけど、できるだけそういうのを実現させてあげると、もう勝手に彼らの中でそういうコミュニティーができたり、そのノウハウが蓄積したりっていうふうにして、先生方、実はあんまり手をかけずに育つ環境ができるんじゃないのかなと思ってます。

あと卒論までいくと、またいろいろあるんでしょうけど、最近大学もちょっと予算がなくて、学生さんがやりたいっていう実験をやらせてあげることが必ずしも簡単ではないんですが、私が学生るときには予定の指導教員のところに行って、当時は教官ですかね、これがやりたいんですけどと無謀なこと言ったらオーケーしていただいて、非常に喜んでやらせていただいたっていうことがあります。ですから、彼らの中でちょっとしたことでも認めてもらった、責任を自分に負わせてやらせてもらえたという信頼感とか、そういうちょっとしたきっかけで実は結構変わるんじゃないかなというところを、先生方もう少し大事にされたらいいんじゃないかなと思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

その辺のところは先ほどスライドで見せていただきました満足度の問題のところで、教員

とのコミュニケーションというところですね。

○松崎センター長 はい。

○荒瀬副学長 その部分は非常に学生としては評価が高いということを考えると、そういう部分に教員は今後力を入れて、学生との接点をできるだけ持ちながらやっていくことが必要なんじゃないかなと思いますね。

○松崎センター長 すみません。もう一つよろしいですか。

○荒瀬副学長 はい。

○松崎センター長 忘れておりました。午前の協議会のところでも出た意見ですけども、先ほどの話の繰り返しになりますけど、1年生のときに気持ちをちゃんと持っていきけるっていうんですかね、おもしろい、この大学に入ってよかったって思えるような授業に出会わせてくださいって話ありましたので、ぜひ、その1年生を担当される先生方、頑張っていたいただければと思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

そういう意味でいいますと、きょう午前中もありましたけども、結局、島根大学に入るとどういう力が身について、どういうことが将来社会に出てもやっつけられる力かという等々、その辺の御意見を高校サイド、教育委員会サイドからもいただきましたので、その中に島根大学としてはという、先ほど大学というのがなかったらどこのかわからないという、問題があるということで、今後の入試改革も教育も含めて、島根大学という特色が見える形のを表に出していくという、そういう中で教員はどういう意識を持って学生とつき合っていくのかというところが今後非常に強く求められるところかなと思いましたが、

小林さんから何かコメント等ございましたら。

○小林所長 まさにそのとおりで、これから10年間で大学に入る18歳人口って10万人減るんですね。大学進学率を50%とするのと、5万人が受験生からいなくなると。そうすると、単純計算で500人規模の大学が

100校なくなってもおかしくないぐらいのマーケットにインパクトがある状況です。そうなってくると、もう成熟、全体が成長するってことはなくなってくるので、やはり個性をどう出していくか、今おっしゃったようなところが非常に重要になってきます。ですので、さっき中国山地っていうふうにおっしゃってましたけど、ちょっと言い方が中国山地じゃなくて申しわけないんですけど、富士山型から八ヶ岳型っていうふうによく言われてるんですけども、ピラミッド的な東大を頂点とした偏差値の序列化ではなくて、先ほどのアドミッション・ポリシーの作り方の中のポイントの1つに、強みや個性や役割がありますよねと、各大学、それがあって、

それをきちんと立てていって、八ヶ岳的な幾つも頂上があるような状況をつくっていきましよう。なので、よく申し上げてるのが、国がどうするかって、質問を受けるんですけども、「国が」が主語じゃなくて、「うちの大学が」とか、「うちの高校が」っていうふうに主語に変えて、先生方が議論できるようになるといいのかなというふうに思ってます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

それでは、会場の皆様方から今後御質問等あろうかと思しますので、その時間をこれからつくりたいと思います。パネリストの討議につきましてはここで締めさせていただきます。ありがとうございました。

## 総合討論

**○荒瀬副学長** それでは総合討論ということで、これからは会場の皆様から御質問をお受けしたいと思います。質問に当たってはお名前と所属名、それから、もし決めておられる方、お答えいただきたいパネリスト、あるいは助言者を決めておられれば、どなたにということもあわせて言っていたけるとありがたいと思います。

それでは、皆様方から御質問を受けたいと思います。どなたかございましたら、お願いをいたします。

はい、どうぞ。

**○本田講師** 島根大学キャリアセンターの本田と申します。どうもきょうのお話ありがとうございました。いろいろとお話伺って、大学とか高校とか教職員を採用する際に、恐らくそういう求める人材像を、ちゃんと育てられて評価できるのかみたいところを見て、採用とか教育とかをしていかなきゃいけないんだろうなということをしごく感じた次第です。というのが、今、感想です。

2つお伺いしたいことがございます。どなたにというのはないんですけども、受ける方にです。1つは、ストレートに上がってステップアップしていく必要がありますでしょうかということ。つまり、高校から大学、大学から就職もそうですけども、あとは在学中でも転学部とか転学科とか、留学、休学ってさまざまなキャリアパスがあると思うんですけども、そこは恐らく今、日本ではあんまりできていないところだと思っています。恐らく新卒一括採用であったりという、出口のところはかなりバリアがあるので、しづらく出ると思うんですけども、その部分についてどのようにお考えかということをお伺いの1つです。

2つ目は、最近非常にアクティブラーニングということで注目度が上がっていますが、恐らく今実際にやられてるアクティブラーニングの科目は本来の定義と少しずれて、非常

に活動がアクティブなものです。つまりコミュニケーション力がかなり問われるような、ディベートグループディスカッションが多くなってるような気がしております。これが突き進んでしまうと、恐らくアクティブにそういうラーニングすることが、意欲としてできない学生・生徒さん、もしくは特性、性格としてしづらい人たちっていうのがあると思うんですけども、そこについての配慮をどの程度お考えになられてるのかということについて、お考えをお聞かせいただけると助かります。

**○小林所長** 最初のほうの御質問で。多分これから、よく私もモザイク型社会って言って。今までは成功のロールモデルっていうのがあって、偏差値の高い大学に行って、大企業に入るのが日本のロールモデルで、一生同じ会社で勤め上げるのがロールモデルだったんですが、それがもう社会的に環境が変わってきてますので、多分そういった流動性って非常に高まってくると思います。新卒一括採用は多分効率性の問題で、それやらなかったらもっと多分長期化して大変なことになると思いますんで、日本の中で残っていくとは思いますが、もう途中で採用が非常に盛んになってますので、例えば、たまたま就職する時期が厳しかった子たちは今30代ぐらいで、中小企業から大企業にステップアップしたりとか、またそこからラインを変えたりとか、そういった横の選択をいろいろされています。あとは飛び級とか編入とか、もっと出てきていいと思います。日本は過度な年齢主義で、それこそ到達主義じゃなくて年齢主義なので、学年で進行していくと。なので、飛び級でいくと、飛び級した子がいじめられるとか、本末転倒な状況になっていると。企業のほうも、ちゃんと自分で語れば、1浪、2浪、あるいは留年してもちゃんと採用するとなってますので、ここら辺は自分でどうキャリアをデザインするかっていう時代になってくると思います。今までは一括、みんな一緒っていうんじゃないくて、多分幸せの形がどんどん変わ

ってくると思いますんで、そういった自分の幸せをどうつかんでいくかというようなキャリアの教育になってくるんじゃないかなと思います。よろしいでしょうか。

○**本田講師** ありがとうございます。ぜひ、文科省とかのほうでやられてるので、そちらの方に今話をいろいろと伝えていただけると大変助かります。

○**小林所長** いろいろ頑張ってるんですけど、すみません、まだまだ力足りなくて。

○**松崎センター長** 後段のほうですね。実はすごく大きな問題だと思ってます。実際、大学でも程度の軽い適応障害の方、学習障害の方って、先生方もどういうふうに対応していかかわからない。一方で、入試でそういう人をはじけばいいんじゃないかって議論もあるかもしれないけど、それは多分間違いだろうなって私は思ってます。ですから、いろんなタイプの人がいることが多分全体の学習のためにすごくいい。そうすると、先ほど来、ジェネリックスキルがっていう話をしましたけど、あれが高い人だけをとってたらっていうと、恐らくはじかれるてしまう人の中にすごく才能のある方がいる。だから、入試は多分多様にしないといけないし、その後の対応も多様にしていけないといけない。それが、1つの大学でそういう人だけを集めるっていうこともあるでしょう。1つの大学の中に多様なこともあるでしょう。どちらがいいのかってなかなか言えないですけども、先ほどのほかの学生に対する影響を考えると、恐らく1つの大学の中に多様な人を入れるような入試があって、そういう学生さんを育てるプログラムをこれからもっときちんと出していけないといけないと、個人的には思ってます。ただ、実際にはなかなか大変なんだろうなという意味では、そこら辺は本当は国の施策として、そういうところをきちんとお金を出していくことをしていけないと、結構難しいのかなという気がしますけど。

○**本田講師** ありがとうございます。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

泉先生。

○**泉校長** ALの話ですけれども、ぺらぺらぺらぺら上手にしゃべる、活動する生徒が評価が高くなるんじゃないかっていう恐れは、私も感じています。小林さんのトークと私のぼそぼそしたトークを比べれば、圧倒的な言語能力の差があって、私はリクルートには入れないと思うわけですけども、ALの1つの狙いは、特にうちの学校なんかそうなんですけど、上手にわかったふりをするんですよ。それを本当にわからせる。ああ、なるほどそういうことだねと、腑に落ちたわかりっていうか、そういうところまで持っていくための手段が一つ、ALの目標かなと思ってまして、最後はやっぱり活動させた後、個に落として、本当にわかった、できるようになったというところを評価していくことが必要だなと思ってます。わあわあわあわあやりとりしてるところだけじゃなくて、やはり最後は個に落とすということが必要じゃないかなと思ってます。

○**本田講師** ありがとうございます。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

立上先生はよろしいですか。

○**立上校長** 広島県においてもそういうアクティブラーニングの実践っていいですか、取り組みを進めていこうとしてるわけでありましてけれども、いろんな意味でこれからという側面がありますので、だから、いろいろ学校がこう進めていく中でいろんな課題も出てくると思いますし、今、御指摘のあったような問題もこれから出てくるだろうと思うんですが、それを各学校がどのような形で具体的に考慮しながら進めていくかは、高等学校の場合についてはこれからじゃないかなと思ってます。

○**荒瀬副学長** 本田先生、よろしいですか。

○**本田講師** はい。

○**荒瀬副学長** ありがとうございます。

そのほか、御質問。

熊倉先生、どうぞ。

○**熊倉教授** 島根大学医学部の熊倉でございます。

小林先生に1点と、あと泉先生に1点お伺いしたいんですけども、小林先生には高等学校基礎学力テスト、これについてちょっと伺いたいんですけども、学力の3要素であります知識と技能ですね、このテストでCBTを用いて評価するということですが、この技能ということがどのようにこのCBTで評価できるのか。ちょっとテクニカルなことですけどもその点お聞きしたいと思うんですが。というのは、医学部のほうでも、大学、医学生ですけども、教養試験実施機構ではCBTで基本的な知識をチェックする。それから、技能に関しては、これスキルですね、診察の仕方とか血圧計のはかり方とか、それに関してはこういった記述ではチェックできないということで、オスキーといって、Objective Structured Clinical Examinationですね、実技を模擬換算を用いてしてもらってることを評価するというふうなことをしてございます。できること、スキルですね、技能を評価する、できるかどうかはやっぱり実際、ちょっと筆記試験とかではできないと思いますが、その点について、高校のこの試験の中では技能、恐らく定義がどういう定義かっていうこともあると思いますが、どのようにこの技能を評価しようとしているのか、この点についてちょっと御意見なり教えていただきたいと思えます。

○小林所長 これはですね、私が決めてるわけではないですし、ワーキングというところで今議論がされてまして、その中身が出てこないところが一番、私たちとしてもストレスなところですが、技能については議論がされていない。システム改革会議のほうでは技能ということについての議論はされてないです。つまり、知識をはかるということで、英、数、国という基礎科目についてCBTではかかっていきたいと思います。あるいは、英語については4技能をはかっていきたいと思いますということは議論されているんですが、そのほかの技術を、技能をどうはかるかは今の中では議論がされていないという認識です。

○熊倉教授 単純な話でいうと、例えばクロールが泳げるかどうか。

○小林所長 はい。

○熊倉教授 これは技能の1つだと思いますけども、これはペーパーでチェックしても、例えば右手を上げて、水に沈めて、何か口をあけて息をするとか。

○小林所長 はい。

○熊倉教授 これを書いたり、印をつけてチェックしたりとかできるんですけど、実際泳がしたら溺れちゃうとか、そういうこともあるかと思えますので、その点ですね、定義なりをしっかりと、どういうふうな評価ができるのかっていうことが必要なのかなとちょっと思ったんで……。

○小林所長 そうですね。あくまでも高校1年生のコアのコアの一番基礎の学力をはかるテストになりますので、そういった難易度の高い問題をそこで出すという想定はしていません。

○熊倉教授 はい。ありがとうございます。

それから、泉先生についてちょっとお聞きしたい点は、島根大学でも先ほどから話がございまして地域貢献人材育成入試、これを始めております。地域に貢献する人材を育成するっていうことで、地域あるいは高校から、医学部に関しては平成18年度からやってるんですけども、地域志向の学生を推薦していただいて、大学で受け入れて養成していくということでございます。医学部では年に1回、あるいは2回ぐらいですかね、高校から担当の先生に来ていただいて、送り込んだ学生がどうなっているのか、ちょっと意見交換をする場を持っております。きょうのディスカッションの目玉の1つでもあります、高大接続ですね、これをどうしていくか、どう改革していくかっていうことが1つ議論なっていると思いますが、その中でもう少し高校の先生が大学のほうに来て、高校で育成した人、自信を持って推薦してくれた人がどのように育っていくのか、本当に地域に対する意欲とか熱意、あるいは使命感をずっと持ち続けてや

っているのか。あるいは、それを向上させて  
いただけるように高校のほうからもプッシュ  
してもらおうとか、そういったことが組み  
が可能なのかどうか、その点についてお聞か  
せいただければと思います。

**○泉校長** 大学に入って、大学教育の中で力  
をつけてきた学生の姿っていうのは、我々も  
非常に見たい姿でありまして、生徒にとって  
はいいロールモデルになると思ってます。先  
般、校長協会との情報交換の場があったん  
ですけど、そこで島根県内出身の学生さん  
たちがプレゼンテーションする姿を見て  
まして、ああ、なるほどな、ちゃんと育  
ってるなと感じました。やっぱりそうい  
うところを教員も知らないといけないし、  
生徒たちが、ああ、あの先輩、島大行  
ってこんなに変わってるみたいなどころ  
を示す場はぜひつくりたいなという思  
いでおります。特に地域医療に活躍し  
ておられるようなお医者さんですね、  
ぜひ学校に来てお話しただけいたら  
いいなと思います。こちらから願  
いします。

**○熊倉教授** どうもありがとうございました。

**○荒瀬副学長** 今の熊倉先生の後段の部分  
につきましては、先生御存じだと思います  
けど、島根大学では教育・入試懇談会とい  
うことで、高校の先生方と大学の教員と  
が一堂に会していろんな意見交換をす  
るといふときに、その中で先ほど泉先  
生も言われましたけども、県内の出身  
者の状況を学生たちにプレゼンして  
もらって、どういうふうになってきて  
るかを見ていただく中で、非常にいい  
企画だというふうに言われておりま  
して、今後、この企画については進  
めていくことにしたいと思  
っておりますので、医学部からも  
ぜひ参加をしていただくと、その  
部分っていうのはある意味対応  
できる部分があると思っております  
ので、ぜひまたひとつよろしく  
願います。

**○熊倉教授** 了解いたしました。

**○荒瀬副学長** それで、先ほど後ろの方、  
どうぞ。

**○吉岡氏（学生）** 失礼します。島根大学教

育学部の吉岡です。

西条農林高校の取り組みについて、ちょ  
っと質問したいなと思ってるんです  
けど、僕の高校は、今、校長先生も  
おられたり、当時の先生もおられ  
る中で言うのも何なんですけど、  
松江北高校で典型的なチョーク  
アンドノート型の授業をしてた  
ので……。

本当にこの農林高校の授業っていう  
のは、僕が体験してきた高校の  
授業と全然違って本当にすば  
らしいなと思いました。

その中で質問なんですけど、ちょ  
っと大学入試改革とは直接関係  
ないかもしれないんですけど、  
これだけ特色のある授業を展  
開していると、高校生なので  
高校生活を送ってる中で農  
業をメインで高校のときは  
入ったかもしれないけど、  
いろんな人と会う中で農  
業という面とちょっと違  
う方向に自分進みたい  
な考えを持つ生徒さん  
って中にはおられる  
と思うんですね。そう  
いう生徒さんも含  
めてやっぱり主体的  
な学びをしていこう  
と思ったら、生徒  
さんに対するサポ  
ートっていうのが  
やっぱり必要にな  
ってくると思うん  
ですけど、この西  
条農業高校さん  
ではそういう  
生徒さんがもし  
おられた場合、  
一体どうい  
うサポートを  
してるのかを  
ちょっと疑問  
に思ったので、  
もし何か事例  
とか、こうい  
うことして  
るっていう  
のがあれば  
教えていただ  
きたいと思  
います。

**○立上校長** 御質問ありがとうございました。  
本校の場合、7学科ありまして、入  
学段階でかなりはっきりと専門  
性が出てきますから、1年生の  
スタートのときからその専門  
教育っていうものがずうっと  
続いていくことになり  
ます。ただ、その過程  
の中で、担任はもち  
ろんですけれども、  
学科の教員がかなり  
時間をかけて生徒  
との間で、例えば  
朝早く来て自習  
したり、放課後  
も自習したり  
実験したり  
という中で、  
かなりの時間を  
かけて生徒  
との間の  
つき合いが  
続きます  
ので、  
いろんな  
面で一人  
一人の  
生徒  
に対して  
かなり  
きめ  
細かな  
指導  
を進  
めて  
いる  
こと  
もあ  
って、  
余り  
専門  
性  
から  
外  
れて  
い  
く  
こ  
と  
に  
対  
して、  
多  
く  
の  
生  
徒  
が

そっちの方向へ進んでいくというわけではありません。ただ、例えばアメリカへ2回行ったような生徒が時々いて、そういう生徒は英語を勉強したいっていうことを言い出して、大学の英語のほうへ進んでいくような生徒もいますし、それはそれとしてしっかり学校としてはバックアップをして指導もしていますので、基本的には専門教育っていうことでかなり時間をかけて丁寧に指導していくということと、もしそこから違う方向に進んでいきたいという生徒が出てきたら、それに対しても丁寧に対応はしておるといふことであります。

○荒瀬副学長 よろしいですか。

○吉岡氏 はい。ありがとうございます。

○荒瀬副学長 そのほかございませんですか。はい、どうぞ。

○原田講師 島根大学の原田でございます。貴重なお話しありがとうございます。

泉先生にお聞きしたいことが1点ございまして、一番最後のスライドで配点を具体的に書いていただきまして、配点が逆になつたらという、この数字を見せていただいたときはっと気づいたんですが、果たして高校の評価がそうなってるかっていうと、恐らくそうになってないのではないかと考えております。恐らく、大学と高校の話のやりとりをすると、必ず大学に圧力が来たら、いや、それは高校までやっておる、いや、高校でやってないから大学でやってよってという言い合いがあると思うんですけど、その中で、じゃあ果たして今後高校の評価、もっと言えば高校入試とか、中等学校入試段階で、このような評価の枠組みを島根県で実施していくことが果たして可能であると考えているのか、またそうしていくべきと考えているのか、まず1つ目教えていただきたいと思います。

2つ目ですが、これはどなたにかは漠然としておりますが、高校の先生にお答えいただきたいところですが、いわゆる3つの学力は確実に提示されています。その中で、今回の発表はどちらかというと、後半の活用であつ

たり、課題発見であつたりとかつていった事項が中心であつて、それをメインに話してくれてことだったと思うんですけど、やはり1の知識、技能、それを担保した上で、2と3が発展するっていうのは文科省も明確に提示してる部分だと思います。一時期、大学入学者の学力不足は明確に問題になりました。果たしてそれが解決されたかっていうと、解決されないままアクティブラーニングとかつていう方向に話が、焦点が移っただけで、学力問題の根本的な問題は実は解決してないんじゃないかと。そこを高校の側はどういうふうな考え方で今思っておられるのか、教えていただきたいと思います。あわせて、高大接続システム改革の中で、こういった議論が行われてるのかっていうところを少し教えていただきたいと思います。

3つ目でございますが、こちらは高校の感覚を教えていただきたいんですけど、一時期、階層問題と学力が関係してるっていう議論があつたと思います。今回お示しいただいた問題っていうのは、言ってしまうと非常にお金のかかる勉強だと思います。一方で、こんなことやれって言われてもできない子もきっといるはずだと思います。そういった人たちに、高校は今どういった支援をしていくべきか。また、支援ができないとなった場合に、じゃあ、どういった枠組みでこういった学習を促進していくべきか、そこをどう考えているのかをちょっとお示しいただければと考えております。よろしくお願いいたします。

○荒瀬副学長 どなたに御質問されますか。

○原田講師 まずは泉先生に。

○泉校長 配点のことですか。

○原田講師 はい、そうです。配点について。

○泉校長 これはですね、大学が設定されればいい問題だと私思ってます、こういう学生が欲しいからこういう配点という形で提示されれば、高校としてはそこにマッチするような学生を受験させるという形になるんじゃないでしょうか。

○原田講師 質問の意図は高校入試段階では、

こういう配点になって、先生からの御意見はどちらかというと、配点を逆にしたらいいんじゃないかという御提案があったと思います。

○泉校長 高校入試ですか。

○原田講師 はい。

○泉校長 高校入試は今のところ、全て教科のペーパーテストの点数でやっていますね、一部推薦の形の入試がありますけども。

○原田講師 その枠組みが維持されたまま、大学で突然この配点を逆にするっていうのは、それ教員の側も理解が得られないし、学生もなかなか適応できないんじゃないでしょうかという御質問でございます。

○泉校長 おっしゃるとおり、小中高とつながっていくという上では、高校入試の評価基準も変えていく必要も出てくるんじゃないかと思えます、今後。今はそうはなっていないですね。おっしゃるとおりです、はい。

○原田講師 2つ目ですけど、知識や技能を担保する枠組みっていうんでしょうか、これは県単位で、高校までですと実施されてると思えますので、その取り組みについて、泉先生と立上先生にちょっと現状を御説明いただければと考えております。

○泉校長 いわゆる教科の学力っていう点では、松江北校の場合は先ほどありましたように、チョークアンドトークで徹底的にやるといふところがあって、ただ、私の目から見ると、いやそこまでやらんでいいじゃないの。基本的なことを入れ込んで、あとは持ち駒で勝負せみたいところ、その持ち駒で勝負するところもこうやってやるんだよ、ああやってやるんだよって、全部やるといふ実態があるので、そこは少し緩やかに子供たちに任せるような形でやったほうがいいんじゃないのとは訴えていますけど、今はそうはなっていないです。おっしゃるように、ペンギンの写真で見せましたけど、歩くためには足腰が必要で、これは基礎学力ですから、これはやはり外せないと思っています。ただ、じゃあ何が基礎学力なのっていうところが、実はあんまり見えてないところもあって、島根

大学としてはこういうことを基礎学力というんだっていうところを入試の問題に込めて、メッセージ性を持った入試をつくられてほしいと出されたらいいんじゃないでしょうか。今現在、そうなってると思えますけど。お答えになってないでしょうか。

○原田講師 ありがとうございます。

○泉校長 ありがとうございます。

○立上校長 配付させていただいてる資料のページ番号で言って23番と24番のところを見ていただきたいと思うんですけども、本日の発表については御指摘のように、知識、技能という側面については、特に前面に出したような形では発表しておりませんが、それが重要であることは言うまでもないことでありまして、しっかりと基礎学力っていうのを身につけさせていかなきゃいけないと。そのための方法として、そこの24ページということで振ってあるような取り組みを行っておりますので、決して軽んじているわけでもないし、しっかりと身につけさせなきゃいけないと考えています。

○原田講師 3つ目の。

○小林所長 そうですか、いやシステム改革会議というか、高大接続特別部会のほうでもやはり基本的な知識、技能はベースだろうということで議論がされています。基礎学力テストをきちんと入れて、何が一番変わってるかということ、進学率が変わったんですね。昔は60%しか行ってなかった高校にほぼ100%行くようになりましたと、ここのベースをきちんと基礎学力は上げていきましょう。これが基礎学力テストです。これ、入試にしたらから面倒くさいわけであって、そうではなくてこれは質の保証ですと。大学は、大学も1990年の大学進学率って25%なんですよ、つい最近じゃないですか、わずか20年ぐらいで進学率が倍になっています。ある意味裾野が広がっていると、学力の下方拡大が広がっていると思えますので、これは大学側が受け取るほうとして定義をしてくださいという形になります。もしかしたら島根大

学が出す学力、学力というのが先ほど泉先生がおっしゃったどの学力のことを言ってるのか、いや、うちは本当に教科型を一点刻みでやりますよっていうなら、そういう大学だというふうに外から思われるだけであって、それは大学側がミッションに合わせて設定してくださいという形になります。ただ、国としては全体の底上げをしていくということで、前回の学習指導要領の改訂はゆとりからの脱却で、小・中学校がメインでした。今回は高校を変えていこうということで、高校の中身と評価の仕方を変えていくと。これを大学とつないでいくという形で、全体の底上げと、あとは接続を考えるというベースの考え方になっていると御理解いただければと思います。

○泉校長 3番目の御質問については、私もいわゆる経済的バックグラウンドが、バックボーンがある学校は強くなって、そうでない学校は衰えていくということは危惧しています。例えばSSH、SGHをやっている学校は、SGUに指定されたような大学とつながりやすいと思います。ですから、そこに何ていいですか、二極化とまでは言わないけども、何か格差が生じるんじゃないか。例えば業者が英語のその4技能テストをiPad使ってやったりしてるんですよ。それうちでもやらせてくれないかと、いや、SGH校でしかやらせませんみたいなこと言うんですよ。そうすると、まあそういうところでも明らかに格差が出てきたりしますよね。それを何とかしないといけない、お金を使わないで何とかしないといけないと思う一方で、どっかからお金をとってきてやろうっていうことも必要になってきて、なかなか難しいんですね。おっしゃることは、私もそういうふうに感じてます。

○荒瀬副学長 ありがとうございます。

○原田講師 ありがとうございます。

○泉校長 はい。

○荒瀬副学長 それでは、ぼちぼちと思いますが、もうお一方、もしございましたら。

はい、どうぞ。

○川路教授 教育学部の川路と申します。今

日はどうもありがとうございました。

聞かせていただいて、松江北高校やそれから広島の高校の実践を聞いていますと、こういう学生さんたちが大学に入ってくるんだったら大学入試は何のためにするんだろうかと、そういう高校生だったらみんな入ってもらってもいいのにと感じておりました。

大学入試改革というのは全部入れるのが一番いいんじゃないだろうかとという前置きをさせていただいて、逆にうちの学部170人です、170番と171番の違いを、泉先生のこのA、B、C配点をどういうふうなバランスにしても、結局170番と171番はできてしまうので、そこあたりはどう考えればいいのかというのがありました。結局、どこに力を入れても170番と171番はいるということですね。

逆に言いますと、2つあるんですが、1つは、それだと私どもにも大学にもディプロマ・ポリシーというのがあるって、入ってくる学生さんが学力が高いのか、志が高いのかによっていろいろあるんですけども、最終的にうちの学部で学ぶべきことが学び切れなかったら、結局大学を卒業できなかったりとか、留年するっていう社会ができていかないと、結局入ってきたところの問題じゃなくて、出ていくときにディプロマ・ポリシーはあんまり学び切れてなかったけど、とりあえず大卒っていう資格をあげましようかっていう社会がずっと続いていくと、どうしようもないんじゃないだろうか。逆に言うと、大学で退学していったり、留年していく学生さんがふえていくってことをどう考えるかということが1つと、あともう一つは主体的な学びをできる子たちが今日紹介されてますけど、できない、先ほどの言うと、前の30%の席に座る子と後ろの70%の追従型の学習、誰かが一生懸命やってるから私もあそこのグループに入ったらできるんじゃないだろうかの的なのでも、学びはできてないとは言えないと思いますので、そういう子たちの学びと、それから、その子たちがどうやったら主体的にな

っていくの、それは大学の仕事なのか、それとも高校側とつなげていくことなのかっていうことについてちょっとお考えがあれば、どなたにというわけではありませんが、お聞かせいただければと思います。

○荒瀬副学長 そのあたり、どなたか。

○泉校長 主体性を育むというところは、高校の仕事でもあるし、大学の仕事でもあると思います。やっぱり点数で刻んでいくと、おっしゃるように、ぎりぎりのところで1点差で落ちたり通ったりっていうところが出てくるのは、選抜をするわけですから、どうしてもそういうことは出てくるのかなというふうに思いますけども、公平性とかそういうところが問題になりますけど、私の感覚としては大学入試が、これ入社試験とは言わんけども、うちの大学に入ってくれたら、大学自体を活性化してくれるような目の前の学生だなというような者を直観的にもう採用すると、入学させるというところ、そこら辺を少し緩やかにやっていく形に、今なってきたあるのかなと思ったりしてます。じゃあ、それ主観が入って選抜するようになるので、公平性はどうやって担保するんだっていうところが出てきますが、しかし、それはそれで僕はいいんじゃないかなっていう気はします。

○荒瀬副学長 よろしいですか。

○松崎センター長 出口のところの話、多分、あと小林さんから話していただいたほうがいいのかと思うんですけども、恐らく今まではやっぱり入口の問題のほうが大事で、出るほうはゆるゆるにしてるところもあるんかもしれない。大分、昔よりはきつくなってる。本来だったらあるところに達してなかったら、それは退学させるなり、途中で移ってもらなりってしないといけない。しかし今、留年させる割合が多かったり、退学が多いと、大学にペナルティー来ますね。文科省は何をさせたいのか、何をしたいのかっていうのがちょっと疑問ではあります。そういう現実がある中でやっていかないといけないのが少しもどかしいんですけど、本来だったら、小林さ

んの話の中にあっただようなナンバリングみたいなもので、自分が修得した単位っていうのはきちんとこの内容についてこの評価であります、それを持っていろんな大学に移れるっていうふうになれば、自分はここじゃないんだっていうことで移っていける、そういう自由度が出てくるんだらうと。ただ、それになるにはものすごい時間かかるんじゃないかな、でも、そうしていかないといけないじゃないかと思っています。

○小林所長 ありがとうございます。

先生のおっしゃるとおりで、本当に、先ほど入学の国から卒業の国って言い方をさせていただきましたけど、やはりアドミッション・ポリシーからつくるってことはあり得なくて、ディプロマ・ポリシーがあって初めてカリキュラム・ポリシーがあって、アドミッション・ポリシーがあるというふうになりますと、そこがちゃんと連続していることが重要で、今の文科省の概算要求でこの高大接続改革で70億円ぐらい出てるんです。その中の30億円は大体この入口、中身、出口を一貫して、卒業までを厳格化していく形の流れに予算申請がされてます。そういったことをちゃんとやるところに予算をつけていこうという、文科省の意図は見えるかなと思います。ただ、これが、じゃあ一、二年でできるかというときとできなくて、10年ぐらいかかってそういった形でできていくのかなと。多分、学位の国際通用性ってこともこれから出てくると思いますし、もうシンガポールなんかは、世界の大学と交流するためには世界ランキング何位までじゃないと交換留学受け入れないみたいなことを言い出ししたりしてますので、それがいいかどうか全然別にして、大学のほうでも質の保証というのをしていくためには、卒業要件の厳格化っていうのは避けられないと思います。そのためにやっているのが文科省がちぐはぐだっていうのであれば、ちょっとそれを言わないといけないですねっていうところだと思っています。

○荒瀬副学長 川路先生。

○川路教授 ありがとうございます。

私自身は主体的な学びができる子はとてもいいんですけど、追従的な学びができる子もいいんじゃないかなというふうに、個人的には思っています。そんな子たち、主体的な学びだけの子がいると、それはそれでまた大変な世の中になるかなという気もしていますので……。そういうバランスのある子供さんたちが大学に入ってきてくれて、いろんな学びができればなというふうに思っているところです。ありがとうございました。

○小林所長 そうですね。先生のおっしゃるとおりで、やはり今2・6・2っていうふうに言われてんですね。大体2割がいろいろやっていて、6割がフォロワーでついていて、2割はどうかなっていうふうに見てる。この比率を上げていきたいというのが多分方向性だと思います。ただ、そうじゃない子たちでも、入ってきた学生はきちんと面倒を見るというようなことが先ほど言った大学のコミットメントになってくると思っていますので、それがきちんと高校にフィードバックいくシステムですね、さっきおっしゃったような、

報告というか、わざわざやらなくても、学生が自分で高校に行ってこんなことやってるんだよっていうような、先生に報告するようなバックトゥースクールっていつてるんですが、そういうような仕組みっていうのもつくられたらいいんじゃないかなと思います。

○荒瀬副学長 川路先生、よろしいですか。

○川路教授 ありがとうございます。

○荒瀬副学長 まだ御質問等あろうかと思えますけど、ここで締めさせていただきたいと思えます。まとめは非常に難しいのでいたしません。解がいろいろあるということにさせていただきたいと思えます。

それでは長時間御出席いただき、御質問いただきましてありがとうございます。いま一度3人の先生方、発表者のパネリストの方、助言いただきました小林様に、もう一度大きな拍手をお願いできればと思います。

どうもありがとうございました。

それでは、これでシンポジウムを閉じさせていただきます。長時間ありがとうございます。

# 付 録

---

- アンケート結果
- シンポジウムポスター

# 平成27年度大学改革シンポジウム 事後アンケート結果

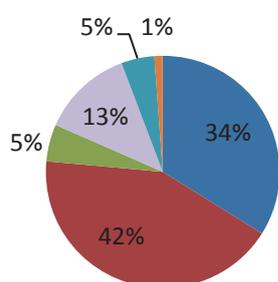
2015/11/6（金）実施

参加者	179
回答者	116
回答率	65%

## 参加の動機

1. シンポジウムの内容に興味があった	59
2. 大学改革のあり方について	74
3. 大学の取組を参考に	9
4. 高校の取組を参考に	22
5. その他	8
未回答	2

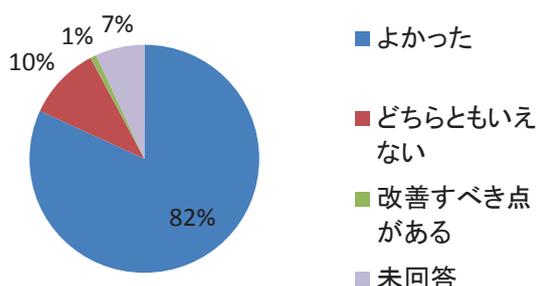
## 参加の動機



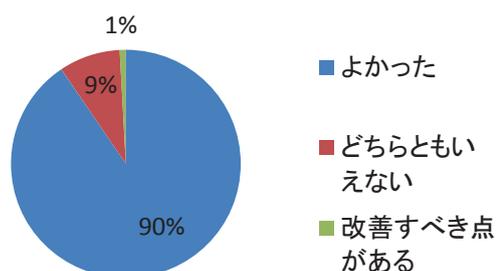
- 1. シンポジウムの内容に興味があった
- 2. 大学改革のあり方について
- 3. 大学の取組を参考に
- 4. 高校の取組を参考に
- 5. その他
- 未回答

	シンポジウム全体	基調講演	パネルディスカッション	総合討論
よかった	95	105	81	64
どちらともいえない	12	10	24	16
改善すべき点がある	1	1	3	3
未回答	8	0	8	33
合計	116	116	116	116

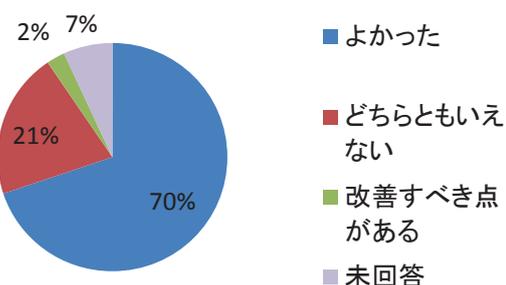
## シンポジウム全体



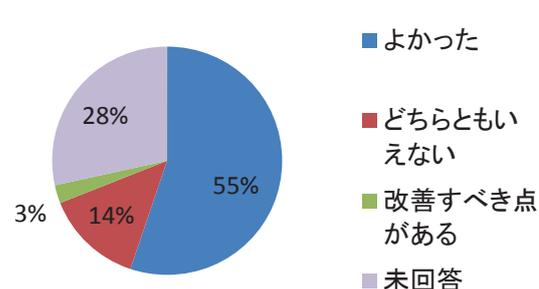
## 基調講演



## パネルディスカッション



## 総合討論



# 「大学入試改革」どう変えるのか

—主体的な学びを実現し、広く社会に貢献できる人材を育てるために—

国内では、生産年齢人口の急減、産業構造や就業構造の転換、地方創生への対応等、新たな時代に向けて大きな社会変動が起こり、国際的にも進展するグローバル化・多極化や情報社会への転換の中で、自ら問題を発見し、他者と協力して解決していくための資質・能力を育む教育が、今、急速に重視されています。

「大学入試改革」は大きな社会的関心を集めていますが、その本質は、「入試改革ありき」ではなく、高校教育・大学教育・大学入学者選抜の改革を一体的に進め、人材を育成(人づくり)することにほかなりません。

このたびの島根大学発の大学改革シンポジウムでは、地域や社会の人的・物的資源等をどのように生かして高校教育を実践しているのか、また、大学は、地域社会の豊かな学びのフィールドを生かして高校教育の成果(たまもの)ともいえる学生をどのように育成しているのか、そのために入試をどう変えていくのか等について、意見交換し議論するものです。

ぜひ、ご参加ください。

## 開催日 the date

# 11.6

【FRI】

開場 12:15～  
開演 13:00～16:40

会場 くにびきメッセ 小ホール  
(島根県松江市学園南1丁目2-1)

参加費 **無料**

定員 **160名**

※申込みはFAXもしくはホームページより行ってください。  
申込み締め切りは11月5日(木)15:00までとなります。  
※定員になり次第申込みを締め切らせていただきます。

## プログラム program

### 第1部

●開会あいさつ【島根大学長 服部 泰直】  
13:00～13:10

●基調講演【高大接続改革で何が変えるのか?】  
13:10～14:10  
リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員・小林 浩

14:10～14:20【休憩】

### 第2部

●パネル・ディスカッション【高大接続から入試改革を考える】  
14:20～15:50

パネリスト/「取組事例紹介(各20分)」  
1.島根県立松江北高等学校 校長・泉 雄二郎(島根県公立高等学校長協会 会長)  
2.広島県立西条農業高等学校 校長・立上 良典(広島県高等学校長協会 会長)  
3.島根大学地域課題学習支援センター長・松崎 貴(島根大学生物資源科学部 教授)

助言者/  
リクルート進学総研所長/リクルート「カレッジマネジメント」編集長  
文部科学省高大接続システム改革会議委員・小林 浩

コーディネーター/  
島根大学教育・学生支援担当副学長・荒瀬 榮

15:50～16:10【休憩】

●総合討論 16:10～16:40

## お申込み・お問い合わせ先

主催：島根大学 ■共催：一般社団法人国立大学協会

島根大学 教育・学生支援部 教育・入試企画課

TEL0852-32-6073 FAX0852-32-9726

[E-mail] epd-nnyushi@office.shimane-u.ac.jp [HP] http://www.shimane-u.ac.jp/

【お申込み専用HP】  
http://www.leaf.shimane-u.ac.jp/enquete/no/sympo



国立大学法人 島根大学 教育・学生支援機構 入学センター 編

---



人とともに 地域とともに  
国立大学法人

島根大学

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060

TEL:0852-32-6625 FAX:0852-32-9726

URL: [admissioncenter@office.shima-u.ac.jp](mailto:admissioncenter@office.shima-u.ac.jp)